每月一回

家庭雜誌

十五日發行

第百拾貳號

大日本女學會

會員募集廣告

總裁小松宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵夫人

●本會賛成員は有栖川宮大妃殿下　華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方八十八名

趣旨 本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義錄を發行し入學すべき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應じ輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期す●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれば今や新に學科を增設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に會員を募集す志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第一卷より送本差支なし●●本會講義錄は女學講義と稱し畏くも　皇后陛下の御覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月三十錢束修三十錢●會則希望者は郵券貳錢添へて申込みあれ

學科及び講師 ●修身(女子修身談)細川華族女學校長が從來同校に於て演說せられたるものに係る(禮法)佐方女子高等師範學校教諭●國語(國文)關根學習院教授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長●漢文、十屋華族女學校教授●歷史(日本歷史萬國歷史)大森文學士●地理(日本地理萬國地理)志田文學士(地文)脇水理學士●理科(物理化學)近藤工學士(博物)石川理學博士(生理衛生)未定●家事(家庭教育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校教諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士●割烹、御園華族女學校教員●小兒心理學、下田文學士●裁縫渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校教授●音樂、未定●手藝(活花點茶)田邊東京女學館講師●史叢、下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三大家●お伽話、漣山人●詞藻●質問應答●雜錄●雜報

第二卷既に發行せり

東京市麴町區土手三番町二十八番地　**大日本女學會**

奇應丸

定價○瓶入五十錢○大包廿錢○中包十錢○小包五錢

●主治効能●

御小兒衆の虫のやまい○五かんきやうふう○胸いたみ○はら下り○しやくつかへ○船車のよい○酒の二日よい○はしか○ほうそ○産前産後はよろしからず

◎効驗の顯著にして而かも賣價の低廉なるは普く諸君の知らるゝ所願くは御試用の上倍々御高評を賜らん事を伏して願上候

東京日本橋通一丁目（電話本局四百七十五番）

白木屋

大村彥太郎謹製

特約店

東京市神田區鍛冶町　大木合名會社
東京市上槇町中通　安川榮次郎
東京市銀座一丁目　佐々木玄兵衛
大阪市東區道修町　賣藥御賣會社
其他全國の賣藥店に差出し有之候

謹賀新年

誠に舊年中は特別の御愛顧を蒙り難有奉萬謝候尚本年は舊に倍し御引立の程偏に奉希上候

白木屋

吳服店
洋服店

●電話本局四百七十五番

家庭雜誌

定價表		
一冊	拾錢	拾一錢
六冊	五拾七錢	六拾三錢
十二冊	壹圓八錢	壹圓二拾錢
	（金前）	（市外郵稅共）

廣告料 一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌 毎月一回十五日發兌

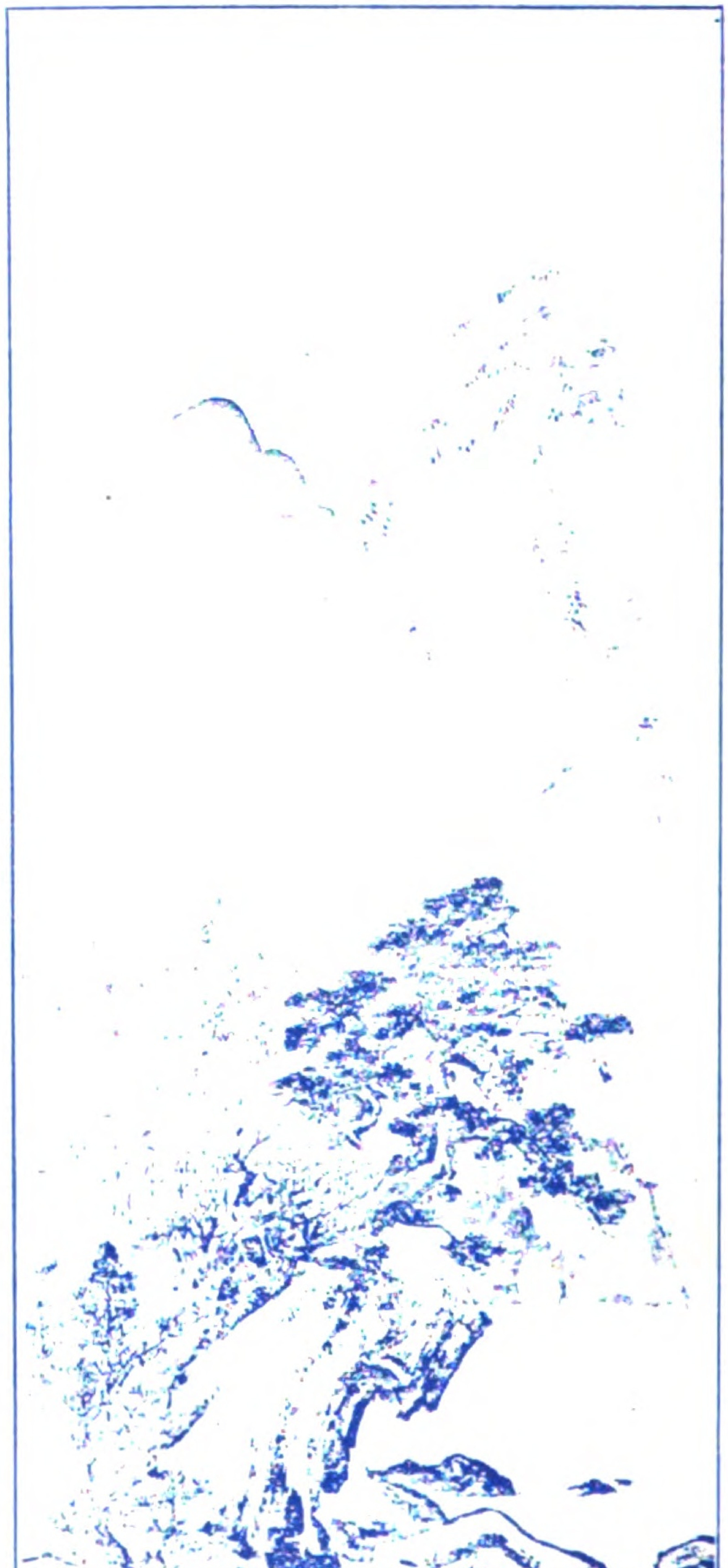
本社電話番號本局七十番

發行兼印刷人 吉崎圓吉 編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治三十一年一月十五日發行
家庭雜誌第百拾貳號

目錄



米僊筆蓬萊山



小蘋女史寄畫

小川一眞製

家庭雜誌第百十二號
（明治三十一年一月十五日發兌）

社説

他人の身の上を考ふ可き事

蘇峯生

事小なるか如くして、極めて大なるあるあり。人の世に立つや、家にありても、社會にありても、將た國にありても、能く〳〵他人の身の上を考へねばならぬなり。斯く爲せば、他人には迷惑は掛けぬか。斯く爲さゞれば、他人は困りはせぬか。此等の用心は、須臾も忘る可らず。若し忘るれば意外の失策を來すぞかし。」

例せば同窓の二學生ありとせよ。一人の學生が、精神を凝らして、作文に餘念なきに、若し他の一人が、放歌高吟するに於ては、如何に作文の思想を攪されて迷惑を被る可きぞ。若し其の學生にして、他人の身の上を考へたらんには、如何に放歌高吟爲し度くありとも、他人の耳元にて、さる無遠慮の事はなさゞる可き筈にあらずや。

茲に遠路に疲れたる旅客あらんに、彼が漸く其の脚を伸し其の神を休めんとしつゝあるに。襖を隔てたる隣席に於て、三味線を彈くやら、踊るやら歌ふやら、更深くる迄、騷きに騷く時に於ては、如何に彼は其の心なき所業を喞つならむ。

滊車の旅客雜沓するに際し、己れ一人の天下ぞと云はん計りの風情にて、場所を占斷し。他客の坐を得ずして佇立しつゝあるに關せず、然も其の他客は、老人とか、婦人とかと云ふ、特別の保護を要する人たるに關せす、己れは鞄やら毛布やらを坐の左右に並へ、靦然として顧みざるか如き、如何にも他人の身の上に就て、思ひやりのなき作爲にあらずや。若し斯る場合に於て、

せめて其の手荷物を坐より取り除き、少しく蟹の如き蟠りたる膝を縮め。他客の坐する地を與へたらんには、如何に其の擧動の美はしかる可き。又た或は特別の保護を要する老人抔に對しては、若しさる餘地なければ、己れは坐を立ちても、其人に讓りたらば、如何に其の態度の立派なる可き。余は實に斯る例を多く見度と思ふ。

大なる事は、人〳〵注意して修飾すれとも、小なる事には、却て其の本色を暴露すること多し。世には紳士とか淑女とか申す方々の、却て日常の些事に於て其の下品なる、野鄙なる擧動あるは、甚た口惜しき次第にぞある。下品とか、野鄙とか申すは總ての事を手前より割り出す結果と知る可し。兎角主我的の心程賤しきはなく、利己的の擧動程陋しきはあらず。

一家に就て語れは、主婦たるものは、別して他人の身の上に就ての思ひやりの廣く且つ深きこそ殊勝なれ。例せは御客には、種々の御馳走をなすも、供待の車夫には、火鉢すら與へす、茶すら與へざるか如きは、一寸としたるとながら、何となく主婦の心のさむしきを表するものにあらずや。之に反して一碗の澁茶さへ、一杯の冷水さへ、寒さ暑さの場合に應する心懸けは、如何に不言の裡に、難有と感す可きぞ。

紳士と云ひ淑女と云ふは、其の日常の言行擧動の、他人の身の上を慮かり考へて。成る可く迷惑にならぬ樣、成る可く他人に好都合を與ゆる樣心掛け、且つ之を行ふ人をこそ申すなれ。賢人と云ひ、君子と云ふも、亦た此の如きのみ、

英國の倫敦に於ては、若し誤りて途上他人に衝き當りたらんには、最も先きに『失敬御免』と詫びる人を紳士の擧動ありと申すと聞く。是れ孰れより過りて衝き當りたるかを吟味する迄もなく、先の謝辭を陳ぶる人を、社會は紳士として待遇するなり。我が東京に於ては、

新年早々途上衝き當りたりとて、双方より言ひ募り、遂に喧嘩の末、小刀にて殺害したる漢ありと聞く。寔に苦々敷次第ならずや。余は車夫やら鳶の者抔が、途上にて一寸したる觸着より悪口雑言するを聴く毎に君子國の風俗として、甚だ面白からず感しぬ。併し彼等は詮方なしとするも、世の紳士淑女達は、何とか他人の身の上に考へ及び、餘り淺間敷、はしたなき擧動なき樣希ふなり。是れ必らずしも難きとにあらず、己を推して人に及ぼす也。己が欲する所を人に施す也。己が欲せざる所を人に施さゞる也。

國民の禮節

個人の品格にして相別るゝ所以のものは何物ぞ、個人に於ける禮節の有無と好恰と不好恰とに由るにあらずや。國民の文野にして相別るゝ所以のものは何物ぞ、國民間に於ける禮節の有無と其好恰と不好恰とに由るにあらずや。

果して禮なきの人之を野人といひ、禮あるの人之を士君子となすと共に、禮なきの國民之を野蠻の民といひ、禮あるの國民之を文明の民となすとせば、國民の禮節なるもの、亦決して輕々に看過すへきにあらざる也。矯作せる禮節は所謂虚儀虚禮のみ、徒に事を爲すに摩擦力を多くするに過ぎずして、勿論人間の活動を妨ぐることとなきにあらず。而れとも至情に發して眞實且つ易簡なる禮節に至ては、則ち所謂秩序なるものにして、事を爲すに先後緩急の次序を明かにし、混雜衝突を來すの要なからしめ、無益の手數をなすなからしむる所以たり。啻に摩擦力を多からしめざるのみならず、國民眞成の進歩を促すものにあらずや。

世界何れの國と雖、苟も文明國として眞成の進歩繁昌を來しつゝある國民は、それ／＼に混雜衝突を來さず無益の手數を要せざるだけの秩序なるものありて、法

律以外別に社交的に國民を制裁せざるはあらず。

我邦に至りては、泰西文物の一齊輸入により、舊秩序を破りて新秩序成らず、頗る變則不調子の進歩をなし、其間往々に混雜衝突を免れず、往々に無益の手数をなすことも免れざりし也。其有樣は遠く例を求むるまでもなく、新橋若くは日本橋の街頭に立つこと五分時間ならば、明に其光景を見得べく、老弱男女右往左往し、或は走るあり、或は緩歩するあり、時々人力車の衝突を來し、時々人と人との混雜を致し、老者にして往くあるも道を譲るあらず、婦女小兒にして來るあるも之を扶くるなし、其不調子不揃ひなること、寧ろ驚くべからざらんや。

萬般の事此の一小寫眞を見て推測し得べきが如く、堂々たる學者紳士にして、車夫馬丁も躊躇する程の野鄙なる語を以て一國の政治家を嘲るあり、立派なる政治家にして、平和の日に交親國を罵ること戰時の敵國に於けるよりも甚しきあり、此くの如きはもと一個の瑣事にして、而も罵らるゝもの嘲らるゝものに何の損する所もあらされども、罵るもの嘲るものに取りては其品格を損すること甚しく、亦一國民の品位にも關することなからず。新文明の國民を以て自ら居るものにあるまじきの所業ならずや。

要するに明治の天下も既に三十年にして、宜しく新秩序を定むべき時は來れり。最早狼狽するを須ゐざる也、混雜するをも須ゐざる也。極東の大帝國民は極東の大帝國民たる禮節を有し、着々として所謂秩序ある進歩をなさんこと、吾人の切望に堪へざる所也。

論説

婦女の道

野口勝一閲
金成磐峰稿

(下) 母となりし時の心得

家庭の坂を築きし妻は、既に子を生ふけ、今は母となりて、その子を養育することはなりぬ、母となり、如何にして賢母とならんか、良妻たるものが能くその子の養育の道に力を盡して、怠たらず、而してその子の一生幸福なることを願ひ、平生能く、敎へ育てゝ、妄りに愛に溺れず、愛に過て、反てその子の一生を過らしむることなきを申すなん。

子は三界の寶ぞかし、子なければ如何に寶ありとても、末期の水、一滴も惠むものなけん、如何に子は可愛きものぞ、如何に子は寶ぞかし、左れど唯ゝ子を愛し、愛に溺るゝは、子を愛するにあらで、其子を惡みその子を賊ふものに候、子は大切なるものなり、子は可愛きものに違ひなければ、能く敎へ能く育つるこそ、母の大なる務めなれ、

子は胎内より、母親の感化を承ること多く、従て母親に肖る所多ければ、古しへより、賢き母はその子の胎内にあるときより、能く敎へを爲せしとあり、されば胎内の子と雖とも、懷妊せしより、四ケ月を過きなば、種々の感を生ずるものに候へば、常にその身を愼しみ、行ひ正しく、精神爽やかにして、漫りに怒り恨み、或は鬱々苦勞物案しなとすべからず、母の行ひ母の心、或は母の食物なんとの惡しきものは必らずその子に現はれ、其子をして、あたら無慈悲の間に終らしむるものに候、愚痴不具の子多くは、懷妊せしとき災難等に逢ひて、非常に心配せしか、又は平生睦ましからさる、

夫婦の間に生るゝものに候へば、見るもの聞くもの、總てつゝしみ、芝居物見は元より申すまでもなく、悪しきことなれども、時々遊山散歩などして、氣を養ひ、心を樂しましめ、運動なども度に適ふて、爲すこそ、最も宜しけれ、

出産の後は、別して能くその子の衛生に心を注ぎ、怠たるべからし、假令ひ乳少しとて、乳呑子に早く食物を與ふるは、その子の衛生を害するものにして、中には食物をかみくだきて、與ふるものあり、又小兒を年老ひたる人と共に寝かしむるものあり、是れ誠に悪きことに候、此等は皆其子、成長の後、健かならずして、多くは病身となり、一生人の厄介となる不幸のものとなるに至る、左れば乳母を擇ふにも、その血統、人となりは、申すまでもなく、其母と同年位のものか、その母より年わかきものを擇ひ申すべし、

無邪氣なる愛らしき其子は、稍々長じて、母親の顔をも見知り、少しく智慧つきて笑ひ語りするに至らば、母は常に顔を温らげ、静かに優しくして、良き心、親しき情を養ふべし、假令ひ腹立たしきことあり候とても、言葉暴らく、顔色を變るが如きことなく、苟くもその子をして、善からぬ習はし、悪しき癖などに染ましむべからじ、子守乳母などは多くは、この理を知らざるより、其子の天性を曲げて、不善のものに陥らしむると、往々これあり候、子は水の如く、且つ無色にして、其容るゝ器の方圓に従かひ、其染むる色に依て、彩るものなれば、能く此理を訓へ聞して怠たるべからず、

その子少し成長しなば、善き友を撰び、交はり遊ばしむべし、昔し孟子の母は、三たび家を遷してすら、尚ほその交り遊びの友を擇ひたりしと、交はる友、又は下女下男の習はしより、遂徒つらものとなり、不行儀のものとなして、人に憎まれ、親の命をも守らさるに至

るべし、總じて可愛さ儘、その子の言ふに任して、妄りに錢など與へ、賺さんがまゝ物を與へんと言ひて、與へず、泣くがまゝ、泣きを止めんとして、恐ろしき謎言など語り聞すべからず、子を欺むき子を威すは、誠に悪しきことなれば、誡しむべきことに候、人は習慣ほど大切なるものなく、習はしは、子の時よりよきはなければ、母たるもの常に規律正しく與ふへき時には與へ、禮言ふべき時には、禮言はし、勉め遊ぶべきときには、勉め遊ばしめて、能くこの習慣に染ましむべし、

若しその友など、來り遊ばゝ、我子の如く取扱ひて、假令ひ賤しき、ものとても笑ひ陋しめ、もし又過ちあらば、我子人の子の差別なく、靜かに敎へ聞かして、叱り懲すべからず、その子遊びに紛れ、又心に欲せさるがまゝ事を爲さゞるとて、使ひせさるとて、强て之を爲さしめんとて、打ち敲き抔するは、萬々悪しきことに候、

その子既に學校に入るの年に至らば、その子の性質に相應するの學問、適當するの業を敎へ授くべし、其子の好まざる所を强て授け候とて、更にその甲斐なく、此より無慈悲なることなかるべし、その子の長ずる所を見て、敎ゆるこそ、大切なれ、子を敎ゆるは、獨り學校の敎へにのみ、一任すべからじ、家庭の敎へこそ、肝要なれば、その子學校より歸りなば、爲さしむべき用事をば濟さしめ、もし暇あるとき、夜な夜な抔には、日日學校に於て承けし日課を復習せしめ、且つ古しへの名高き人の話し、人たるの道、その他身を修むることを語り聞かし申すべし、

最も言ふべからざる樂しみは、實に麗はしき陰日向なき家庭の樂しみにして、家庭の樂しみより、樂しきものはあらじ、この快樂こそ一家團欒の間にありて、皆打解け面白く笑ひ語り、共に飲み倶に食し、互に慰さ

め勞はりて、一點の曇りなき、實に此の流るゝか如き、快樂の裡より賢こき人物ぞ出るなれ、然るに愚かなる母は、このたのしき家庭をして、一の地獄たらしめ、時々この裡より叱り罵しり、果ては子女を打たゝき、子女の泣聲を發せしむるとあり、偶々樂し氣なるとありとも、卑しく猥らなるとにあらざれば、浮きたる忌はしきとともに候、此る家庭よりは、我家庭を去りて、夜遊びを爲し、他の家に泊り、甚たしきは、墻を越て走るか如き、子女を出すものに候、如何に情けなき、無慈悲のとならずや、その子女をして、決して夜遊び、或は他人の家に泊るか如き、良からぬ習ひに陷り、染ましむべからじ、

子女數多あらば、兄たりとて愛し弟たりとて、憎み彼を惜み、此を愛するか如きとなく、何事も同一にして、決して偏るべからじ、其兄弟をして、中睦ましく、相憐み相救ふの情を養ふこそ、肝要に候、子女の幼なかりし時に、同じ縞色の着物など着せしむるは、誠に樂しく覺へ候、子女の時に喧嘩などするは、大抵家內の不取締りと無事に苦しみしとより起るとなれば、母たるもの常に家內の取締りよく、家具の取亂れざる樣、心掛け申すべし、家內の不取締り家具の取亂れたるは、子女をして事に怠たり、肆まゝなるものたらしむ、又暇あらば手細工等を授け敎ゆべし、手細工ほど家庭をして和らき、平かならしむるものはあらじ、且つ子女をして、時々下男下女と供に、事を勉め働かしむべし、成長して後、家を持つに至らば、能く一家を治め得べし、人を使ふに至らば、巧みに使ふを得べ けれ ばなり、

その子女、既に成長して、嫁又は婿を迎ふるに至らば、能く擇びて迎ふべし、假令ひ如何なるとあり候とても、親戚身內のものより、迎ふべからじ、已に迎ひ入なば、嫁たるもの、婿たるもの新らしき家庭、異なりたる家

風の理に入りしなば、如何に氣遣にしきか、如何に心を痛むるか、知れざるべし、左れは母たるもの、最初に於て、家風抔敎ゆるとは、能く敎へ聞かして、隔てあるべからじ。左れと初めその心をも知れざるに、狎れ狎れしく猜嫌なと取りて、反て心を見拔れ、其命令をも聞かれずして、後日の憂となり、後悔の種ねとなるものあり、漫りに褒め愛し過きて、後日秋風立て追ひ出すが如きものも、世には少なからじ、

婚姻は嬉しき樂しきものと思ひしに、さはなくて、反て恨めしきとに覺へ候、左もありなん、婚姻せしものを見るに、其三つ一つは、離婚するの不幸を見ればなり、如何に忌はしきとに候はずや、こは何の故なるにや、之を詮し來れば、多くは舅姑先つ母たるものが、その世話をやくとの、餘りに過くると、緣組を爲すの前によく、擇び見ざると、婚姻の仕方のよろしきを得ざるとにあるなめり、母たるもの誡に心を用ゆべきとに候、

世にはその子女の身に毫も敎へなくして、徒らに衣裳道具なんとにのみ、心を入候て、嫁婿のとまでも、彼れ此れ云ひ語るものあり、之れ大なる過りにして、子女を辱かしめ、わか身も大なる耻を受るものに候、藝は身を助くと、子女に一の藝能あり、子女の身に敎へあることそ、母の名も高けれ、子女も亦之に過ぎし幸福ぞなけれ、

右は婦女の道しるべとして、常に守るべき、務むべきの道に候、凡そ婦女の最も愼しむべきは、息女の時にして、息女の時に、已に淑女と愛せられなば、長じて後、能く家を治めて、良妻と慕はれ、能くその子女を養育して、賢母と申されん、左れば婦女たるもの、息女の時におて、能く愼しみ勉めて、この令き名を待んとをしばしも忘るべからず。

教育上男女の別

西谿

濱尾文部大臣は、泰西にても、多年の疑問に屬せる所の、男女學生の混同教育をば、有害なりと解決せられ、客臘、訓令第十二號を發して、男女殊別教育の方便を開示せられたり。

蓋し古來之を非認したる諸説を求むるに、獨逸國の輿論たる「男女は先天より資性を異にせるを以て、教育、若くは修練の目的も、亦た固より異ならざるを得ず。故に、女子に對するに、男子に對すべき所の、教授の材料、訓練の方法などを以てして、いかにぞ順應するの理あるべき。若し強ひて之を同じうせんか、其の初程には、男子と歩々相駢びて進むを得、且つ事によれば、男子よりも一段速かなる發達を爲し得べきも、最後に於ては、必ずや女子の才能は、その齢の加はると逆比例す可く、幸ひにして、左なくとも、修學の爲めに、其の身の健全を害はざることなけん」と唱へらるゝを初め、此の他之に類したる説に、

「女子には、一種特別なる優美の性情を育成するの要あり。然るに、兩性をして相混在せしむるときは、女生は、常に男生の粗暴なる所作に同化せしめられて、決して彼の温々たる淑德、窈窕たる態度を得しむ可からず。又た男生に於ては、女生に接近したるが爲めに、何の利益かあらん」

「男女の兩性相接近せば、性欲の發動を促がすの機會多きは必然なり。品行を傷ふ所以、焉れより大いなは莫し」

など有りて、思ふに、此等の理由こそ、右の訓令中に「各ゝ其の性質、慣習と生活の必要とに應じ、最も適切なる方法を以て、之を教育せんことを要す」と示されたる所以なるべきか。

さはあれ、非殊席論とて、又た強ちに排斥するを得ざ

る理屈多し。即ち左の敎者を見よ。

（一）　兩性相接せるときは、男生の粗野なる風儀は、女生の爲めにおのづから、制限せられ、其れと同時に、女生は、愈々寛舒自若の品性を開展す。

（二）　兩性の混在は、互に講學上を調和し、敎授上の便宜、亦た從つて生ず。即ち女生の概ね嗜む所は、文學、技藝の如き感情的の者に存し、男生の多く好む所は、數學、理科の如き理屈的の者に在り易きを、其の傾向をして、甚だしきに至ざらしむることと是れなり。

（三）　男生にても、女生にても、專ら同性のみと交際せるときは、想像力のみその勢を逞ましくし、之を抑ふるに足るべき、方正なる言動を馴致しがたく、從つて性欲の發動も、一段早かるべき理りなれば、師父の監督も、十分に嚴密ならざるを得ず。然るに、男女比々同居せるときは、性欲の萌發を後れしめ、且つ冷淡ならしむる所以となる。

（四）　男女相混在するときは、互に知識の鋭鈍强弱情操の高卑、醜美等に關して、指彈又は羞惡することと切なるに由り、爲めに人物の眞假を識別する所の鴻益有り、

等の如く、孰れにも、倔强なる道理あるものなれば、以て俄に正否の判决し難きを見るべし。

今ま事の參考として、試みに英京倫敦府と、我が東京府との小學校男女別如何とは之を最近の統計に徵するに、

倫敦の全市中には、四百四十八個の小學校有りて、その內、男女生の混同したる學校は六十五個、其の殘餘は、皆な男兒部、女兒部を併設したる者に非ずば、一部を單設したる者に係かり、前なる混同敎育を受け居る生徒は、大約二萬五千人、後なる殊別敎育を受くる男女生は、各々十四萬以上なり。

東京市内には、四百六個の公私立小學校ありて、其の内、純然たる女子小學校は、僅かに七個なり。而して、十萬餘人の男生と、九萬餘人の女生とは、學りて混同教育を受け居るなり。

乃ち單純に斯く比較するときは、殆んど學生數の相若けるに拘はらず、東京にては、倫敦の如く、爰に判然たる區別無し。然れども、事實に於ては決して患ふべき程の弊害無き所以あり。蓋し現行小學校齡は、女兒の數、一學級を編制するに足るときは、其の教室を分かつことを規定せるを以て、少く見積るとも、四五萬の女生は、必ずや殊席教育を受け居ることゝ思はるればなり。

さて男女混同教育を以て、大弊害あるものとするも、之を殊別するの方案としては、我等は、爰に二件の先決問題あるを信ず。その二問題とは、

幼稚期の發育に於て、女兒は男兒よりは、差や早しと云ふことは、東西共に一致せる處の事實たり。既に然れば、男女に依りて、其の學齡を異にするの必要なきか如何

女性に必要なる、微妙の心的、及び術的の教育は、天性粗放なる男教師にても、果して之を能くし得べきか如何

の兩つこれなり。思ふに、文部大臣にして、先づ斯かる點について、懷抱し給へる意見を發表し、以て明瞭なる解決を與へられしならんには、訓令よりも、僅かに有趣有効の妙あるべきに、事、爰に出でざりしは、いと惜むべきに似たり。

さりながら、吾人は、右の訓令を以て、合理至局とし且つ又た目下に必要なりと見做し、又た之を以て、女子教育を進前せしむるの手はじめと見做さんも可し。されども、忽ち爰に浮び出づる問題の甚だ多きを如何せん。即ち

訓令中の第一項に示されたるが如き塲合の、果して事實に有り得べきや否や縦ひ是れあるにせよ、之をも尋常小學校の兒童にまで、是非に及されざる可からざる程の急あるや、此等の二理由ありとするも、之を行ふに、必然伴ふべき所の、經費の一點は、如何にして求むべきか、殊に訓令の大精神に遡れば、立ろに入用なるは、女敎員その人なるべし、その女敎員は、如何にして之を得べきか等には、文部大臣、果して何の所見かある。聞かまほしき事どもなり。

若しも、斯かる訓令にして、行はるゝも、行はれざるも、何をか頓着せん。訓令なるものは、たゞ大臣の所見、所望を發表するに過ぎずとなれば、吾人の杞憂も、眞の杞憂なれども、若し夫れ然らざらんか、斯かる訓令もて、男女の殊別敎育の普及を謀られたるは、猶ほ木に緣りて魚を求むるの類ならざるか。

我等の管見を以てせば、大臣の訓令如きは、今日の學校經濟にては、到底急に行はる可からず。故に先づ男女混在の爲めに生ずる著弊を救へ、其の匡正の事は、寧ろ之を父母敎師の訓練上注意に訴ふるの簡なるに若かずと思ふ。

抑々古來和漢の德敎に於ては、「男女の別は、國の大節なり」とも謂ひ、夫妻間にても、生けるときは、室を異にすることを大いに尙びたりしも、今日は萬事狎昵に過ぎて、爲めに意外の椿事を生ずることとなれば、父母敎師は、常に然るべきの訓戒注意を、男女各別に與ふることを怠らさるべし。是れ或いは頑固偏嬌なりと難んずる者あらんも、何しても、西洋諸國の如く、宗敎上の信念、並びに社會の制裁、猶ほ强固ならざる我國に在りては、幼時より男女の互に狎る可からさる思念を養ひ、殊に男女の交際上に於ては、事毎に禮儀の關する所を理會せしむることは何よりも効力多かる可

きなり。

又た昔時は、新聞、小說等の善からざる者ありて、常に人の淫事を發き、或は讀者をして、識らず邪念を惹起せしむる者少しとせず、同時に、又た家庭の戯談等も、往々最も厭ふべき猥褻に氣附かれず、爲めに兒女を誤つ者多ければ、各家族に、斯かる諸點に、嚴重なる規律を設定せざるを得ず。

然れども、男女、各々成婚期に近づきたるときは、父母若くは師匠たる者は、時機を見計ひて、生殖作用等の梗概を說示し、且つ謹愼の傾向有らしむるを要す。

蓋し斯かる機に及ぶも、先進者、依然として、務めて沈默を守り、或ひは醜行に由來したる不幸の例などを以て、青年を畏懼せしめんとするが如きは、無益にして且つ却て弊多ければなり。

之を要するに、家庭と無く、學校と無く、禮儀を以て能く男女の交通を分割せしめ、敢て室を異にし、事を別たざるも、男女生各々能く獨を愼む所あらしむるを得ば、其の訓練は、與に最上乘のものと謂ふ可く、教育の美、之に過ぐるものなけん。而して吾人は、今日の尋常小學の教育などにては、特に斯くあらんことを望み、文部大臣の訓令如きは、差したる急務なることを認めざるなり。

史談

世界一周の卒先者マゼラン

天水生

始めて世界を一周し、其英名を永く南米の海峽に留たるマゼランは、今より凡そ四百年前、葡萄牙の片田舎に生る。其家に系統正しき貴族にして、富めりと云ふ程にあらざりしも、其地方の豪族として尊敬を受けり。

マゼランは幼時より勇壯なる事を好み、騎馬の遊獵は彼が最も悦びし所なりき。彼れは屢々青年の一隊と共に近隣の山中に入りて野猪を獵し、壯快の餘り歸るを忘れし事も多かりき。彼れは時としては山賊の襲撃に遇ふ事ありしが、日頃修錬せる手腕を以て勇敢に戰ひたり。彼れは負傷を受くる事あるも、少しも屈せず、少しく輕快に赴けば、再び臆せずして、山中に飛入りたり。

其頃は恰も航海發見熱隆盛の時代にして、コロンブスの新大陸發見、ヴァスコダ、ガマの印度新航路（亞弗利加の南端を回航する）發見を始めとし、多くの遠征發見隊は諸方に送られ、歐洲諸國爭つて領土、藩島を其版圖に加へん事を勉めたり。故に當時の青年にして、少しく氣骨あり、大望あるものは、悉く遠征發見隊に加はる、生命を犧牲として幸運を天外萬里の域に求めたりき。勇敢なるマゼラン如何で山間僻地に野猪を逐い、山賊と戰ふを以て滿足せんや。彼れはコロンブス、ダ、ガマの發見を以て壯なりとし、而して敢て彼等に後らざらん事を期し、遂に此勇壯なる航海發見界に投せんと決しぬ。

彼れは父に計りて其許可を得、先づ帝都リスボンに赴き、國王イマヌエル陛下に乞ふて其侍從となる、ひたすら好機會の來るを待てり。之れ彼れが二十一二歲の時なりき。

彼れ宮中に入りてより一二年ならずして、有名なるヴアスコ、ダ、ガマ印度の第二回航海より歸國しぬ。リスボン市民の歡迎非常に盛大なりき。ダ、ガマが受けたる盛大なる歡迎……巨萬の財産……全歐洲に響き渡れる名譽は愈々マゼランの功名心を刺戟し、彼れは最早宮中の閑樂なる生活に堪ゆる能はずなりぬ。

後幾もなくして、國王の親任厚きダルメイダ將軍は印度の總督に任ぜられたり。冒險を好み功名を求むる

の徒は、爭つて將軍の門に伺候し、隨行を乞へり。マゼランも其中の一人なりき。將軍は宮中に在りて、マゼランを知り、有爲多望の青年なりとて、ひそかに望を囑し居たりければ、彼れが來つて隨行を乞ふや、直に之を許諾せり。

やがてダルメイダ將軍は七隻の艦隊を率いて印度に航し、寄せるを撫し、服せざるを征し、葡萄牙の國旗に對して敵意を表する、土族を攻擊して假借する所なかりき。マゼランは將軍の部下に在りて、各地に轉戰し、常に全身の勇氣を揮つて戰ひければ、遂に葡萄牙軍第一の勇士として、其名を知らるゝに至りぬ。

後ダルメイダ將軍は、專ら內治に精勵する事となり、一切の軍務は、新たに來航せる、アルブケルク將軍に委任せられぬ。マゼランは新將軍の配下に入りて愈々勇名を現はし、累進して參謀士官となれり。後彼れは軍容に就き、將軍と議合はずして、其怒を招き、遂に印度を去り、北亞弗利加のモロッコに赴き、葡萄牙の遠征軍に投し、アザモルと呼べる地に在る軍營の司令官となりぬ。此地にては絕へず戰爭ありて、勇名を現はしたりしが、此時の戰鬪にて、左脚に毒矢を受け、中々の重傷なりしも、幸に平癒する事を得たり。されど之が爲め彼れは一生の跛足となりぬ。

何時迄もかゝる鬪爭を事とし、小功名に齷齪たるは、彼れが本意ならざりしなり。彼れは一層大なる目的を有したりき。彼れは一層大なる功名を望みたりき。

彼れは一日恍惚として前途の功名を夢想しつゝ深く考に沈み居たりしが、偶々兼ねて其親友なる航海者フランシスコ、セラノーより、東海にモラッカと呼べる嶋ありて、金銀寶玉に富める由を聞けるを思ひ出し、地圖を開きて熟考する事數刻、豁然として思へらく、此東海の美島は遠く印度の東に位し、歐人の渡航せしもの稀なり。是れ我が功名の地にあらずして何ぞや、

而して其航路は通例喜望峯を迂回し印度を經て東航すべきものなりと雖も、我地球は球躰なれば、若し假りて舵を西に向けて大西洋を横斷し、新大陸の南端を通過するも、亦彼所に達すべきの理なり、我をして此新航路を取らしめよ、是れ天が我が爲めに遺し置きたる新航路なり、發見功名の機至れり、とて獨り案を打て喜び勇みける。是に於て即ち國王陛下に請願して、之を決行せんとて、直に故國に歸るとゝはなれり。

彼れは間もなく故國に歸りて、國王陛下に其計圖を奏して、贊助を乞ひしに、無妄の企なりとて退けられたり。彼れは失望の餘り爲す所を知らず、折角の大望も水泡に歸せんとせしも、友人ファレローの勸告、奨勵によりて、故國を去りて、西班牙に赴き、國王チャールスに其計圖を陳して、贊助を乞ふ事となりぬ。チャールス王は其頃僅かに十八歳の弱冠なりしも、英勵の賢主にして、他日日耳曼皇帝チャールス五世として八威勢全歐を壓服せんとするの技倆、既に此時より現はれける。王はマゼランが壯圖を抱き來れるを聞くや、直に拜謁を許し、熱心に其言を聞き、老臣等の危ぶむに拘はらず、此計圖を贊助する事に決せり。而して五隻の堅牢なる船と、二百五十の船員と、食糧、其他一切の用品を給するの約をなしぬ。マゼランの喜ひ想ふべし。彼れは早速其準備に取りかゝりたり。

西班牙の宮人等は、マゼランが外國人の身を以て、國王の信任を受けて、大業をなさんとするを妬み、種々の妄言を以て王に讒し、彼れを斥けんとしたり。されどチャールス王は嚴として動かざりき。又葡萄牙のイマヌエル王はマゼランか西班牙に用ひられしを聞き、嘗て彼れを退けしを悔ゆると雖も、今更及ばざれば、如何にもして此れを妨けて、西班牙國力の膨脹を防がんとて、種々の手段を以て妨害を試みたり。されど少しも其功なかりければ、遂に陰險なる卑劣手段に訴へ、

刺客を送りて、夜彼れを暗撃せんとしたり。刺客は武裝して、夜路に要して、マゼランを襲撃せしに、却つて逆撃を被りて、面部に重傷を負ひて、其意を果す能はざりき。かゝる妨害危險の中にマゼランは其從兄弟バルボサの息女ビユーレウスと芽目出度結婚の式を擧げゝり。而して此樂しき新婚生涯も數ケ月ならずして、遠征艦隊の出發によりて終りを告けたり。

やがて出發の期日近くや、此遠征の爲めに新造或は改造せられたる五隻の堅牢なる船は、ガタルキヴィル河の中流に位するセヴィユー灣內に泛べられぬ。五隻の中最大なるを「ツリンダツト」と呼び、之れ僅かに百五十噸の小船に過ぎざりしも、其當時にては大形の內に數へられけり。「サン、アントニヨ」、「コンセプシヨン」の二船は各八十噸を積み、「ヴイクトリヤ」、「サン、チヤゴ」の二船は六十噸の小船なりき。マゼランは全艦隊の提督として、旗艦「ツリニダツト」號に乘り込む事となれり。

千五百十九年八月、晴天拭ふが如きの朝、遠征艦隊は、セヴィユー灣を出帆し、大西洋に向つて、ガダルキヴイル河を下りぬ。河口セントルカ灣に着するや、逆風の爲めに暫らく出帆を止められたり。幾もなくして順風起りければ、直に錨を拔て渺茫たる大西洋に乘り出せしは、九月の六日なりき。

舵を西南に向けて進航し、カナリー、ケープド、ヴエルドの兩群島を經て、二ケ月の后南米大陸のブラヂル海岸に着したり。其後は海岸に沿ふて南航し、跡すがら、諸灣港へは船を入れて探撿し、種々奇異の事物を見、珍しき現象に出會ひたり。或時は食人種族と交り、或時は美麗なる羽毛を有せる鸚鵡の數知れぬ程住める地に到り、或時は純黑の熊を見、或時は奇異の草木を得たりしが、就中ラ、プラタ河口に住める巨人は一行が最大の好奇心を以て觀察せし所なりき。

マゼランの目的は南米の大陸に沿ふて南航し、西方の大洋への通路を發見し、之を經て、更に西航し、遂にモラッカ島に達せんとするにありき。始めて南米大陸を見しより、數ヶ月間、絕へず、南方に向つて航するも、未だ目的の通路に來らず、船員の中には失望して不平を訴ふるものありしも、マゼランは遠からずして必ず通路に來るべきを信し、大決心と大確信を示して彼等を慰勵せしかば、失望せるものも稍〻力を得て、不平の聲も靜まりけり。やがて千五百二十年六七月の頃となり、南半球にては冬の時候なれば、溫暖なるの順風止みて、寒烈なる南の逆風と變じ、南航には不都合なれば、艦隊は一灣內に入りて、此處冬期を經過する事となりぬ。此灣は即ちセント、ジユリヤン灣なり。

此處に碇泊中、豫ねてマゼランを妬める「サン、レニタ」號の艦長カルタゲナ、「ヴイクトリヤ」艦長メンドサと共謀し、各船號を煽動して叛亂を企て、マゼランを殺して、カルタゲナ自ら之に代らんとの計策なりしも、マゼランが機敏の所置によりて、事中途にして破れ、二人を始め、主謀者數名は厳刑に處せられたり。」かくて后春暖順風の候を待つて再び出帆したり。此時「サン、チヤゴ」は不幸にも暗礁に觸れて沈沒せり。」乘組員は幸に凡て無事なりき。其年の十二月遂に南米大陸を横斷して、西方の大洋に通する水路を發見しぬ。之れ今に至る迄英傑の名を傳ふるマゼラン海峽なり。西方の大洋とは即ち太平洋にして、其風波靜溫なるよりしてマゼランが名けたるものなり。

マゼラン海峽通過中、「コンセプシヨン」號の士官ゴメズなるもの船員を煽動して叛を謀り、艦長ケサダを禁錮し、自ら艦長となり、ひそかに脫して歸國し、マゼランの遠征隊は失敗に歸せし由を言ひふらしぬ。此處報は一時は世人に信せられたりき。

今や減して三隻となれる遠征艦隊は西南に向つて太平洋を進航せり。此間食糧欠乏して大に困却し、遂に獸皮鋸屑を食つて僅かに腹を充するに至れり。而して暴風暑熱、之に加はり、飲水は腐敗して飲むに堪へず、之が爲めに病を得て死するもの甚多く、僅かに露命を繋けるものも、全く焦悴して、呼吸せる骸骨と化したりき。

かゝる艱苦に堪へて進航を續けし後、フイリッピン群島に來り、暫く此處に碇舶して英氣を養ひぬ。此れより西方の洋中には、天産物に富める熱帶の美島數知れぬ程多くして、所謂マレイ群島なるものをなせり。かくてセブと云へる島に來りしが、島王より厚遇せられ、暫く滯留せる間に、王を始め土民等に基督教を傳へ、偶像を燒き、社寺を壞たしめ、遂に全島民をして表面的基督信者となしたり。セブ王の配下にマタンと呼へる島あり。其酋長の中にシラブラブと云へるものセブ王が自教を信せるを聞きて、大に怒り、王に對して叛旗を擧げたり。之れ遠征艦隊が一切の準備終り、將に出帆せんとするの時なりしが、マゼランは己れか傳へたる基督教の爲めに、叛亂の起りしを氣の毒に思ひ、出帆を止め、叛徒の征討を助けんとて、王に乞ふて自ら征討隊の長となり、六十人の精鍊せる部下を率ひ、各一門宛の大砲を載せたる三隻の艇舟に乘りて、征討隊の先鋒となりて、多くの土舟を從へて夜に乘してマタンに向へぬ。其マタンに著するや、マゼランは部下十人を舟中に殘し、五十人を率ゐて上陸し、千五百餘の蠻軍と奮鬪する事數刻なりしか、衆寡終に敵せず、多くは戰死又は負傷し、彼れ自身も遂に毒矢投槍の爲めに無殘の死を遂げぬ。時に齡四十有一。之れ實に千五百二十一年四月十七日なりき。

マゼランの死は遠征艦隊に一大打擊を與へ、船員の意氣大に沮喪せり。マゼランの義弟エドワルド、バルボ

サ其後之殺されて新提督となりぬ。

後セブ王はシラブラブの脅嚇によりて變心し、ペルボサ以下十數名の有力なる士官を饗應し、宴席に於て之を逆殺したり。げにも惛むべき行爲なれ。

此事あるや三隻の艦隊は、倉惶錨を抜て出帆せしが、船員は鬪爭、疫病、逆殺等の爲め大半死亡して、殘れるもの甚少くなりければ、三隻の船を運轉するに差支へを生じ、爲めに最も破損の大なる「サン、アントニヲ」を燒棄つるの止むを得ざるに至れり。殘りの二隻はボルチーを經て、遂に目的とせるモラッカ諸島に到りぬ。此時「ツクニダッド」號に大破損を生じ、之か修覆には多くの時日を要しければ、「ヴイクトリヤ」號先に出帆して歸國する事とはなれり。「ヴイクトリヤ」は爪哇、スマトラを經て、印度洋に入り喜望峯を廻周して、クープ、ド、ヴルド群島に寄船せしか、此地は葡萄牙領なりければ、捕獲せられんとせしも、辛して之を免れ、生捨にせられたる十三人の船員を殘して歸國せり。かくて堅牢なる五隻の艦隊と二百五十の倔强なる船員は、三年の后一隻の小船と焦悴せる十八人に減して、再ひ故國の岸に着しぬ。之れ實に千五百二十二年九月初旬なりき。

モラッカに殘されし「ツクニダッド」號は修覆終りて后、葡萄牙人の襲擊を恐れ、東方に引き返して、再ひ太平洋を橫斷し、マゼラン海峽を經て歸路に就かんとせしに、暴風に妨げられて、再びモラッカに引き返せしに、折惡しく葡萄牙人の來襲せるに遇ひて、捕獲せられ、船員は多く逆待に苦みて慘死を遂げ、生き殘りたる四人は、四年の后便船にて歸國したりしとぞ。

文藝

故園の菊

黄花

此頃のうらゝかなる小春日和に、菊見がてらそゝろあるきせんはいかにたのしからましと思ふ折しも、母君來まして、けふはあまりに美しき日和なれば、菊見にゆかんと思ふに、ゆかずやとのたまふ。そはいとよき折にこそと、正午過より母君の御供して兒女はしためなどうちつれて出でゆく。

門を出るより早く子供等は守女の手をふりはなし、さもうれしげにとびつゝゆく、たえがたきよろこび面にあふれたり。母君、けふはいかなる吉日にやとのたまへば、女どもたま〳〵着物きかへていでたちし故にや、皆々笑をふくみてげにもと應答ふるもおかし。氷川の森の銀杏も半ば黄ばみ、けやきはほの〴〵と紅をそめ、樅杉松なんどの間に葉なき櫻のさゝやかなる梢のみゆるが、青空にうつりてえもいはれぬけしきなり。社前に樫子の落ちたるをひろひて後れがちなる子供等をいそがしつゝ、仙花園にゆく。菊は恰も盛りにて、黄白赤淡紫などの色鮮かに美しく、また蜜柑金柑などの色つきそめて、青葉の間よりちら〳〵見ゆるも愛らし。盆栽の紅葉・銀杏、めづらしき白椿など、見る目もうつるばかりなり。せまき坂をのぼりて阿屋にゆくに、此處には二三人腰うちかけながめ居たれば、なほ上りゆく。路の兩側あるは垣根に、薄紫の雛菊、またいろ〳〵の菊、おのがじゝさきいでたるいと趣きあり。上にも阿屋あり、藪かげより三田のあたり一面に見はらす。高臺には、あて人の住居なるべし、築山、石燈籠の松が枝のあはひよりみゆるなど、ゆかしきつくりさまなり。低きわたりは、木立の間より煙突の高

くつきいでたる、品川沖に白帆のみゆるなどおもしろし。秋ばらのかほり猶殘る間を通り過くれば、一本の老松もて支へたる阿屋あり。此あたり薄、野菊、竹などありて、さながら野邊の心地す。雨傍より萩さしかゝる小路をかきわけ〱、姫うりのアーチをくゞりて、ぼたん、しやくやく、花しようぶ、梅などの花壇を左右にみて、もとの處に歸り來る、けいとうの色麗しければ、子供等はとらんとするを、やう〱に制して、しばし花屋が家にいこひ、こたびは本野家にゆく。

本野家は庭ひろく築山泉水などのつくりみやびやかなり。案内せらるゝまゝに庭の後の木立多き處をめぐりゆけば、紫の萩まばゆき花壇の前に出でたり。菊花の色あでやかに、配置よくとゝのひ、香庭に滿ちて、後の簾のうつりなどたぐひなし。主人の君の花鋏片手に彼是と園丁にさしづせらるゝを見れば、父君御在世の頃いたく菊を愛でさせ給ひて、花壇のつくりもおろそかならず、日毎水かけ細かに心をつくして、そだて給ひければ、あはれいみじき黄菊白菊年々色まさるのみなりしを、今は花のみ殘りてなつかしき花園いかに荒れはてつらんと思へば、いとゞ故里のしのばれて

　うゑおきし人はゆめぢにいりにしを
　　志らでや菊の香ににほふらん

今みる花の奥もつきねど、いつまでもとゞまるべきにあらねば、後みかへりつゝ歸途につく。家々のかまどの煙そこゝよりたちのぼり、氷川の森の烏も秋の夕ぐれをつぐるにや。

嬰兒

田　紫櫻

我れ一日英詩人ゼオルヂ、マクドナルドが篇を閉きけるにゆくりなくもこの愛らしき一什を得た

り、幾度となく繰り返し〲讀みもて行くに、いよ〲めでたく覺えければ、己が筆のつたなきを顧みるいとまも無く直ちに紙に向ひて斯くなん譯しぬ。

實に愛らしの　嬰兒よ
汝は何處より　來りしぞ
何處と定めぬ　彼處より
此處にそわれは　來りける
みどり色なる　そのまなこ
いづこに汝れは　得つるぞや
わが來し時の　道すがら
彼の大空の　そのうちに
汝が目の光　まばゆきは
宿れる何の　あればかや
今なほそこに　のこるなる
星の光の　なごりなり
その愛らしの　涙をば
いづこに得しぞ　あはれ子よ
わか來て見れば　いつしかに
待ちつゝこゝに　ありにけり
いかでか汝れの　額しも
さのみやわらに　又高き
み空すぎにし　その時に
いとやわらかき　手のふれし
汝が頰の色を　あたゝかき
白ばらの如　せしはなぞ

未だ世の人の　見ぬものを
われひとり見て　よろこべり
口に三角の　その笑まい
いずこより來し　をさな子よ
天つ使の　三人しも
一度にわれを　キスしけり
眞珠の如き　その耳を
どこにを汝れは　得てしかや
神のたまひし　御語を
聞かんためとて　出で來つる
汝が愛らしの　そのかいな
いづこ得つるぞ　その手をば
「愛」のをのれと　かたまりし
なれるものとし　知らぬかや
あなうるわしの　その足よ
汝はいづこゆ　來りしぞ
セラブの翼の　出て來し
同じ一つの　箱の中
あわれそれ等の　ものみなの
いかで汝とは　なりにけん
思ひ給ひて　我身をば
斯くこそ神の　そだてけれ
さればをさな子　愛らしの
いかで我等に　産れぬる
わがこゝに來しも　大神の
思ひ給ひて　父母を

（完）

新年雪

桐廼舍女史

犬壺きら／＼しうつくらせて、住たまふ女宮おはしましけり、此宮稚き頃より犬を甚く、愛させ給ひけるにや、大人びたまひてより、古き書とも見たまへは、神代に近き世なるべし、丹波の國桑田村に甕襲といふ人の、畜ひたる足往といふ犬、牟士那を咋殺しゝか其腹より、八尺瓊勾玉出たる由、又晉の靈公狗を好して狗圈を、曲沃といふ所に築き狗に繡衣を着せたり、なと猶大和にも唐土にも狗の事、あけられたるはさまざまあれど、すべて犬は心正しくして、君子にひとしき徳七ツありとかや、されは犬はいよゝかろしむへからずとて、何れの國にまれ良き犬、生れぬと聞し召せは、はゆま伏して奉らせ給ふ、また犬を奉る者にはあまたの引出物かつけさせたまふものから、我も／＼と良犬奉るによて、犬のため局つくらせたまへば、犬壺となむ世の人たゝへけり、中にもことに御わきもとにすゑ給ふ、めをの犬は牡を龜尾といふ、こは龜の脊に似たる班ありて、尾少しなかけれはかく名つけ給ひ、牝は真白にして雪の如光さへそひぬれはとて、鶴羽とよばせたまひけり、御おほえ人にこえたり、かゝる御さまなりけれは、さふらふ女房達誰れも／＼、宮の御心を得んとてこゝかしこより、尋とりてそ畜ひける、竹の局かもとに去頃より、馴しゝ牝犬あり、長代とよひていとあいらし、また梅の局かもとに馴しゝ、牝犬も匂やうなればとて、下風と名つけてけり、長代にまさるともおとらしと、かたみに愛きそへるを、松の局ねたましとや思ひけん、遠近にもとめてからうしてつひに、牡犬の稀なるを得たり、局よろこひて永く榮えよとほきて、綠丸となむよひなしける、實に此綠丸數多の犬に立まさりて、見ゆるにいつしか長代下風の、牝犬は心よせて慕ひありくもをかし、又龜尾の乙に、萬

といふ牡犬ありしか、こもけしうはあらす、若き牝犬の品定めにはかならず、もれし事なきも、萬はさらに浮たるかたは見かへらず、宮につかうまつりける、猶心のうちにふかくひめて、思ひよせたるは彼長代なりけり、後終に得むと祈りつゝありしに、此頃長代のさまたゝならぬに、あやうかりて人知れす、おのかはむへき物をも、得喰であたふるに長代も、綠丸の事はわすれはてねど、やゝ心動き初にけり、とかくして新玉の年を迎へたるに、今年は壺の名におへる何かしの年とて、宮もいとよろこはせ給ひて、犬のためにぬひしたる衣、あるは黄金白金の鈴もて、かざれる首輪などてうせさせ給ひて、めをによりてとらせたまへは、めさましきまで賑ひ渡りぬ、ひとりめつらかに雪いとう降り出て、宮のうちいとしめやかなるに、宮うちわひたまひて、例の犬ともめしたまへは、龜尾、鶴羽、はさらなり、綠丸、した凪、また、萬、長代、をはしめ何くれの犬とも、皆御前につどひ参りぬ、宮ゑましけに打見やり給ひて、たはふれつゝ、いましらぞみにめしたるは、ともに今日の雪見むとてなり、雪を題によき歌よみ出たらむものには何まれ望ましきもの、とらせんにとく／＼と、のたまへば犬は望はひをろがみて、我わと耳たれつゝ、かうかへたる、さまいとをかしう何をか、いひいつるとおほしもあへぬに、勝栗といへる小犬うちはしもとにすゝみよりて

かさゝきの渡せる橋にふる雪の
しろきを見れば餅かとぞおもふ

とまづうたひ出つるに、宮をはじめ女房達思はず手うちてたゝへつゝさはとて、餅一つあたへたまふ、小犬は我れかちぐりと、尾をふりてしりぞきぬ、おくれたる歌犬いまはまけしとや、築山のもとよりはしり來たりて

足曳の山よりたかくつむ雪に　　萬

永きなかよをひとさも得む

ふみこのむといふこのもとにて　　緑丸

吹からに雪の綵さへにほへれは
うへした風をこいしといふらむ

池のほとりよりはひよりて　　龜尾

我如く雪いたゝかむ高砂の
松もむかしの友ならなくに

つゝましけに袖垣より頭少し出して　　鶴羽

君がため御園に出て和歌をよむ
我も衣にゆきはふりつゝ

松のもとにて　　下風

うつろるゝ身をはおもはてふる雪に
松のみどりのをしくも有かな

和たどのゝしたにて　　長代

いまはたゝおもひかへなむとはかりを
雪ふみわけていふよしもかな

猶次とよみ出せるを、女房らかいしるして見せまつるに、宮は愛てくつかへらせたまひ、世にいひかひなき人を犬じものと、いひくだすこそあやまりなれ、かく古き歌によりて雪よりも深き、心をもらしたるはいとあはれなり、今はわらは月下神人となりて、こふがまに〳〵緑丸には、下風をあはせ、萬には長代をあはせ、龜尾鶴羽は高砂の歌さへ、よみ出たれはしまたいをかねて、媒人の役とし、勝栗、裏白、らの小犬に酌とらせむと、思ふはいかにととはせたまへは、弁ある女房ら皆喜びあへる中に、松の局、竹の局、梅の局、はまことに我子のゑにしさためられたるごと、宮の恵をかしこみて、うけひことさゝく、宮もほゝゑまれて、猶外の犬ともには食物澤山にあたへよ、式は人とことなる事もあらむ、そは龜尾鶴羽にまかすへしとて、ひきいりたまへは、人も犬もおなし心に、千代萬世とことほきてまかてぬ

祝言の座敷は御園のうちなる、竹林のもとにまうけて、用意とみにとゝのひければ、やがて三々九度の盃始まりぬ、龜尾は、わんと一ッ吠てまばらなる髯うごめかしつゝ、聲ほがらかにうたふをきけは

庭の砂は銀々の玉をつらねて敷妙の
白繪の折敷や、るりのくぼて、ざこの雪ざら、
めなうの箸、つくゑのみきはに
もるめしは
ふじのたかねもよそならす
ゆきのめぐみぞありがたき
ゆきィのめぐみィぞありがァたきィ

といはひ壽むる折しもあれ、みかんの籠をかゝふりて、をり出たる、ほんだわら、見よや〳〵とかけまはれは、ゆつり葉、ところ、たつくり、かづのこ、かざりゑび、犬てふ犬とも、是を見て笑ひこけつゝ、かさなりあひざゝめきたつこそ目出たけれ

冬の山里

雨谷一菜庵

いたゞける柴をおろせばあられかな、宗之が風流も目前に見る羊腸の霜柱踏しだきて、細き畔道いそぎゆけば、田の面の氷朝日の影にきらめき、遣水の潺々と音して枯れたる草の下にかくれゆくも寒けしや。案山子の笠の破れて、弦も何時か絶えたる、風に干菜からびて、木づるしとかやいへる柿の、葉もなき梢に赤ふなりたる、井の端に芋洗ふ童、椽先に綿を績ぐ嫗、鄙びて淋しきが内にも趣多しや。紅葉にもれし杉の一叢左に折れて、苔蒸せし石の橋渡れば、古き寺あり、寺の庭には黄金色なす銀杏葉の散り布きて面白う長き寺男のこを掃あつめて燃きつゝあたゝまるに、煙は靜に四邊をかすめ、後なる山の麓も籠けるが如く朧なり、斯傾きたる本堂には住持の僧の朝づとめするにかあらん、鐘の音かすけく響きて年ふりし松が根に頭のかけ

たる石の御佛立てるも憐なり。寺男に路を問ひて山路分け入るに、人通ふと稀なれば、枯れたる尾花蔓茨、路をとざして進むにかたし。脚の下より起つ鶺鴒、飛ゆく方を見上ぐれば、梢をわたる猿の群、追ひつ追れつ爭ふは、如何なる木の實なるやらん、松の下蔭染め殘す木の葉が今が色に出でゝ、峰の嵐を厭ふに似たり、やうやくにして巓に至れば、遠き山々近き人里、うねり流るゝ川を上りて、見えつ隠れつする帆影、直ぐなる街道を彼方此方斷えつ續きつする馬車、世にいふ活詩とやらんこれなるべし。木の切りすこし株の上に腰をおろして、面白き景色の靜なるが如にして、時々刻々うつり變りゆく樣を見やり居たる背後に、近づくものゝある氣はいしたれば、フト振返り見るに馬にも等しかるべき大きなる鹿なり。今まで動かざりし吾の、動きたるに驚きてか、鹿は蹄を立て角を負ひて、谷間の方に走せ去りぬ。風少し吹立ちて山靈自ら語り、雲洞底を出でゝ未だ高くは飛ばず、山樵が薪こるにか丁々の響山彦にこたへて、寒山無人と賦したりける唐詩の心も自ら思出られ、神すみ氣昂りて雲に乘り風に御するの術も身に得たるが如く、掌をうつて歌ふに、興しきりに來りて樂窮なし。去れど何時までか斯くてあらん、幾重かさなる落葉を踏みて、やうやく谷間に下りゆくに、枯れたれど猶清く冷なる、水の白く蒼く玉となり糸となり、涓々淙々として落ちゆく末は谿川となりて、はては何地の海にたゝゆる。溪川に添ふて家五ッ六ッたてり、鷄鳴き、犬吠ゆれども、遠く塵の世をへだてゝ、人の心も自からゆたけく、爭ふ事なく、盜む事なく、いとむつましふ交るを見ては、都の住居のいと恐ろしき心地もして、さら〳〵立ちかへるべしとも覺えざれば、永久に住まばや此山里。

分け入れば冬ものどけしとこしなへに
すまゝく思ふ山かけの里

冬夜

ゆかり女史

いかなればかくはかなき秋のわかれを、をしむならんと、思ひもあへずわびしき冬にあひぬる事よと、いもねぬまゝに夜の更くるをも知らで、吾行末をきえかでなる燈火に、たくへてかこちつゝありしが今やおく霜のさえまさりけん、すのこのそとに犬の子のうめく聲もあはれに物すごくおほゆ、まして月影はこほるはかりにすめるを、ほのかなる鳴音のふと耳に入りしかは、いぶかしとねやの戸おし開らきて、打あふげはいとも寒けき中寒を、秋におくれて渡るひとつらの鴈成りけり、その行へのはてもあらねはおのづから、身をもわすれて眺めやるに心は空にかたむきて、いとゝ思ひのうきをましけり

霜氷る寒さそ知るへき冬の夜に
ねをなくかりも世におくれけん

若菜摘

千種子

待に待つるあら玉の年をむかへし、人の心は老たるも若きもかはらぬ嬉しさにやあらん、まして我身は幼き頃よりいつまても、かくありてよと願ひしもうへなりき、今の世はまだ春といふにあらねと人皆の心〳〵に、このめるすさびは昔にまさりて多かるそ樂しき、いさや何にか遊ばんとて、又も來て見んと心ちかひし事思ひ出て、むつましき友そゝのかして、やすけき道をもとめつゝ、野の邊わけ行く折しもかたへの、ゆかしけなる垣のうちより、ほゝ笑み初し櫻の梢ならぬかをりをおくらるゝにしはしたゝすみて

なつかしき梅のかをりにをさなくも
鶯ならでこゝろひかるゝ

と口すさひつゝあかぬ心地のせらるゝを、いつまてこゝにとゝまるべき事かはと、友のいそかすになく〳〵

も鶯ならぬ身を、うらみぬるこそをかしけれ、猶行く〳〵て去年のまゝに氷れる、里の小川を渡りこえしに、寒さいやましにましぬ、いまはかへらまくなとかたろふほとに、いとなつかしきは古き御歌のおほん心をしのへとか、色もなき我衣手に白雪の花そ匂ひかゝれる、こは嬉しこゝろみに若菜や尋ねんと、去年の知るべのみちふみ分けて、あさりしにまたしたもえなから、若菜にこそ春の色はありけれと、袖ひきゆひてかたみにまけしと、つみありく今日の樂しさは何にかたとへん

雪分けて野の邊に遊ぶ嬉しさは
　もゆる若菜の邊に出にけり

いつしか寒さもわすれて遊ひ暮しぬか、つもらはかへさやまとひなんと、例の友のあやふむをつれなしとて

邊ふかき若菜つむ野にふる雪の
　あさきは人の心なるらん

かへし　　　　　　　　友

ふる雪はまたあさけれど若菜つむ
　君ゆゑふかく物をこそ思へ

われもまた

嬉しさをこめてかへらん我袖に

とうたひ出たるに友はひきとりて

　かゝるしら雪つめる若草

談叢

世界古代の航海談（下）

蘭溪

「アーゴー」隊の遠征

翌朝使者ミニーに至り呼んで曰く黄金色の羊皮の探撿に從はんと欲するものは來れと、ジユース神の妻ヘラは天の女王なり、報を聞きて之を諸の英雄に傳へ、彼等を鼓舞奬勵せり、此群雄此に於てかゼーソンに從は

んとて四方よりイヤルコスに集り來れり、皆各々獨得の長技を具へ、巧鍊なる舵手にはタイファイスあり、臂力衆に勝れるヘラクルスあり、弓手にはハイラズあり、航海者ノープリアスあり、天象家のアンシーアス、造船師のアーガス、其他カストル、モプサス、ユーリダマス、テラモン、チーリアス、ペリユース、及びカレイス等の群雄雲の如く雨の如し、

彼等は皆イヤルコスの海濱に集まれり、造船師アーガスは彼等に各々受持の仕事を割り付けたり、彼等はペリヲン山に大木を伐り、之れを海濱に運び來れり、アーガスは工事を指揮監督して、此に始めて長形の船を造り出せり、此船は五十挺の櫂を兩側に具へ、全身瀝青を以て之れを塗り、舷首は朱を以て美はしく彩色し、造船師アーガスの名を冠せしめて「アーゴー」と命名せり、

彼等尙工事を竣へざるとき、樂師ヲルフヒアス後れて至り、彼等の群に入れり、彼れの音樂は、林野の鳥獸をして齊しく耳を欹てしめ、無心の木石をも感動せしむるの妙ありき、已にして工事全く成り、今や進水の式を擧げんとするの時、船躰重大にして龍骨深く砂中に入り、容易に動かすべからず、彼等は爲す所を知らずして、失望の餘、互に目と目を見合はす計りなり、ヲルフヒアス即ち笛を取り、瀏喨たる音色を吹き始むると共に、「起つ波に閃めく櫂」、「綱具に囁く日和風」、「龍宮」等の妙曲を和して、縱横に吹奏せり、

アーゴーは善耳の船なりけん、ヲルフヒアスの吹奏を聽ける時、坐ろに海路の戀はしくなりしにや舳より艫に至るまで全躰自らが微動し始めたり、其機に乘じて彼等は幾許もなく枕木を船底に挿入すると共に、アーゴーは圓轉活動して、直ちに海中に進み出でたり、彼等は飲水、糧食其他凡て航海に必要なる物品を充分に準備し了り、祝酒を天に捧げて海路の平穩を祈り、やが

て各自其席に就き、チルフヒアスの調子好き音樂と共に目出度イチルコスを出發し、南に向つて漕ぎ出だせり、已にして日漸く暮れ、イチルコスの市街及び海岸に立てる見送人の影は朦朧として辨じ難きに至れり、其の夜より翌曉に至るまで、アーゴーは依然南に向つて進みつゝありき、

斯くて彼等が第一に到着せし處はアフヒーテなりき、此處にて西南の風を待ちける間に、彼等は先づ「アーゴー」の船長を選びしが、ヘラクルス其選に當れり、然るに彼れは之を辭せしを以て再選せしに、セーソンは今回の擧の主唱者たるの故を以て遂に其の選に當れり、彼等は天の女王ヘラの助を以て西南風を得たりしかば直ちに帆を揚げて東方に向ひ、セピアス岬を左舷に望んでサイアソス島を過ぎ、更に北に轉じてマグチシヤの海岸に沿ひ、ペリチン山を左舷に見、外海を右舷に望んで馳せたり、セーソン舵手タイフイスに令して船を海岸に向はしむ、蓋し再びペリチン山に上り、舊師カイロンに見えて久濶を謝せんとするなり、岸に着するや直ちに船を去て山に向へり、鬱々たる松柏の林依然として當年の如し、やがて大洞に達すれば、カイロンはペリユースの小供アキリースと共に在り、カイロン彼等の來るを見るや喜色面に溢れ、欣待至らざる處なく、師弟互に打解けて歡語湧くが如く、洞中和氣藹然たり、彼等辭して船に歸るやカイロン海岸まで彼等を見送りぬ、彼等は屹然たるチリムパス山を望んで漕ぎ進み、アソス、サモスレース、及びレムノスの諸海を過ぎて再びヘレスポントに至り、アピドス海峽（現今のダーダチルス）を越へて遂にプロポンチス海（即ちマーモラ海）に出でたり、此より更に進んでボスフヲラスの海峽を過ぎ、ユーキサン海即ち黒海に出でたり、此海は此以前希臘人の未だ嘗て至り得ざりし所にして、古より傳へて曰く、此海は遠く北方に廣が

り其果ては冥府の國と相接せりと、
然れども是等の奇怪なる古傳彼等に於て何かあらん、彼等は尙ほも水天渺茫として其際涯を知らざる黒海を進行し、遂に其南海岸なる亞細亞の海岸に沿ふて、遠くシノペに達せり、然るに上陸中舵手タイフイスは不幸にも野猪の爲めに死せしを以て一同之れをリシヤの海岸に埋葬し、塚を造り槽を其上に樹てゝ永悼の紀念とせり、
此に於て更にアンシアスを舵手となし、東に向ふて行進せり、其間幾多獰猛なる蠻族の出沒する海岸を過ぎ、「アコソン」一種族の部落を經てカリビースの海岸を航せり、彼等は終夜槌の音の鏘聲に和して響くを聞けり蓋し「アマゾン」種族の職業は主として鍛冶を營めるものにして、其鑄造せる刀劍は之れを軍神エーリースに捧ぐるなり、
或日の事なりき、彼等は東方に當りて嶄然たる高嶽の白雪を頂きて雲表に聳ゆるを見たり、之れ即ちコーカサス山にして、千山萬嶽の魁たるものなり、三日間彼等は此山を望んで進み、欝蒼なる深林の山麓を繞るを見て、遂にフエーシスの河口に達せり、見渡せばイーテイース王の宮殿は、蒼翠欝々たる深林の表に峙てり、是れ實に彼等の最終目的たる黄金色の羊毛の存在する所なり、彼等は勇みに勇んでフエーシス河を漕ぎ上り、一刻も早く宮殿に至らんとせり、
一夕イーテイース王は美はしき星の天より下りて其愛女メデイアの懷に入りしかば、メデイア大に喜び、携へて河岸に至り之れを水中に投せしに、星は波に漾ふてユークサン海に流れ入り、終に其光を沒すと夢みたり、
イーテイース心に之を怪しみ、翌朝メデイアと共に河岸に至りしに、適々「アーゴー」の河に溯り來るを見て痛く驚き、彼等乘組の群雄に其來意を問ふ、彼等亦

イーティース王の威嚴堂々たる風采を見て、急に擬を止めたり、ゼーソン先つ王に來意を告けて曰く、我等は汝の王國を寇せんとて來りしに非す、只た黃金色の羊毛を取りて家國に歸らんが爲めに來れるのみ、王若し潔く之を我等に與ふれは即ち可なり、然らすんは我等は身命を賭して爭ひ、之れを得すんは止まさるべしと、

イーティース怫然として怒て曰く、汝若し我がコルチス人に敵せは、直ちに殄滅せらるへし、然れとも強ひて汝等の目的を遂げんと欲せば宜しく我か敎に順ひ、汝等の中より最も秀でたる一人を選び、予が命する所に隨ふて種々の仕事をなさしむべし、蓋し彼の黃金色の羊毛を得んと欲せは、豫め幾多の困難に逢着するとを覺悟すべきを以てなりと、

斯く言ひ捨てゝ後、彼は馬首を轉し宮殿に向ふて去れり、然れともメディアは遲々として容易に其場を去らず、彼れの心は已にゼーソンに在りしなり、彼れは元來巫女にして種々の魔法を弄して人を誑惑せり、彼れはゼーソン等と約して曰く、卿等にして若しゼーソンを城内に遣るを許さば妾必ず彼れを助けて以て黃金色の羊毛を得せしむべし、只た此羊毛を得ば必す妾を伴ひ去るべし、我父若し之れを發見せば、必す妾をして生存せしめざるべしと、彼等メディアに言て曰く、卿にして死せば我等亦卿と共に死せんのみ、苟くも黃金色の羊毛を得るに非らざるよりは我等は死すとも歸らざるなりと、

此に於て彼等は夜に及ひて船を岸邊に寄せ、暗黑に乘して潛かに城内に入りぬ、メディア彼等をして固く靜肅を守らしめ、導きて軍神エーリースの廟前に至る、メディア、ゼーソンをして溝を廟前に穿たしめ、携へ來れる小羊を殺して之れを其中に投し、蔽ふに怪草と蜂蜜とを以てす、衆其何の故なるやを知らず、忽ちに

して廟門の閂は外づれ、扉は自然に内より開きたり、仰ぎ見れば千年の老木は鬱々として天を蔽ひ、四顧幽暗にして又星光を洩らさず、満林の冷露墜ちて聲なく、鬼氣森然として人を襲ふ、彼等はメディアの導くがまゝに、咫尺を辨ぜざる林中を過ぎ行ける時、ゼーソンは第一に黄金色の羊毛の閃々として黒暗の裡に輝けるを見出せり、彼れは其光を目指して奥深く進み行き、遂に林の中央に立てる一大樹の下に到達せり、而して彼の羊毛は恰も手を擧ぐれは達し得べきの處に垂れ懸かれり、彼れは手を擧げて直ちに之れを攫み取らんとせしに、メディアは遽かに彼れの手を控へ、老樹の根を指示して彼れに告ぐる處あり、見れば丈餘の一大蛇全身に青銅と黄金の斑點を帶び、蜿蜒として樹根に蟠屈せり、而して彼れゼーソンを見るや直ちに首を擧げて物凄く叫び始め、全林爲めに震動せん計りなり、メディア、蛇に何事をか告げしに彼れは直ちに其聲を收め、紅ひの舌を出して其手を甜りぬ、メディア口中に咒文を唱へたりしに蛇は忽ちに熟睡せるもの丶如し、ゼーソン其機に乘じ、遂に羊毛を樹より剝ぎ取り、彼等と共にメディアに隨ひ、走て廟林を逃れ河岸の船に投じたり、

船は出發の準備既に成れるを以て、直ちにゼーソン等を乘せて即夜西方に進み、天明に及びて遙かにコルチスの海岸を隔てたり、途上難風の爲めに北方に驅られ、クリミヤの近海に漂ひ、クルチ海峽(吾人は玆に近世の名稱を用ゆ)を過ぎてアゾブ海に入り、更にタナース(即ちドン河)を經て魯西亞の廣野を望み、ウラル山を前に仰ぎて進みぬ、古謠の傳ふる處に依れば、此地方には幾多怪異の人種ありて生息せり「アマゾン」種族の苗裔なる「ソーロマテー」種族あり、片目の「アリマスピア」族あり、彼等は金をウラル山より採掘せりと云ふ、其他讐敵の首級を以て其住家の屋根を飾る「ト

ーリ」の蠻族あり、地の極北に住する「ハイパボリアン」族あり彼等は此間に幾多の危險を冐して北に進み、遂に海水鈍緩にして死せるが如きクロニア海（蓋しバルチック海ならん）に達せり、此時に當りて「アーゴー」は久しく水に浸せしを以て船底苔を生じ、行動昔日の如く輕快ならず、一先づ上陸して船底及び綱具を日に曝すと九日、再び出發して南に向ひ、遂にイーアン島に達し、更に轉じて東に向ひ、アイベリヤの海岸（西班牙）に至り、ピルラース、ヲブ、ハーキユリース（ジブラルター海峽）を經て地中海に向へり、此間に於て彼等はサーディニア、チーソニア諸島及び伊太利の海岸を經過せしなり、

斯くて彼等は遂にツライナクリヤ即ちシヽリー島に達し、エトナ火山の下を繞りてシラの岩礁、チヤリブディースの急潮を過ぎ、積水茫々数日陸を見ずして漕ぎ進み、遂に樹木鬱蒼として翠滴たるが如き或る島に到着せり、海岸には市街あり、港には埠堤を築き、貨物、船頭等其邊に雲集せり、此れ即ちフィニシヤ國の都市にして、其王をアルシナスと云ふ、當時同國は商業貿易夙に開け、國極めて殷富、其王の宮殿の如きは、金銀を彫り、珠玉を鏤ばめ、光彩燦然として人目を眩かしむる程に華美結構を盡し、又其庭園の如きは、珍卉奇花異香馥郁として四時花を絶たず、加之梨、石榴、林檎、無花果、葡萄、及び橄欖の諸樹は累々として春秋美果を結び、大噴水は奔騰して煙の如く、雨の如く、絶へず園中に灌漑し、流れて市民の使用に供せしむる等、其結構の宏麗を極めたりしことは、有名なる詩人ホーマーの已に記せる所なり、彼等は上陸して國王及び女皇に面謁し、幾多の珍奇なる贈物を拜授し、以て永年航海の勞を慰め、辭して船に歸れり、翌朝舵を東方に轉じ、家國に向ふて回航し、マリー岬を經てラセディーモンの海岸及びユーボイア海峽を過ぎ、遂に再

びペリヲン山を船頭に望み、永年夢裡に髣髴たりしイヲルコスの灣に安着せり、山は笑つて彼等を招くが如く、水に波を叩ひて歡迎の曲を奏するに似たり、彼等の感慨果して如何、

彼等は船を去て海濱に坐し、其亡友を追想し、航海中の危險を記臆し、將た故郷の風物の變遷に驚き、感極まつて互に相抱きて泣けり、彼等の周圍に集り來れる人民は殆んと彼等を知らす、相共に彼等の姓名を問ふ答て曰く、我等は汝等と同しく此國の者にして、嘗て此國を主宰せしとありしが、黄金色の羊毛を得來らんが爲めに遠く千里の外に在りき、今や其目的を達するを得て恙なく歸國せり、只た故郷の風物の變遷は痛く我等の心を惱かし、百事殆んと夢中に在るが如し、故に我等の先づ知らんと欲する所は我等の父母親戚の消息如何に在り、卿等若し知るあらば幸に教ゆる所あれと、彼等即ちゼーソン及び其伴侶を誘きて宮城に至る、昔日の奸王ペリアスは寄る年波と共に、耳は聾し、心は鈍れ、又昔日のペリアスにあらず、ゼーソンの父君イーソン其傍らにあり、亦年老ひて鬢髮霜の如し、ゼーソン其名を呼びしとき彼は其我兒なるとを知らざりき、若し夫れペリアスは今や彼れに向つて其國を繼かんとを哀願するの外はあらざりき、嗚呼世に千歲の人なく、國に萬年の君なし、死生を天涯に賭して功業を萬一に僥倖し、歸り來れば、江山舊に依ると雖も其人既に白髮多し、ゼーソン豈に胸中萬斛の感慨なからんや。

（大尾）

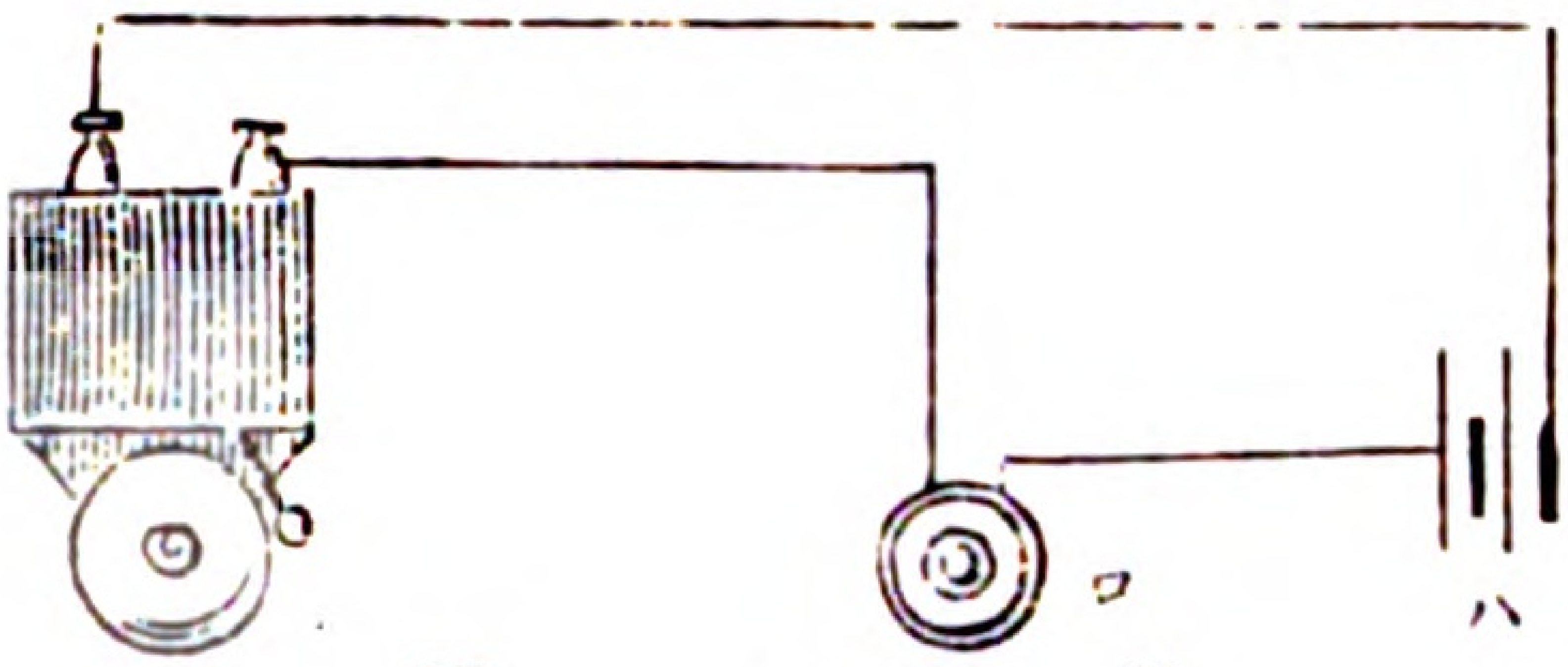
科學

電氣の應用

R・Y・生

現今廣く用ゐらるゝ電鈴は千八百五十年に、ヲヨン、

ミランドと云へる人の發明せるものにして、第一圖は其の設置を示したるものなり、乃ちハは二つ或は三つの乾電池にして絕緣線を以つてロなる鈕子に結びつけられ、續て又イの鈴にも連なる。人若しロの鈕子を押す時は、電流はハより出でゝイに至り鈴の側なる槌を震動せしむるなり。而してロなる鈕子の構造は倘第二圖に示せる如くロとハとの二重の彈機より成り、ロは電池に通じ、ハは電鈴に連なる。されば常にはロとハの二彈機は其の彈力により互に隔離すれども、人ありロを押してハと密接せしむれば電流は忽ち流通して直ちに電鈴を打つなり。されども一度手を離してロを押すことを止むれば、彈機は再び始の如く反ね返りて電流は中絕し鈴の鳴ることも從つて止まん。圖中イは乃ち此の鈕子の全形にしてロハはその內部を現はしたるものなり。第三圖は又其の鈴の構造を示したるものにして糸卷の如き形をなしたるホは兩極を備へたる磁電鐵、イは軟鐵電鎖、ロは彈機なり、而して此の彈機の一端は鈕子ハに連なり、別に杓子狀をなせる槌(ト)ありて電鎖に接續す、ヘは通常の呼鈴なり。



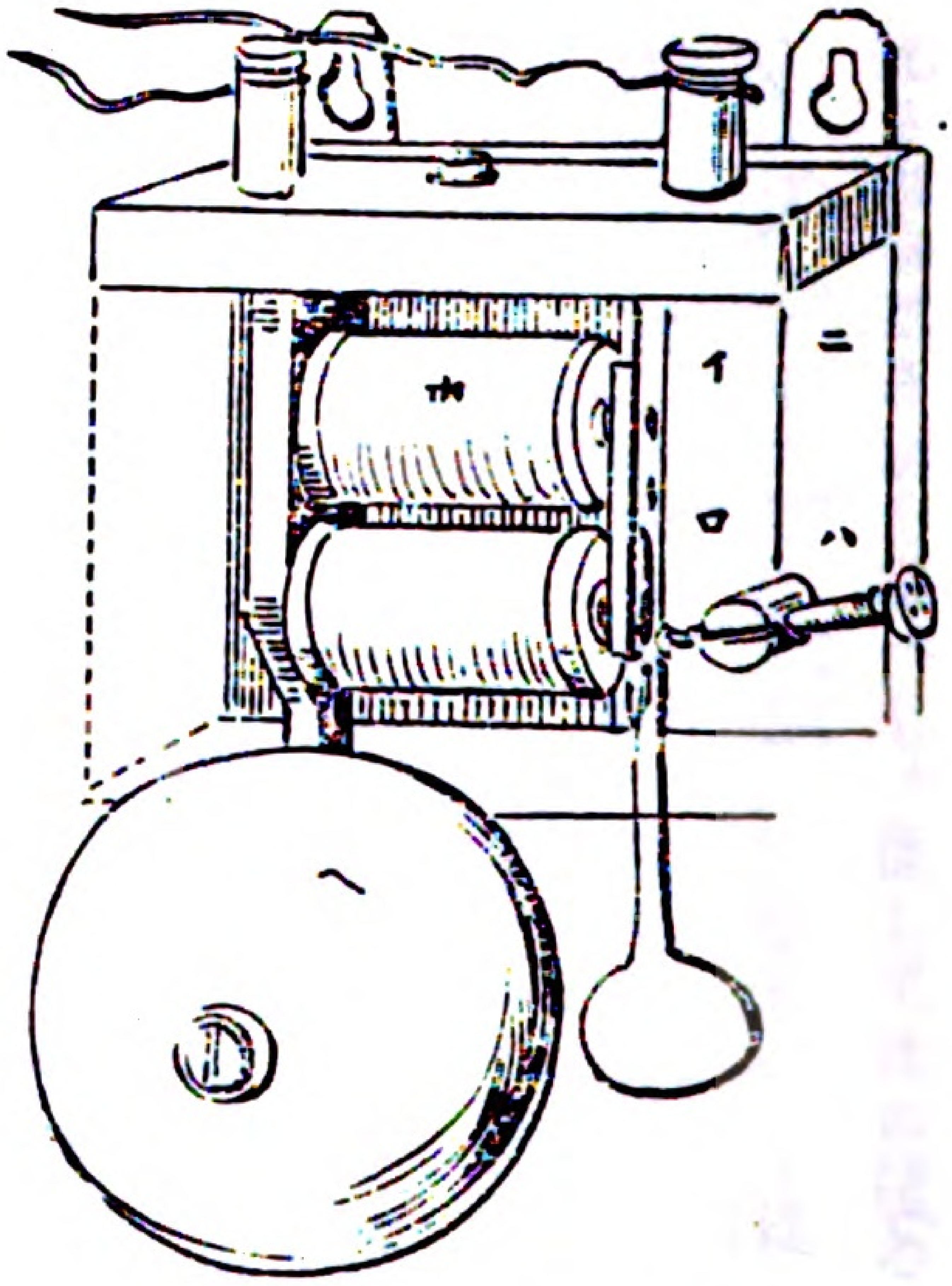
第一圖

今、電流は第二圖の鈕子より通じ來りて線ニを通じてハに至り、彈機ロよりホの磁電鐵に入る、而して電流を受けたる磁電鐵は直ちに其の活動を始めて電鎖イを引きつけ、電鎖イはトなる小槌に震動を與へて鈴を打たしむべし。斯くして電流の通ずる間は何時までも此の働を持續し、



第二圖

電流を止むれば槌の鈴を打つ事も亦直ちに止まる。現今世に行はるゝ電鈴の數は非常に夥しく、其の形も樣々なれど、要するに其の裝置は曾前に述べたるが如くにして、啻、第二圖に示せる鈕子の形を種々に變じて



第三圖

成る可く便利ならしめたるのみ、第四圖の如きも其の一種なり。

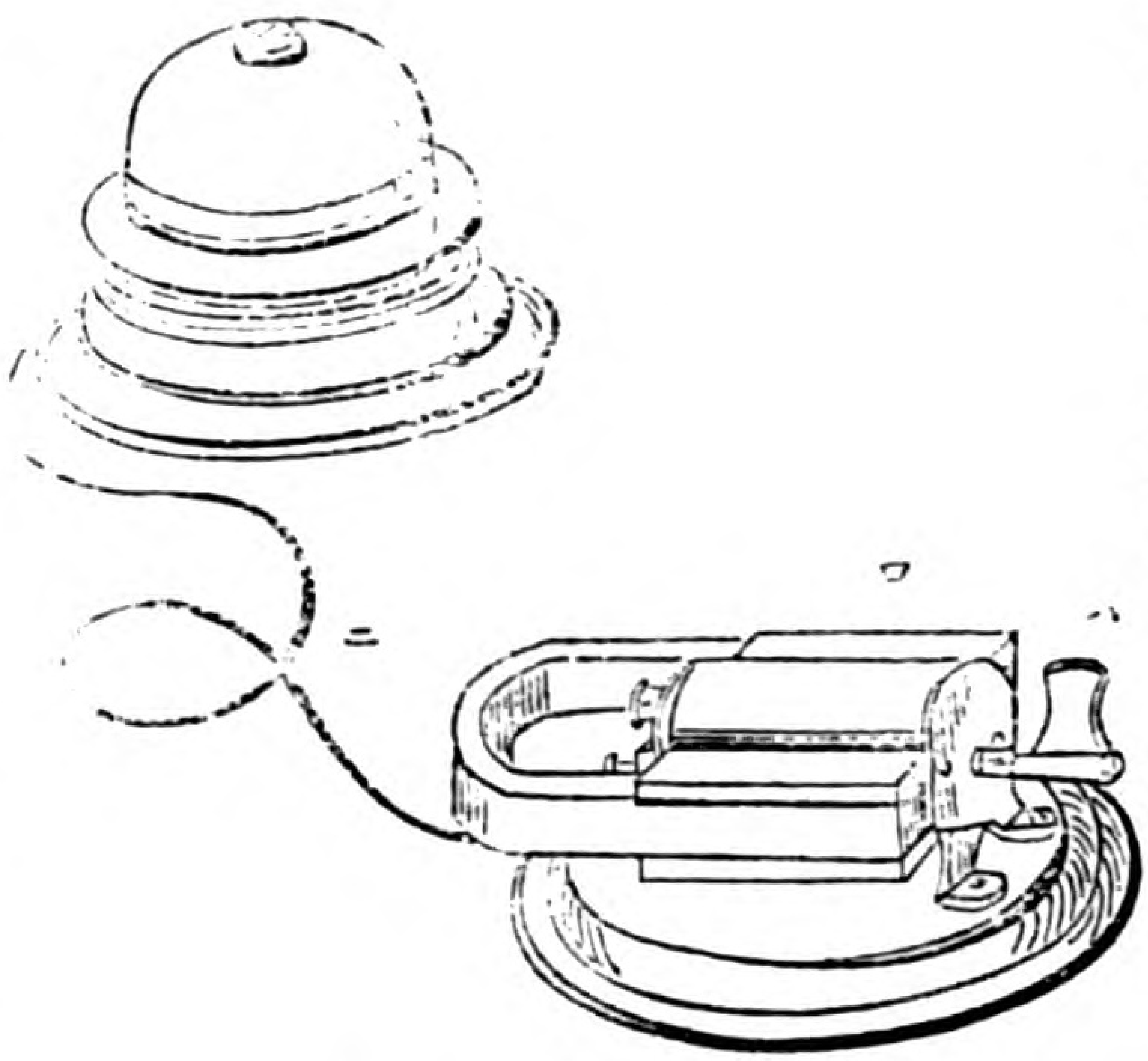
然れども此等は其の電池の用ゐ盡くされ又は電池の乾燥したる時は、不意に其の働を止むるの不便あり。近年磁電々鈴なるもの〻發明せられたるは全く之の不便なからしめんがためなり。此の裝置による時は電池をも要せず鈕子をも要せず、唯牽手の中に小さきダイナモを籠め置き、人ありて之を引けば自然に電流を生ずるなり。吾が邦に於ては未だ廣く行はれずと雖も、尤も簡便なるがため歐米諸國にては今專ら使用せらる。第五圖に示したるものは其の一種なり。乃ちハは牽手、イは鈴にして此の二

第四圖



つの間に電氣を通ぜしむるためにニなる線を要することは通例の電鈴に異るなし。而して其の牽手はロなる馬蹄鐵より成り、其の兩極の間には絶緣線の糸卷を有す、若しハが人力によりて轉回せらるゝ時は此の糸卷は磁石の兩極の間に働きて電流を發生し、發生せられたる電流は直ちにニなる線によりイに至り、其の下にある磁電鐵を化して以つて傍にある軟鐵電鎖を引かし

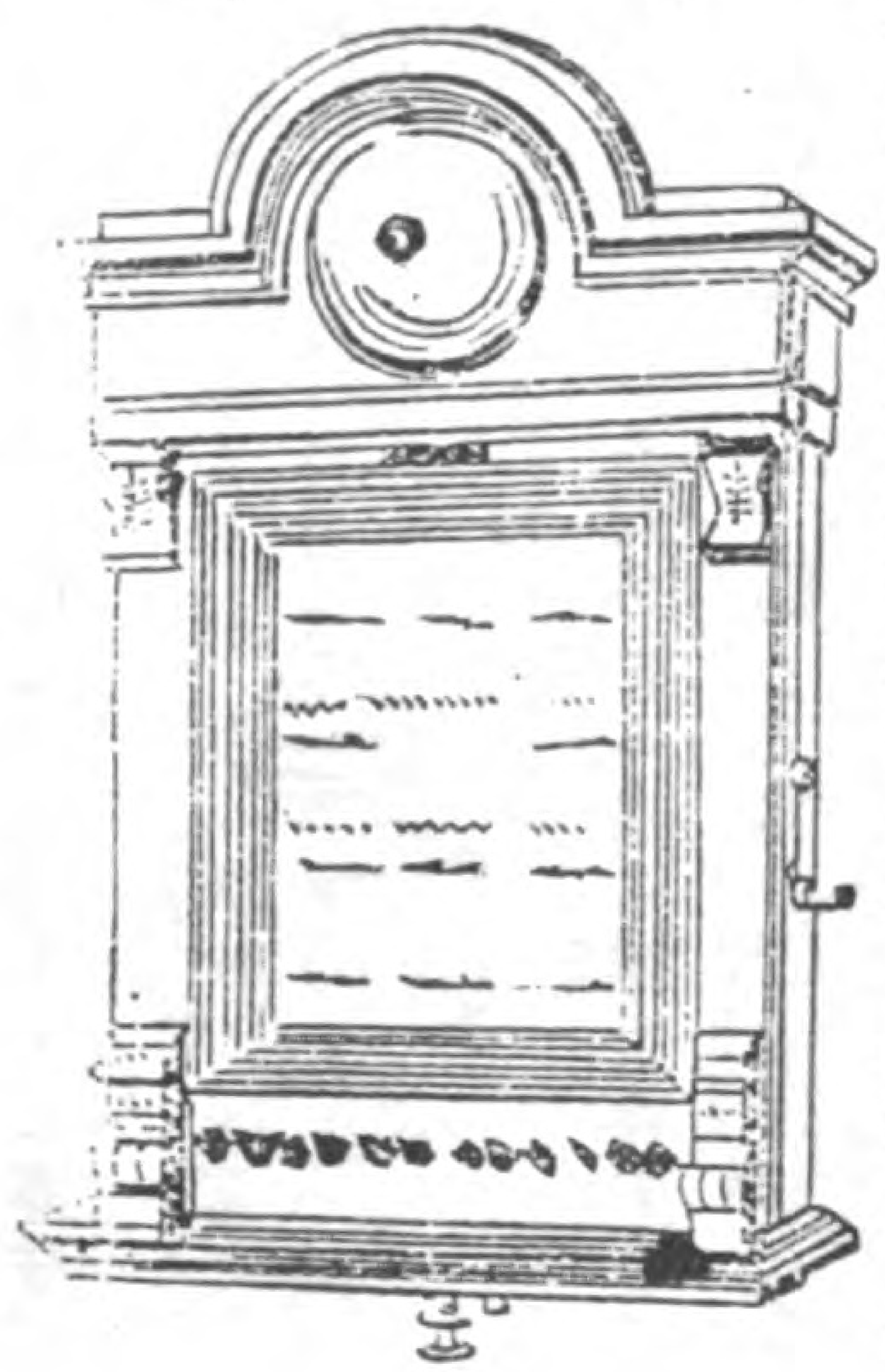
め、從つて槌をして鈴を打たしむるなり。勿論此の場合に於て鈴は如何なる所にも持ち運ぶことを得べく其の便益決して一二に止まらざるなり。



第五圖

大家旅亭の電鈴に至つては倘之と共に指器の備へ附けあり、同じく電氣の働により第六圖の中央にある矢形の針は指すに從つて、何れの室より呼び出されたるやを明かならしむ。

室内に起りたる火事も亦此れと同じき電鈴の仕掛によつて警報せらるべし、乃ち先づ電鈴の牽手に一つの分銅を裝置し鎔解し易き金屬を以て之を他の一部に附着せしむ、されば若し火の起りたる時には其の火力は直ちに此の金屬を鎔して其の分銅を墜し、墜されたる分銅は鈕子を壓して茲に電流を生じ他の一端にある非常鈴を鳴らすなり。又鈕子の傍に寒暖計に類似せる水銀計を置き、室内の溫度其の平を失する時は水銀は直ちに昇騰して中に備へられたる白金線を突き、白金線は鈕子を押して非常を報ずるの法もあり。されど其の尤も巧き裝置は、小さき箱の中に薄き金屬の隔膜を置く事なり、此の隔膜は熱に遇へば速に膨脹して其の中心に於て屈曲すべく、屈曲したる隔膜は直ちに鈕子を押して電流を通ずるに至るなり、前の水銀を用うる場合



第六圖

に於ては其の働徐々なるが故に非常を報ずる事も亦緩慢に失する事あれども、此の方法による時は隔膜其れ自身が既に屈曲し得べき性質を有し、且つ又その屈曲する時は強き彈力を生ずるに依り、尤も確實にして又尤も敏快なる事を得べし。而して此の種の自動警報機は等しく路傍の火の見櫓にも適用しうべきものとす。

盜賊防禦のためにも亦此の電鈴を適用したる事あり。則ち窓框、戶口、梯子段等賊の入り來るべき場所には悉く電鈴の鈕子を備へ置き、晝は家人の之に觸れて間違を生ずる事なき樣、板又は壺を以つて掩ひ置くなり。賊若し入り來りて戶を開かんと試むれば戶口に備へられたる鈕子は直ちに押されて非常を家人に報ずべく、窓より飛び込まんとすれば窓框の鈕子は忽ち電流を鈴に通じて鳴らしむべし。或は電鈴に代ふるに電燈を以てする事あり、即ち商店又は役所に於ては其の軒前に掲ぐる電氣燈に赤き一枚のガラスを備へ置き、其の上部に電鈴と等しき裝置をなし、鈕子は前の如く窓框、戶口等に設くるなり。若し賊の入り來るありて其の鈕子を踏み又は押す時は、電流は直ちに電氣燈に通して其の赤ガラスを墜とし、燈光をして變ぜしむ、斯くせば屋內には縱令人一人居る事なしとも、夜行巡査は其の燈光によつて異變の內に生じたるを知り、それ〳〵手當を爲すを得べし。强て金庫の戶を開き、又は引出の錠を壞りたる時の如きも亦同じき設置によつて警報せらるゝを得べく、數年前米國に於ては前記電燈に何一層の工夫を加へ、其の光によつて賊の姿を寫眞したる事あり。電氣の應用亦玆に至つて極まれりと云ふべし。

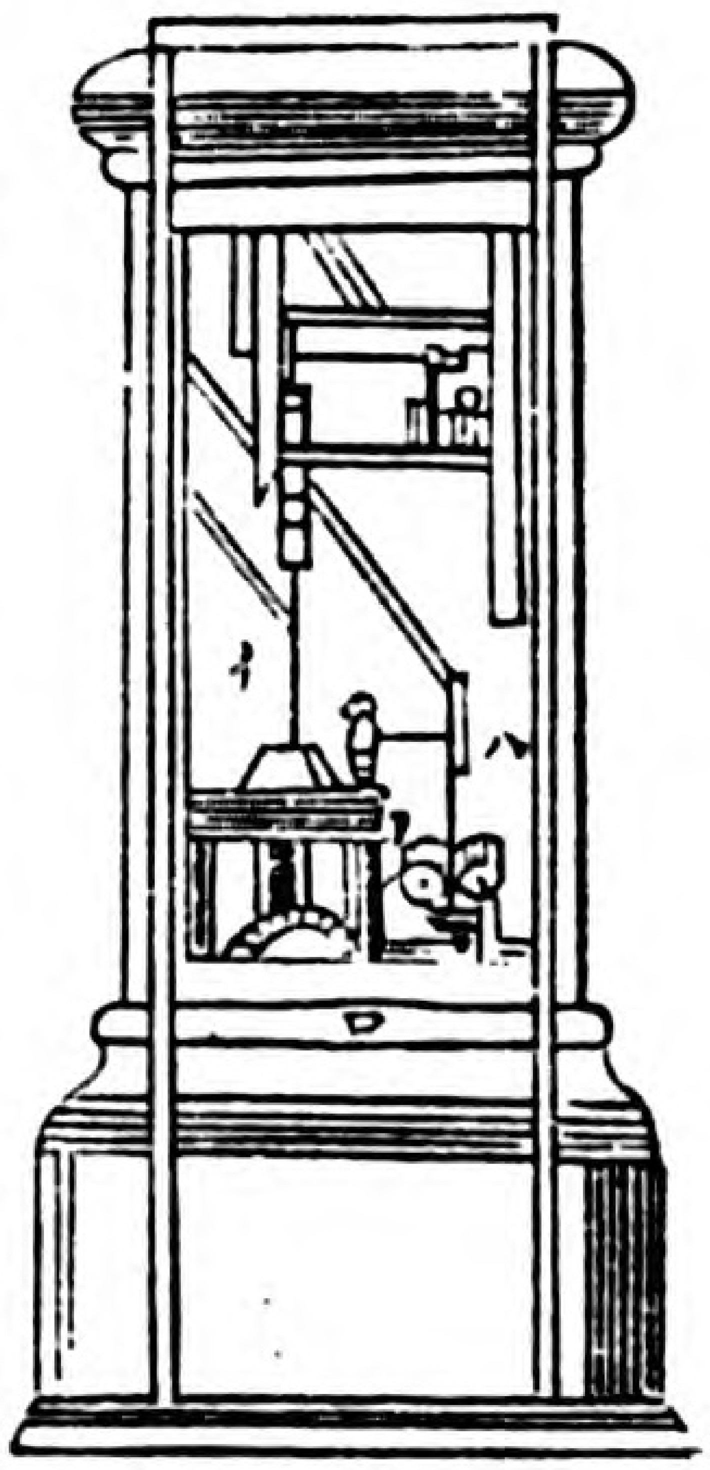
貯水池の水の時々增加して、爲めに想はざる異變を來す事あり、之を妨ぐために今は水準面に電鈴を裝置し、鈕子には水面に泛べる浮子を以てし、水增せば浮子上進して鈕子を押し、以つて非常を番人に報ずと云ふ。

是よりも倘面白き設計は暖室に於ける電鈴なり、各植物園又は其の他の農園に於ては槪ね貴重なる植物を養ふために暖室の設けあり、殊に守衛を附して之を衛らしむ。されど夜間時々氣候の激變して霜を下し霧を生ずることあり、かゝる時には守衛たるもの迅速に其の手當をなさゞるべからざるも、如何せん、室内に在つては室外の氣候を知る沁難く、況んや深夜暖室内の温度の如きは殊に明にしがたきものとす。されば之をして隨時適宜の處置をなさしめんため水銀電鈴の設置あるなり。水銀電鈴とは寒暖計の少しく大なるものにして、温度激降すれば水銀も激降して其の端にある線を押し、押されたる線は電鈴の鈕子を押して守衛の目をさますなり。此の装置は倘溫室に適用して尤も効ありと云ふ。

マッシイ快慢輪とは『フライ』（羅針盤の方位を記せる所）の回轉によつて船の速力を驗する機械なり。船の進航するに當つて快慢輪は絶えず旋轉し、其の旋轉の度數に應じて『フライ』も亦廻轉して以つて甲板上に備へられたる鈴を鳴らすなり。近時發明せられたる電氣快慢輪と云へるは乃ち之に電氣を應用して其の遲速を驗知するものにして電流は快慢輪に結びつけられたる亞鉛と銅との化學的作用によりて發生せられ、水中に深く沈められて快慢輪の旋轉するごとに其の電流は甲板上の機器に通じて其の速力を示すなり。

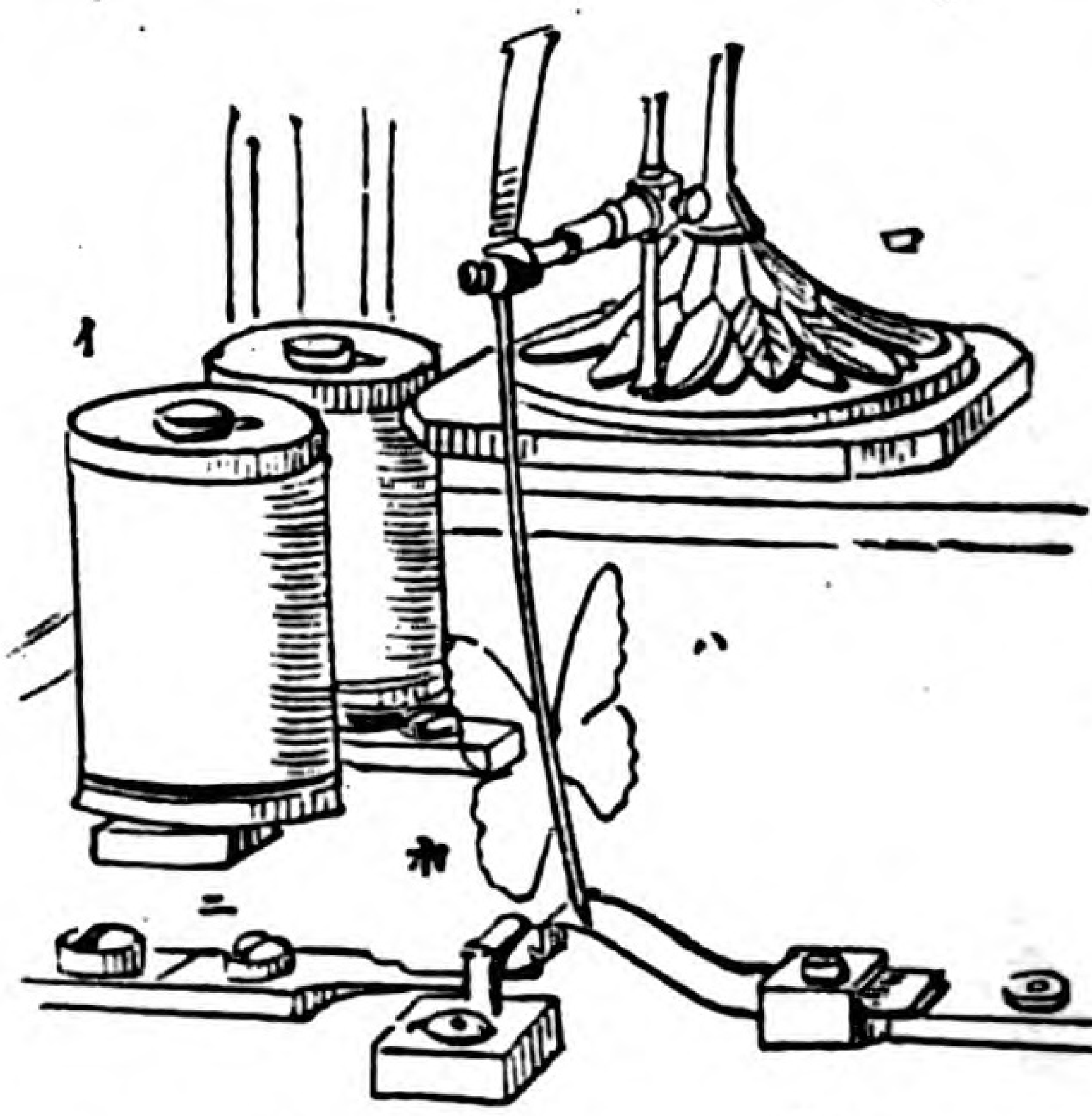
キャプテン、マクエボイは嘗て水雷及水雷艇の近接せることを電氣の力によりて知るの機械を發明したり。その機械とは水中に沈められたる一個の甕にして上部に磁針と鈕子を備へ波浪のためにも動かさるゝ事なき處まで沈むべし、而してその鈕子は絶緣線によりて船中の電池に通じ又他の端は電鈴に連結す。今、水雷發射管より發射せられたる水雷は、其の後部にある推進器により靜に水を切つて進み來るや、小許の波動をも

厳しく感受する磁針は直ちに鈕子を押して電流を通ぜしめ、以つて船中にある電鈴をして非常を報ぜしむ。されど此は單に船の碇泊せる時にのみ應用すべきものにして、未だ戰時艦隊操縦の間に試むべからず、之をして凡ての塲合に於て凡てその功を奏せしめんとするには尚一層の工夫を要すべし。



第七圖

近頃に至りアレキサンダァベーンと云へる人時計に電氣を應用し、錘の代りに鐵の小さき振子を置き、磁電の力によつて之を左右に振動せしめ以つて時を計りたり。されど其の振動の速度をして常に一定ならしむる事能はさりしかば、廣く用ゐられずして止みき。後、蝴蝶辰儀の發明せらるゝに至り此の不足も亦補充せられぬ第七圖は其の雛形なり。乃ちロは磁電鐵にしてイは此の磁電鐵の電力によつて震盪せらるゝ振子、ハは蝴蝶の形をなせる雲母製の薄片にしてイの振動をして常に一定ならしむるものなり。尚之を詳説すれば特に第八圖に示したる如くイの磁電鐵に發生せる電氣の力によりロなる鐵製の振子は其の電氣の流通する間は前後に振動し、振子振動すれば從つてハなる雲母蝴蝶も運動して止む事なかるべし。



第八圖

されど若し振子の運動すること遲緩なる時は雲母蝴蝶の末端にある線はホなる彈機に附着し玆に電流は一時閉止するも、次で亦イなる磁電鐵より又發電して逐に又前の如く一定の度に至るを得べし。而して電氣

の時計に應用せらるゝ事は唯に之のみに止まらず、此處に一個の中央大時辰儀ありとせんか、電流は其の時辰儀より他の幾多の小時辰儀に通じ、中央の指針が指す通りの時間を指すべし。斯くして一町村又は一會館に於て只一つの時辰儀ある時に凡ての家凡ての室は極めて簡易に時を知ることを得べけん。

小兒の世界

馬鹿な鼠

桂陵

先つ或る所にネ、忠三ッて鼠があつたのよ。それが誰れか見た樣に剛情で剛情で仕樣がないの、そして御マケに何時でも何時でも居張つてばかし居るもんですから、皆に嫌はれてネ、とう／＼仲間つぱづれにされてしまつたの。けれども根が剛情な鼠だから、チッとも何とも思やしなくて、反つてネ「何、仲間ッぱづれにされたつて搆ふものか一番ドエライことやらかして、奴等アびつくらさしてやらふ」ッてんで、それから御藏の中へ這入り込んでしまつたのよ。そして毎日々々詩を吟じちやあ「今に見ろ、今に見ろ」ッて云つてるんですけれども、いくら今に見ろッたつて、寢て居て詩を吟じるばかしちやあ、何にも出來やしませんし、其れに第一御飯食べることが出來ませんからネ。流石の忠三も腹が減つてはならぬものと見えて、夜になるとソッと起きちや母家の御臺所へ行つて、御肴を取つて來たり、御米を運んで來たりなんかして居ました。ダが、母家の方にはブチつて大きな猫が目を丸くして居るので、忠三は御臺所へ行つても氣が氣ぢやなくッて、ネ、一寸音がしても直にかくれたり、風が吹いても逃げ出したり、おつかなびつくで毎日々々食べ物を取つて來るの、それでも御藏の中へ歸りや大居張り

デテ、さも何處かの御料理屋から毎日自分の處へ仕出
し爲て來る樣に、態と先の御仲間の近所へ行つちや
あ、『今日の鯛は腐つて居たから明日は一つ小言を云つ
てやらなきやならぬ』なんて、大きな聲して云つてる
んですよ。アキレつちまうじやありません乎。
其の中にダン〳〵日が過つて愈、御正月と云ふ事にな
ると、忠三は、『此度こそ平常己れの惡口ばつか云つて
やがる奴に閉口さしてやらなきやならん、何樣したら
善からふ』ッてそんで、いろ〳〵考へてましたッけ
が。終ひに、『ウム能し〳〵、あいつ等ァ毎年御正月に
なると御座敷い出掛けて行つて御備へを引きずつて來
て生でカヂつてるが、此年は一つ己があいつ等ァ呼ん
で御雜煮を喰はしてやれ。するとあいつ等ァ御雜煮な
んて生まれて始めての事だからキット聞誤つくに違い
ない、聞誤ついたら其の時さんざ冷やかして、そして
思ふさま馬鹿にしてやらふ。左樣だ〳〵つて』ッ、そ
れから夜になるとセッセッセッセッつて、御餅を運ぶ
やら御芋を持て來るやら暮で忙しいもんだから御臺所
ぢや誰れも氣がつかなんでると、そう〳〵、御鍋から
御したじまで持つて來て、そしてすつかり仕度ウして、
大晦日の晩から火を起して御雜煮を煮はじめたの。け
れども自分も御雜煮ッて何樣云ふ風にしてこさへるも
のか能くは知らずに、唯、御臺所で御さんの拵へてる
のを一寸見たばかしなんだから、サア大騷動で、御鍋
へすぐに御餅を入れて見ても焦げるばかしで、サッパ
り埒はあかず、御菜と御芋をまた投げ込んで一生懸命
七輪の下を煽いで居ると、生憎七輪の口が向ふの方を
向いてゝ火はダン〳〵消えてしまう、又起しなはして
煽でいると此度は御菜と御芋が焦げはしめて、それは
〳〵大騷ぎだつたの。デモ、何樣か此樣か御雜煮らし
いものを拵へて、サアそれから御湯用うやら、頭をと
かすやら、先祖代々讓り渡しの御小袖を着て、袴をは

いて時計を帶へはさんだ頃には、もう東の方が明くなつて、寢坊な鷄が御友達にはぐれてドケイッタアくッて鳴いてるとこでした。それから急いで先の御仲間の處へ行つて、『新まりまして先づ御目出たう、昨年はつい事の行き違ひから皆樣に御叱りを受けまして、今になつて考へて見ますと、イヤハヤどうもイヤハヤの至りで、申譯がございません。私も最うすつかり心を入れ替へましたから是れ迄の事は何樣ぞ御免し下さいまして、當年よりは又もとの通りに御引き立て下さる樣に御願ひ申します。就ては甚だ恐れ入りました事ですが、マア一寸御詫のしるしまでに皆樣に御雜煮を差上たう御座りますから、御差支がなければ此から何卒御揃ひで』ッてチ、さも改心した樣の事を云つて謝つたの。すると向ふの方でも『あゝ云つて謝つて來たのだからマア勘忍してやつてもよからふ、それに御雜煮だなんと滅法界なものを御馳走するんだと云ふから宜いぢやないか』ッて、止せばいゝのにノコく出掛けて行つたのですよ。

忠三の方ぢや、大勢ゾロくやつて來たのを見てこやつ占めたぞ、今日はイヤッて云ふほどイヂめてやれッてチ。それから御藏の隅の長持の上へ澁紙の古いのを敷いて、其處へ皆を連れて行つて、それから燈明皿の欠けたのや、御はぐろ壺のつぶれたのゑ一つ一つ御雜煮をヨソッて、さあ澤山召上レッテ出した處が、鼠さん一人も喰べ方を知つてるものが無いでしよう、烟がたつてさも御いしさそうに見えるから、皆喰べたくて喰べたくてたまらないが、ウッカリ手が出せないので、マア貴方から御先へ、マア左樣御仰らずになんて云つてゝ、中には一寸憚りへなんて立つて行くものもありましたのよ。スルト忠三はそれを見ていてチ、『何故皆樣召上つて下さらないのです、私が折角拵へたものを何方も箸を御取りなさらなくては甚だ迷惑仕ります、

サア何樣か召上つて下され、サア何卒ッて』云ひながら、側を向てせゝら笑ひして『尤も平常召上てるものが召上つてるものですから迚も御口には合ひますまい、土のついた大根や堅くなつた蓮根をカヂッて居て、時たま御肴でも目付けて來ると、家中總がゝりで引き廻す樣な御方には、到底御雜煮は召上られますまゐ。矢張り平常喰べつけてるものゝ方がよう御座いましよう』ッてチ、ひどひじやありませんか、蚓蜒の死んだのを卵の殼へ載せて、『サア此でも召し上がれ、御雜煮は私し一人で頂戴仕りましよう』ッて、御鍋を持ち出して來てッゝキはじめたのですよ。

呼ばれて來た鼠は皆怒りましたチエ、眞赤になつて怒りましたけれども自分達か實際喰べ方を知らないのですから、默つて小さくなつて居ますと、忠三は倘かし大きな聲を出して、『同じ鼠と生れて來ても御雜煮一つ喰べられないなんて、なんてマア意氣地なしだらふ、それから見ると私等わ有りがたいものだ。チ、最う宜しかな、どれ戴きましよう、皆さん御免』ッて、箸を取つてチ、御雜煮を喰べはじめたの。所がソレ御雜煮は昨日の晩から煮て居たので御餅がすつかり崩れて、ドロ〱になつてしまつたんでしよう。それに御つゆはみんな煮つまつてチ、箸で掬ふとしても掬へないんですワ。仕方なしに忠三は箸を置て、平常の樣に手づかみで喰べようと思つて手をヒョイと入れると、なんてつたつて煮えてる御雜煮ですから、アチゝゝゝゝ、つてチ、手を火傷したの。けれども皆の前ではあるし、今自分がサンザ大きな事を言つた後ですから、そのまゝ止めてしまう事も出來ず、側に在つた水の中へ手を入れて冷しては取り、冷やしては取り、やう〱の事でトロ〱になつた御雜煮を一すくいすくい出したの。そしてフウ〱吹き乍ら口ン中へ入れると、それドロ〱になつてる御餅でしよう、上顎へつくやら下

顚へつくやら、それを又取らふとして手を入れると、手へも亦くつついて、大騒ぎなの、それでもマア、何樣にか此樣にか呑み込みますと。此度は大變、喉へつかえてウン〳〵云ひながら目を白くしたり黒くしたり、手足をバタ〳〵やつて轉げまはりましたが、最う誰れも助けてくれるものはありません、長持の上の鼠は鬨の聲上げて返つてしまつて、忠三はそのまゝ死んでしまひましたとサ。ホントに馬鹿な鼠チエ、けれども、剛情で、居張つて、人の云ふ事を聞かないものは、皆、此樣次のよ。よ御座んすか、解つて。

家政

幼兒の遊戯と玩具（承前）

定伯

前には、幼兒の遊戯が、十分の興味有りながらに、運動の幇助たらざること、其の遊戯の伴侶たり、又た材料たる玩具が、必ず教育的意匠を以て、製作せられたる者ならざる可からざることを說きたり。是れより進べんと欲する所は、先つ兒童の各年齡に從ひて、身體各部の發達上に裨益あるべき遊戯そのものゝ種類を品定し、次に其の各技に恰當なる玩具を評論するを以て、最も順序有ることゝは信ずれども、その事や、頗る諸般の學理と交叉せることにて、輕々しく單一方面より斷定するを許さず、加ふるに其の類も、亦た頗る困難なれば、詳細の議論は、之を他日に譲り、爰には、惟だ本邦在來の玩具、及び稿者が近日目撃し、又た思ひ寄りたる所の玩具等、總べて有益無害なりと信ずる所の玩具を擧げ來りて、其の各玩具が、遊戯乃至運動と關聯したる効力を附說するに止むることゝせり。若し夫れ、之を讀み給ふ諸君の家庭に於て、斯かる稿者の、即席的且つ獨斷的考慮よりも。更に幾層精緻

なる考慮を發揮し給ふことあらば、稿者の滿足何物か之に過ぎん。

(甲)視覺に關する所の玩具

有りと有らゆる所の玩具、一として眼に關係なきは非ざれども、特に視官の育成に有効なる者を吟味するは、亦た大切なることなり。今ま差當り心に浮びたるものを例擧せば、概ね下の如くなり。

(イ)吊したる所の木球一箇に彩色したる所の皮球

とはフロイベルの發案に係れり。生誕後二三個月を過ぎたる幼兒にして、克く其の手臂を動かすに至りたるときは、兼ねて其の觸覺をも働かしむるに足るものなり。又た臂の運動をも助くるものなり。

(ロ)紙製花形の風車

とは在來の者、嬰兒に供する者は、鮮明なる三正色(赤、青、黄)などに限り、軒端などに吊し置きて、時々に觸目せしむるを宜しとす。

(ハ)花火線香浸み出し、炙り出し等

とも亦た在り觸るゝもの。夜間嬰兒の催眠し難き時などに、點じ見せてかなり。普通の線香に、點火して旋回し、見せしむるも亦た可なり。

(ニ)形體(積木、列べ板等これに屬す)

孩兒に供するものは、正六面體、四面體、球體などとし、或ひは六面體の一面に、球體を載するに足る凹所を施し、又た球の一部を極めて少し許り剝ぎ、その上に四面體を載せ得可からしむるが如き、亦た一好工夫たるべし。

(ホ)色牌、乃至色絲、

色牌は木又は紙にて作るべし。嬰兒に施す

ものゝ色は、三青色乃至白色黒色等に限り長ずるに從ひて、漸く多く諸間色を交へ、且つ各色の名稱をも熟知せしむべし。彼の「お手だま」の如きも、其の大いさの同じきを與へながら、其の色には、個般の心添あらんこそ願はしけれ。

（へ）風船並に紙鳶

此等は、單に眼のみに限らざる好玩具なれども、又た視官の練習を幇助するものなり。例へば紙鳶絲を延べたる長さと、紙鳶の大いさとを見較べしめ、以て間隔の目算を機敏ならしむるが如し。

（ト）羽子及び手毬

此等も、亦た決して視官のみに偏したるものならざれども、然かも之を弄するに際りては、視力まづ率先して活動せざるを得ず。是れ爰に加ふる所以なり。而して此の二者は、全身の諸運動、殊に腕骨、及び手脚の關節を強むるなど、最好無上の玩具なれば、少しく製作上に改良を加へて、以て男子にも適用せしめたきなれ。蓋し毬技が、其の能く衛生上の要點を皆具せるは、埃及、希臘、羅馬の古代より、夙くに定論有る所、且つ嬰兒と雖も、亦た太だ愛好する所のものなり。

（チ）むさし、碁、將碁、双六等

此等は、知力の大いに發達して後の玩具なり。むさし、五目列べなどは、先づ弊害少き所の勝負事なるべし。

右の他は、類推して知らるべし。又た圖畫の用具に至りては、其の技寧ろ純然たる知育の範圍に屬すれば、之を謂はず。抑々視官の練修は、固より教育作業の一

大要部なれども、色彩を辨知せしむるが如きは、寧ろ遊戯上の好技に屬し、結局謂はゆる色盲などの患ひを防ぐ所以なりとす。

殊に又た、視力を本とする所の遊戯は、其の技の頗る多種なるを見る。即ち「かくれんぼ」「ごみかくし」及び「視競べつこ」等は是れなり。

競視の技には、同大の者を異距離より分かつべきことあり、同距離より異大の者を判かつ可きことあり、動ける者に對することあり、休せる者に對することあり、又た急速に識別す可きことあり。總て之に慣れしむるは、視覺を完全にするの良法なり。而して斯かる道具となるべき玩具は、大要下の如かるべし。

鏡　虫眼鏡　色眼鏡
寫眞　幻燈　覗き眼鏡
ばのらま　尺　縄
繪合せ　色かるた其の他色々の文字かるた

幼兒をして、自然界の動植物を搜索せしめ、採集せしむるは、視官の爲めにも、頗る有趣有益の技なり。見よ、賤しき翁媼が、其の衣に潜伏せる蚤虱を討ぬるは、いかに興有ることゝせるかを。幼兒の討索的遊技の興味に於けるも、それと均しく、幼兒をして、小石羽毛、貝殻等を拾はしめ、或ひは草花樹葉を摘ましつ、其の似寄れるものゝ形ち、又た色などの差異をも發見せしめ、又た絲にて樹葉を點綴せしむるが如き、種々の面白き手段あるべしとぞ思はる。尚ほ又た蝶、蛍、蟋蟀、「かじか」小鳥などの、觀賞的禽虫を捕獲せしむるは、單に眼官の爲めのみならず、全身運動の爲めにも、決して禁ず可からざる所なり。然るに愛生は、之を重き一教條と銘せしむることそ、德育の正鵠なれば、捕獲して暫時飼養せしめたる後は、又た放遣せしむるが如き注意ありたきものなり。

（乙）　聽覺に關する處の玩具

聽覺は、言語を辨知する所以の階梯なれば、知識の育成上には、視官に亞ぎて緊要なるものなり。別けて今や外人の内地雜居も、將に開放せらるべきなれば、邦人の之に聰明なるべきこと、一段の急を來せり。抑々今を去ること、三百年以前までは、歐米諸國にても、各種の音調を辨別し得る者少く、更に能く各種の音調を發する者は、千百人中の一二人に止まりき。又た古代に在りては、希臘獨人のみは、八個の格音を有したりしかども、尙ほ十三個の音格を有せざりし、而して他の諸國人は、僅に五個の音格を有しきのみと。然れども輓近音樂の進歩著しく、聽覺鍊修の徵、愈々增々顯然たるに至れり。夫れ談話、唱歌の如きを以て、一に天賦に歸するが如きは、僻見の大いなるものにて、概して聽官鍊修の缺如に由來するものなれば、兒生れて四五箇月ともなり、單音を聽取り得て、料話し、又は人の擧動を眞似る頃ともならば、各種の物音に觸接せしむること甚だ肝要なり。且つ又た各種の聽官は、縱ひ遺傳的に不可能なるの所感ありとも、數世引續きて、其の發達に努力するときは、必ず挽回し得る事を知るべし。さて、之に屬する玩具は、

(イ)がら／＼
(ロ)鈴の類
(ハ)ぴー／＼、其の他一切の笛類
(ニ)でん／＼其の他の太鼓、鼓の類
(ホ)琴、風琴、月琴、木琴及び三味線等
(ヘ)喇叭
(ト)鐵砲、大砲の類
(チ)あげ花火
(リ)囀禽及び鳴虫
(ヌ)擬製電話機

等は、皆な何れも聽官を豫考せられたるものなるべし。

然るに、音響は、木片、諸般の金屬器、陶器、玻璃器、

又は紙、布など、何に寄らず、質と體との異なるや、必ず各固有の音を有せざる無ければ、取りて以て玩具の缺を補ひ能はざるは無し。而して聽覺の聰明を促がし、又た優美の情を育つるに、與かりて力ある者は、人聲及び禽虫の聲是れなり。乃ち聽官に關する所の技を吟味せば、「ちよッち〳〵」「高い〳〵」「あわわ」「おつむてん〳〵」「かいぐり〳〵」などの小事より、漸く進みて、種々の拳となり、元と遊びとなり、又た進みて、火廻し、逆言、謎、あて物、文字鎖し、歌がるた拾ひ等となる。此等は、皆な、玩具無き場合の好技なり。

家庭の教育上、幼兒の聽官を慰めんとする場合には、左示する如き諸方便、亦た面白かる可し。

（一）　時計、其の他兒童の熟知せる物音を、然るべき距離にて鳴らし、其の數を數へしむること。

（二）　或る距離より、低聲にて語を唱へて、兒にそを解せしむること。

（三）　兒の面前にて、先づ二三種の物を打ち鳴らして聞かしめ、次に物蔭にて（或ひは俯き且つ閉目せしめて）再び右の中なる一物を打ち、以て打ちし物を當てしむること。

（四）　或る距離にて、同時に二種以上の物を鳴らし、其の物の何々なるやを解せしむること。（未完）

「前號本欄正誤」　五四頁下段態能とあるは態度なり五五頁上段第四行他にとあるは他はなり同第十二行米に遊戯とあるは單に遊戯なり五六頁上段楽器の傍訓はスカフタなり五七頁第五行ざの下にるを落せり

家政の心得いろ〳〵

東府　稻　葉　生

左に列記する諸法は記者近年實地に行爲し其虚ならざるを信ず

鷄卵の新舊の試驗

食塩三十二匁を純水四十匁程の割に溶解し之に卵を投

ず然る時は生後一日位の者は水底に沈み三日位の者は水の中位に浮游し五日以上の者は順次日數の度に從て水面に浮ぶ者なり

水の良否の試驗

水を盞に盛り之に石鹼を亞爾個保兒に溶きて三四滴投入すべし其水純粹なれば其儘清み居れど混合物ある時は必ず白き泡を生ずる者なり又た小茶碗に盛り其中へ硼砂一片入るべし惡水なれば濁り好き水なれば清む者と知るべし

絹布を紫色に染る

絹布を染めんには之を明礬水中に暫時浸し後ログウード及び蓚酸の二品を以て染むべし但しログウードは南米メキシコ國に產する黃色と赤色とを帶ぶる二樣あり皆藥舖にあり

絹布を黑色に染る

絹布十ポーンドをツウエーテル氏驗液中四度の硝酸鐵中に暫時浸し黄血鹽二オンスを加へて鐵氣を洗出し然る後綠礬を以て黯色に染むべし若し一層濃き色を好まば少許のログウード液中に浸し染る事

絹地類を赤紅色に染る

例令ば絹布十ポーンド程を染んにはナットペール一品を用ゆるは固より美色を呈すと雖若し少しく藍色に爲さんと欲せば少量の(アンモニヤ)を注加すべし又赤色に爲さんとせば少量の鹽酸錫液を注入して染むべし但以上藥品は皆藥舖に有り

染めたる絹布の色の褪めざる樣洗ふ

水に食鹽を混和して是に絹布を一時計り浸し置後取出し常の如く石鹼にて洗ふべし但し鹽の量は銅盥一杯の水に輕く一摘みを投入す可し

絹布の油汚を脱く

布片等の油汚を脫かんと欲せば其汚點の上に吸墨紙を當てゝ其上を火斗に掛けるなり又大根の搾り汁を湯に

なし洗濯するも可なり

色染の木綿類を洗ふ

青色赤色緑色など等の色染木綿は石鹸水にレモン水か或は緑礬油に酢を加へて洗ふも宜し

藍抜きの便法

硝石精に水半分許を入れ之に饂飩粉及び鬱金粉を攪拌して藍地の布に其混和物を塗り火にて乾かし水にて洗へば藍色は脱却するなり

羽二重及び繻子等に斑點の附きたるを脱す

是等の斑點を脱するには十五六時間其物品を河水に浸し然して後水を絞らずして棒に巻き附け其上を油紙にて包み後ち張り擴くべし又ペンキの衣服等に附きたるを脱すには石炭油に浸したる布にて之を拭へば必ず脱す可し

絹地及び毛織物等を褐色に染む

例令ば絹布を染めんとせば先づ緑礬液中に少量の黄桑液を通じて染れば必ず淡濃兩褐色を呈す可し但し「アルチール」は海草類の「リチーン」より製するものにて其法は該草を細末に爲し水に精混して煉糊の稠となし敗尿又は炭酸「アンモニヤ」を以て腐敗を促し更に石灰水を加へて泡釀せしむべし其煉化物を「アルチール」と稱す之を試驗せんに種々の變色をなせりアルチールの中に酸類を加ふれば鮮明なる赤色に變ず
アルチールに亞爾加里を加ふれば薔薇色に變ず之に鹽を加ふれば深紅色となる

油畫の汚點を清淨になす

フランネル片を清液に浸しよく搾り乾けるを以て油畫の表面を拭ふべし但しフランネルを度々他の清水にて洗い前の如く湯に浸し搾り用ゆべし既に拭ひ終れば水にて洗い羊皮の類に摩擦乾かす可し

衣服に汚點の附着したるを脱す

煙草の脂の附きたるは味噌汁にて洗を可とす柿澁の附

きたるときは白砂糖を擦り付清き水にて洗ふを良とす又鼠の衣服に附きたるは直に飯粒を擦り付け飯粒の黒くなるに至り清水にて洗ふべし又酒の汚點は大豆を煮たる湯水に凡そ三四時間浸し置き後清水にて漸々に洗ふ時は必ず其汚點を取去るを得可し

羅紗等の油の附きたるを脱く

羅紗毛織物などの油汚は薄きポッタース水(藥舗ニアり)にて洗ふ或り又は油汚の上に吸取紙を當て其上に火斗をかけるが最も能き方法とす又毛氈窓帷などの色の褪めたるを快復するには先塵埃を丁寧に拂い刷子にて摩擦しこれに白斑石鹸の泡を硬き刷子に附け擦する可し而して其泡を清き水にて洗い落し又其上を明礬水にて洗い乾かせば其色元の如くなる可し又色の餘り薄き時は護謨水に溶きたる繪具を刷子にて塗れば遠くより見れば殆んど新調の如く見ゆるなり

帽子類を洗濯す

麥藁帽子又は絹の頭巾等の油汚を洗ふには柿の實の澁汁を以つて洗ふ時は汚塵を脱するのみならず又帽子頭巾などを色揚する時は能く染まる者なり

新調の鍋釜の鐵金を脱く

水と柿澁とを等分に混じ酢少量を加へて之を其鍋釜に入れ凡そ一晝夜も置き後ち此水を棄て清水に洗い更に糠味噌の汁を右の器にて能く煎じ其後稻糟を入れて焚くべし

白フランネルを洗ふ

白きフランネルを洗濯するは六ツヶ敷ものにて通常石鹸や曹達などにて洗ふと動もすれば黄味がかりて純白なること能はず之を洗ふには左の品を溶解して用ゆべし

白石鹸百七十匁許　清水六貫四十匁
砂二匁五分

右の割合にて洗用す可し但し永く水に浸し置く可らず

洗ふて後清水にて灑ぎ出し乾かすなり然る時は純白となり宛も新調の物の如し

寄書百珍

何が最も幸福なりや

伊豆　渡邊閑水

健全なる身躰と健全なる精神とを宿し和氣靄々春風の習々たるが如き家庭こそ眞に幸福の最大なるものと存候余や日々星を戴いて田圃に出で終日耕耘に身を委ね夕べに月を踏んで家に歸へるや兒は父よ〳〵と呼んで出て嬉々として迎ふるあり最愛なる妻は甲斐〳〵しく余を迎へて其勞を慰するあり慈愛なる母は又傍らより日く今日はさぞ〳〵寒かりしならんなど〻余を慰むるあり余の快感斯時に如くものなし

後各最と樂しく晩餐を畢るや余は當日の新聞紙上に於ける最と清らかなる談話をなし或時は家庭雜誌を繙き有益にして面白き談話をなすや各滿顔に喜びをあらはし欣然として耳を傾けつゝあり斯の時の余の喜び何物か之に如かん

千金の富又羨むに足らず高位高官又望む所にあらず一家團欒家庭の和樂之ぞ幸福の最大なるものと存候

德島縣　河佐宇治郎

人間は何の爲めに棲息するかとは吾人が是非を辨識するの齡に達するや否や直に胸裏に浮ぶ所の問題なる可し亦之れと同時に人間は幸福を得んが爲めに棲息するなりとの答案を其胸裏に得るならん然らば之を得可き方法手段如何方法手段素より千種萬樣なりと雖ども要するに善良なる道德心を以て身躰心意を良方向に用ひんとは最大切なるとなりと知る可し語を換へて之を言へば遺憾なく義務を盡すにあり、「ソクラテス」曰く具

正の幸福は外部より受けて生ずるものにあらず内部の智識と道德の慣習とより生ずるものなり」と至言と云ふ可し吾人は遺憾なく義務を盡すを以て幸福の標的とす

義務を二大別とし更に之を小別して表となし參考の爲め左に錄す

義務
- 個人的義務
  - 父母に對する義務
  - 自己に對する義務
  - 兄弟に對する義務
  - 夫婦の德義
  - 舅姑に對する義務
- 國家的義務
  - 朋友に對する義務
  - 教師に對する義務
  - 町村に對する義務
  - 國家に對する義務
  - 社會に對する義務

四番　矢野瓜雄

健康之身體　和樂之家庭

人生に於ける最大幸福は即ち是れ

最大の幸福

北但　齋藤天涯

乾坤一轉、新天地を、迎ふると、共に、予の最大希望を述べ、以て、讀者諸彥の一笑に供せん。人の此の世にあるや、千差萬別、各其意を異にし、其希望を異にせり、然り而して、其各自の希望を、滿たすこと程、圓滿なる幸福は、非らざるべし、「足ることを、知ればこそあれ、福の神、二つ網釣る蛭子なければ」、と古人は云へり、されば、衣食足り、大厦高樓に起臥し、食前方丈、美酒佳肴、林の如く、侍女花の如く、出入警蹕、宛然、王侯の如き、是予の所謂、望む所の、幸福に非らざるなり

予は敢て、王侯を望まず、大盡を願はず、衣、身を覆ひ、居、膝を入るれば足れり、所謂、短褐を着て、三

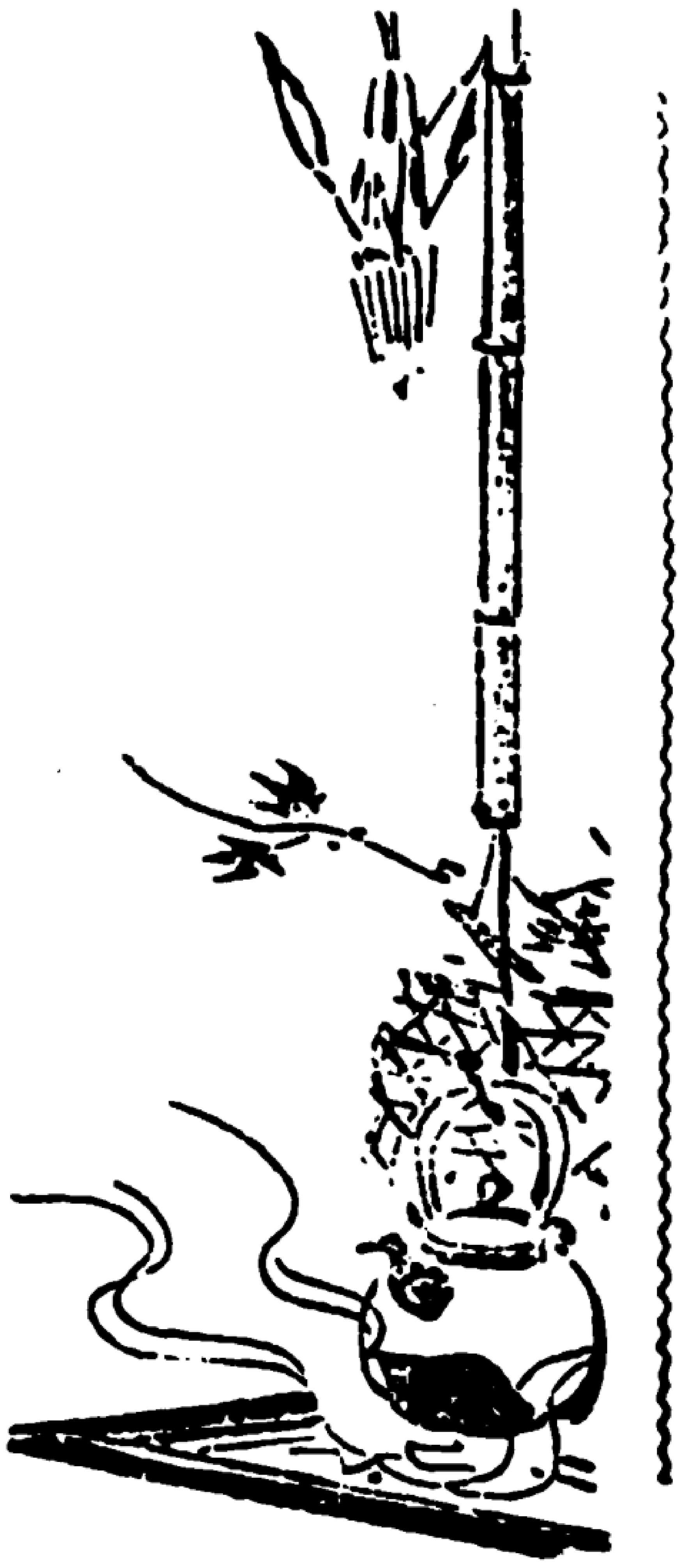
量の居、疏食を食ふて、高枕安臥、古の聖賢を學んで、心を養ひ、身を潔ふして、鼓腹泰平を謳歌し、而後ち、永く天壽を保てば、足るなり、予の幸福此の他にあらじと、信ぜり、然りと雖も、予は、秦の始皇帝の如く、不老不死の藥を、求めて、朽ちざらんとにもあらず希くは「屍は越路の雪に、曝すとも、潔き心は、天かけりて、百世の鏡となりなんかし」、人は活物なり、何ぞ、醉生夢死、蝸牛の眠を、貪らん乎、「千乘を照す美玉も、琢磨せざれば、砂石と、伍を同ふす、其眦を血にし、其拳を石にし、高く論じ、細かに議し、世の風潮に淳して、激濤怒波を、切りまくり、日夜、國事に奔走して、國事民福を、企圖せざるべけんや等しく、五尺の身を有し、五合の飯を食するもの、轟々たる英名を、宇内に、輝すことなく、赫々たる功名を、世上に、知らしめず、默然一世を終るは、何すれぞや、心あらば、宜しく、飛んで龍と揚るべし、咲かば、宜しく梅花と薫れ、散らば宜しく、櫻花と惜まれかし、何ぞ爲すなくして、死を待たんや、志を得は、天にも登り得べし、得ざれば死あるのみ、二者、意の如く成らずんば、彼の天命を樂んで、天壽を全ふせん而巳、是れ、予の必生望む所の、最大幸福にして、日夜憂慮、經營して得んと欲する所なり、

社告

引續き此問題を繼續すべし

家庭雜誌第百拾貳號附錄
(明治三十一年一月十五日發兌)

文藝



山家のもてなし

江見水蔭

玉匣山颪、寒い事かな。大和は十津川の郷、この折立村へ來てより最早や三年。都の風を忘れてから、山家住居の氣樂さは、別の世に生れて出でたるやう。これ程までに有らうとは思ひ設けぬ事なりき。

淋びしさは素より覺悟の上、今更言ふまでも無い事ながら、良人と唯二人さし向ひの一軒家。山の奥の其又奥の、何方を見ても山ばかりなるに、平地とてはなく。田畑も山に

村里も山に、我が屋も山の中途にあれば、入口は平屋、裏手は二階立。庭つゞきの下は、水の瀬音も聽えぬばかりの、深い谷川。洗濯に行くにも岩角傳ひて、登り降りのつらさ苦しさ。

家は檜皮葺、破風下しの一種見馴れぬ建築。木材は土地の物とて、杉板、檜木、欅、栗、存分に遣ふてはあるけれど、壁も無し、唐紙も無し、板戸板目の板圍ゐに、神代の事も思はれて、それはそれは初めの程の住にくさ。拭掃除が第一に行届かでは、煤と塵とに間毎の染まり易く、主婦の心はこれで見られて、中々の苦勞、眠もこれ故ぞかし。

軒先に氷柱、椽下の霜柱、梅は枯枝、これに鶯の如何で來るべき。初春に霞のみは見えたれど、それも向ふの山の炭燒が小屋より立てば、烟かも。聽くは猿か狼か。又は行者の法螺の音か。電話の鈴の聲。馬車の輪の音、それは東京に在りし頃、今は空しく聽く事を得で、未だ針金張らぬ杉の立木、未だ鐵路嵌めぬ荒駒の、それは都に出る事もあらうが、此方は此所に隱れ井の、埋れ水とは成り果つるか。

その山住みの夫婦の者を、翌日は遙々東京から、訪ねて御客樣の御入來。揃ひも揃ふて六人とは、思ひ設けぬ事なるかな。

田舍も松の內、山奥も正月の事とて、いつも手傳ひに來て呉れる、薪を割り水を汲む老爺、扨は針仕事習ひに來る小娘達、それ等を賴む譯にも行かず、旦那樣は何處までも軍

人氣質、非役ながらも銃を放たず、翌日の馳走にと山狩にお出ましゆゑ、妾一人で働かねばならぬか、忙がしや、忙がしや。

如何に山家に居ればとて、此姿のはづかしや、紅御白粉はつけずとも、責めては髪なと結びたけれど、山を越えて月に三度の髪結が廻り合せ。迚も今日翌日の間には合ふまじく、又新に結べばとて、臺所働く身にそれも無益か。筒袖に細帶前で結んで、裾をめくりての女姿。さぞや可笑く見給ふらむ、これが鹿乃女が成れの果てかと、昔知つたる御方は、さぞな呆れ給ふべし。

困るは第一が夜具蒲團、其次ぎが膳椀茶碗皿小鉢。六人前は迚も揃はず、加へて家の旦那様も――然う申しては惡けれど、迚も御手傳ひは被下るまじく、又手傳はうと爲されても、却つて此方の邪魔にこそなれ、いつぞやも煮物の番を願ふたるに、快よく御承知なされて、火鉢の前においでありしが、煮立たぬ内から蓋を取つて、鹿乃、最う好かろ、と呼ばるゝに、短かい日の入らぬ間の張り物、糊をこねたる手も拭きあへず、世話しき中を來て見れば、未だし。又少時すれば蓋を取つて、最う好かろ、見て呉れとある。又行けば、何んの未だし。此樣な事四五度する間に、今度は煮え焦げるも知らずに打遣つておいでなさる。庭までの香氣に驚いて、行つて見れば、吹竹を取つて一生懸命、火を熾し、鍋の底の鎔けるばかりになされて御座る。これは仕たり、最う煮え過ぎますぞや

と心着けて、はじめて然うかと御悟りなさる程なれば、此御方が先きに立つて板前の庖刀、迚も〳〵。其旦那樣であるものを、これも手のかゝる御客樣の一人、七人前の支度、中々以て大變なり。

傳へ聞く、上總の國の椀かり楠。それの此地に無きぞ恨みなる。さりながら、彼方、此方、二組三組借り集めなば、それも兎に角揃ふべけれど、玆に又困つた事には、御酒の事、御肴の事、御米の事。

お客は皆樣東京の紳士達、いづれも和洋の酒の美味に舌の馴れておいであるに、此地の悪酒を差上げたれば、苦い顔して一口もいけまじく、醉を催し給ふには難かるを、何んと仕たらば好き事か。

それに又お肴の不自由、これは山中の是非もなく、無いとは極つて居るものながら、紀州からの鯨實、それが都合好く來合せて呉れたらば、如何ばかり好きか、知れぬものぞ。如何かして旦那樣、雉子か、兎か、鹿か、猪か、何んなりと擊つて御歸りあれかし。それなくば何と仕やう、玉子一個求められぬに、無きにも程こそあれ、何も無くては折角の御客を、もてなす事かなはじ。

米は此地にいよ〳〵不自由、麥と芋とに命をつなぐ、山人の中の事とて、砂澤山の玄米一俵。これも十四里を人の脊で運んで、やふやく昨日屆いたばかり。

未だ困るのは、醤油よ、鰹節よ。イの夏乾、扨は龜甲萬など、夢にも見られぬ此地とて、さぞ何をさし上げても、箸は滅多に着け給ふまじ。それに漬物も生憎、澤庵を切らして、新漬の菜の未だ水も上げず。嗚呼、來たての折には、貯藏の數々。鰹節の掻きても、朽木の屑のやうなのでなく。醤油も、鍋の端に鹽の凝結の殘るやうなのでなく、砂糖も石炭の塊のやうなのでなく、少しは好いのを仕入れてあり、又一寸した副食物の、海苔よ、櫻海老よ、花薤よ、福神漬よ、佃煮、鯛味噌、それ海丹よ、鹽辛よ、と不意の御客に間に合ふ程の要意ばかりは仕てありしが、其頃は何方も見えず。ぽつり〳〵無くして後、又買入るゝそれ程の不自由を見ぬ、それまでに、此方に馴れて、山里の、たゞの男女と化けて仕まひて、格別欲しくは思はねど、お客樣の事を思へば、惜しや、此間の五條だより、彼の者に賴むでおきたるものを。

間に合はぬ物を數へれば、茶よ、菓子よ、小楊枝よ、房楊枝よ、箸も新しいのが出したけれど、何も彼も及ばぬ事。

せめてもの事に、御風呂なと立て申さむ、岩間の深井の水汲上げて、枯枝落葉を焚付けて、湯の峯の湯を此山里に。

（完）

雪の夜がたり（上）

二十三階堂



此の浦で、金屋の禮藏といつては、恐らく仁者として知らぬものはあるまい、昔は網持の旦那株で、此の界隈で音に響いた家柄であつたが、十年このかた不運がうちつゞいて、今では漸く、二間間口の小廂住居で、草鞋だの塵紙だの、土器の皿や、杓子や、燒杉の下駄など商つて纔かに其日を送つて行く程の墓ない身の上となつたのである。

女房は造酒屋のお紺といつて若い時は評判の美人、何が扨て土地の壯い者共の氣をもませて、彼方からも此方からも嫁に貰ひたいといふ口は降るほどあつたが、是も定まれる緣で、十八の歲金屋へ嫁入して茲年八年目、夫婦の中に二人の小供さへも出來て今では頭が七歲になる其れが男の子で、妹が三つ、夫婦の間も睦まじく家內に波風なく穩かに暮らして行かるゝと言へば、言ふものゝ扨て貧より辛い事はない、禮藏は天稟慈け深い質

であるから貧乏して譬へ自分に食ふものはなくとも他人の不憫は見遁し難いといふ方であるから、少し許り殘つた財產も、さうこうして數年の間に殘らず費ひ果して、今では身一つの世帶となつても、中々人から慈悲を受くるといふ事を敢て爲得ない、併し此の儘で居ながら行末を考へると隨分心細い、それには又隨分我慢もある、自分は此の浦で屈指の家柄だ、此の儘朽果ては家の名折れ、先祖へ對しても相濟まぬ、それから小供の行末が案じられる、何樣か一生懸命に奮發をして追ても元の身代の半分位にも伸上げたいものであると世間の樣を見るにつけ、聞くにつけ、絕へず此の事をおもつて居るのであるが、女房の心掛は殊勝なもので、斯る貧苦の中をも露厭ふ心はなくて、朝な夕な夫を慰め二人の子供を良い方に良い方にと導き育てゝ居る、其れを見るにつけても、禮藏の心苦しさは猶一倍で、どうにかして身上を盛りかへして妻にも子にも安樂をさせたいものであるぞ。金屋禮藏の其の節の身の上はまづ斯樣であツた。

或日の事禮藏が他方から歸つて來て女房に話すのには。「何と俺は今日はよい事を聞いて來た、どうかこの事を一遍考へて見ては吳れまいか、其れは餘の事ではない、俺はこれから松前へ行つて見やうと思ふのだ、何さう吃くりしなさんな、唯金儲けである哩、彼所は鯡や、鮭の漁場であるが、イヤ俺が何も漁師になるといふのぢやない、繁昌する土地であるから行きさいすれば金儲の口は色々あるといふ事、今日後方から歸ツて來た

人に逢ッて直接に聞いたのである、何とまア、茲二三年が間、默つて見て居ては呉れまいか、必らず其方に悲慘なおもひをさせはしないから。」

と斯ういふ事を突然に言ひ出したのである。お紺はその事半分聞かぬうちから早眼に涙を浮めた、が中々諾さうもない、頻りと四圍を環視すから、何を心配するのであるかと言ふと、二人の子供が午過から遊びに出てまだ歸ッて來ないと言ひさして、ほろ〳〵と泣き出した。「ア、氣の弱い事を言ふ奴ではある、マア考へても御覽世の中は金儲といふ聲聞いては火の中へも飛び込んで見る位のものではないか、遠いと言ッた所が多寡の知れた松前ではないか、纔た三年が間の辛防だ、歸つて來れば乾度よくなる、身上を立て直す、さうして其方にも安樂な世を送らせる、亦小供の出生も望まれる、生涯の苦患を遁がるゝ事だ、何の人間と生れて一生に一度山を張ッて見ねば運は開けない。」

けれど女房は容易く諾さうもない、禮藏がさも嬉しさうに、現在金儲をしたかのやうに調子に乘ッて話す時には有繫お紺も莞こりして、まアさうなれば妾もどんなに嬉しいか知れませんなどと折節笑顔を見せて勇んで呉れる事もあッたが、話しが少し眞面目になると急にうち鬱いで、何かなし旅の空に難義苦勞のある事、災難怪我の多い事、そんなこんなを言ひ出していとゞ勇氣を挫かすばかり、併し一と晩丹念に說得してやう〳〵旅立する事になッたが、扨ていよ〳〵其の日になッては流石に名殘の惜まれて、夫婦はあり

やう涙に昏れた。今時ならば、定期航海の滊船もあれば、郵便、電信の便も日を欠さずあッて旅の空に居ても互ひの消息は十日經たぬ間に知れる世の中なれど、まだ其の節斯るものゝ開けぬ時とて百里以上の旅には水盃、まして松前下りとあれば、この世で生別れする覺悟で送り出すのも有理な譯、留主中一切の事は日頃昵懇にする隣家の親爺に托したが、これは宿屋の亭主であるが又なか〱の義侠肌で一旦頼まれてからには分別を据へて十分世話をする底の男であるから、禮藏も安心して出ればお紺も大きに力らを得て、これからは何につけ叔父様のお世話に預る事と言へば、宿屋の亭主は今旅立する禮藏の行李を整へやりながら、まづ三年とはいふものゝ行先見込のないと御分別がつきましたらば早く切りあげてお歸りなさい、一度行きて見たらば、それで貴方もたんのうなさるであらう、まづ海上御無事でと訣れの挨拶を切り出すと、お紺は堪らなくなつて泣きたくも有繋に他見の恥かしくじつと耐へて顔を背ける、最早眼は涙に昏れて良人の顔は見えず仕舞ッた。

お紺は良人を送り出して船に乘せて、其の船の帆影の見えなくなるまで灘邊に立つて見送ッて居たが、我が家へ歸ッても何だか氣が落着ないで三日ばかりといふものは何事も手に付かなかつたが、斯ては果ずと心着いて我れと氣を勵まして稼業に精を出す、十日二十日と日の立つうちには段々と忘られるやうになッて、毎日一度は必らず訪ねて來る

賴りの親爺を力と賴んで、世間話しに徒然を慰め、行末を樂みにして日を暮すうちいつしか其の年も晩れて仕舞ッた。

然るに禮藏が出立したのは四月の下旬で遲くも其の年の暮までには何かの音信があるべきものと心待ちして居るのにまだ着いたとも着かぬとも一切報知がないのでお紺は啻ならず氣を揉み出したのである、一年に二度の航海は必らずある、春此の浦から綿花を積んで行くと夏必らず鯡を搭載で歸る、秋米穀を積んで行くと冬は必らず乾鮭を搭載で歸るのが毎年の例であるから、遲くも其年の暮月には安否がなくてはならぬに何の報知もないのでお紺の心痛は一と通りでない、よもや海の上での間違はあるまいとおもふものゝこれが地方の船でないから北から歸ッて來た船頭や荷ざくまいの人々に就いて質問しても一向に容子は知れない、併し宿屋の亭主は大腹中で、根がしつかりした親爺であるか、これしきな事に些とも心配はしない、何の一年や二年音信がないからと言ッて決して身の上に不事災難のある譯ではない、まア〳〵氣を靜かにして悠くりと待て居なさい、其の中にはやがてよい便があらう、追つけ歸ッて見えませうと何時でも斯いふ風に言い慰めて居たが、其の年も暮て翌年の春も過ぎ夏となり、今日は見えるか、翌日は來るかと待に待ッた北歸りの船の二三艘此浦へ這入ッては來たものゝ、扨て禮藏からの報知は更にないから、お紺の心痛は限りない失望となッて、此の度は有繋に落ついて居た宿屋

の亭主も、これは變な事だと我知らず首を傾げるやうな仕誼となッて來た。
それ祈禱、ヤレ神頼といふのも最早遲い事、お紺は何かなし占筮に憑て分別を極めやうと思ッて、靈驗なといふ評判に聞く限りの神鬮に判斷を依頼したが、十に七ッはまづよい方の卦が出たので、やゝ安心はしたものゝ扨て安心なり難いのは前後のつゞき合せ、寧そ此儘死んだものとして諦らめやうか、何うしてそのやうな諦念が今のきゝつくものぞ、さらば子供を牽つれて共〳〵松前へ渡ッて見やうか、眞逆にそのやうな事もなり難い、噫このやうな事のあると知りつゝ何故の其の折去せたのであらう、エヽ神佛に見放されたか妾が身はと、うつ臥しに伏しては泣き、齒を喰ひしめて無念がり、朝夕もつれつく二人の子供にもてあまし、我が身に持てあまし、果は心も掻き亂れて前後不覺に泣くばかりであッた。

（中）

此の浦に金屋と同じ位の家柄で新屋の半二郎といふのがあッた、年齡は茲年三十二三、男振りもよく、氣前も凜々しく温順で、分の解ッた人物であるが、其の身總領に生れながら何故家督を弟に讓ッて自分は若隱居したのかといふに、是れには中々仔細のある事で、絆は矢張り金屋の女房、其の節造酒屋のお紺と言ッて若い者の評判する頃、半二郎は一方ならずこの女を戀慕つて居たのが、親類のつゞきあいからとう〳〵金屋へ嫁いる

事となッたので、所謂其の失戀者とかいふ側の境遇に陷いつたのである、二十五の歳始めて身に染みた世の中の憐れさ辛さが、魂いに凍りついて、それからといふものはこの世をとんと味氣ないものにおもひ做して如何な手だてても屆かぬ事となッて仕舞ッた、こういへば何うやら物語めくが、昔を言へば十六七の頃でもあッたらうか、其の頃丁度其身が寺小屋をあがる時、七月七日は棚機まつりで一夜あかして朝流す其笹に短冊をつけて擔ぎ出す折よう／＼風が吹きますといひつゝ駈けて來る娘の年齡は漸く十二三、紅い帶して簪さして花の蕾の口脂啣んで一枚頂戴といふは紺ちやんか、赤いの進げやう、それと言つてやると中に何書うか、そつと包んでね、拔てはいけないお人のわるいと、さッと覆した顏に紅葉の色の初染め、うつとり見恍れた後に人が居たので慌てゝ歸る、それからは一意一愛、五年七年は夢と消えたが消えないものはこの心、日増に愛慕の情は募ッて身代かけても生命かけても一生契るべき女はそれと心に定めて居たのに、定まる緣は他人にあッて、いよ／＼それと聞いた日から、世に在る事の懶くなッて、さらばと言ッて片山蔭に法師の生涯も成り兼ねたが、其身は浮世を斷たこゝろで一生妻は娶るまいといみじく覺悟を極めたのである。

併し爾うはいふものゝ猶且凡夫の果敢なさは、思ひ切ると覺悟はしても到底煩を消したやうに物事埒の明くものでない、同じ土地に住つて居る限りは折節顏も見合へば、姿も

見染める、聲も聞く、何や角やの噂さも聽かねばならぬ。それが半二郎の身に取つてはなか〳〵辛いのであるから、どうかいつそ一とおもひに忘れて仕舞ひたい思つた身に、妙藥はこの地を離れるに若くはないと考へついて扨て四五年が間は他國に漂泊つて居たのである。併し乍ら羈旅の境界といふものは誰しも同じおもはぬ辛さが身に染みるもので、我が故郷ほど香ばしくはないもの、何かにつけて我が生地がなつかしくなつて年老て死ぬる所はやはり墳墓の地と、行末の事おもふにつれては女房も所詮なくてはならぬもの子供も持たねばならぬものと年を積むに隨つて分別も定まれば、考へも實着になる、三十歳過ぎての半二郎は茲に漸く昨非を曉つて扨て歸省したのであるが、時は恰ど金屋の禮藏が家を出でゝ音信不通となつた其の昨今の事であつた。

半二郎はお紺の身の上を聞き傳へて一時は茫然として宛然夢を見る心地であッたが、先方の身の不遇をおもふと同時に詐りならぬ同情の念が胸一杯に張ッて、これはどうで棄ては置けまい、直接に遭ッて心を添へてやらねばなるまい、救はれるだけは救ふてやらねばなるまい、と斯う決心をしては少しも心に疚しい事はない、亦慮かる事もない、むかしならば戀人といふだけに多少心に怯れもあらうが、昨非を悟つた今の我が身は仁者の働きをするのであるといふ一念から遂に或る夜お紺母子のものを其の侘しい住居に訪づれたのである、人眼を忌けて態々夜中に訪づれたといふのはまだ一點心の底に殘る所

がおッての事か、併しこれは人間の情といふもので悟りを開いた今の身の上でもそれだけは猶且詮方がないのである、思つて見ればお紺の心にも萬更覺えのないことでないから。

行きて見ると、見る影もない小な家で、氣の毒な程侘〴〵しくてなか〳〵這入り切れない、けれども這入らぬ譯にはゆかぬ、そしてお紺に遭ふのが、氣の毒なやうな嬉しいやうな扨て亦内心何となく羞かしいやうな、異なこゝろもちがして躊躇したのも二度三度、おもひきつて這入ッて見ると、これはしたり、室は六疊じきばかりの古疊で、禿けて、煤けて、剩さいこれから寒に向ッて行くといふのに障子は破るゝに任せて取繕らはず、薄綿の布團一枚布いた其の上に二人の子供は早枕を並べて寢ッてゐる其の傍らに寂然と物おもひに沈んでゐるのが其のお紺だ、一と目見た半二郎の眼には其の姿貌こそありしむかしの面影ながら、積年の貧苦と今日此頃の悲しみに身を削られて、窶々しい樣なのに懷かしいやら、氣の毒やらで、物をも言はず、ほろりとなッたので我れ知らず顏に手を抵て仕舞ッた。

遉がにお紺は覺悟を極めてゐたのか、氣は手々確かであッた、マアよくこそ尋ねてくださりました、妾の身の上は粗御聞及びでござりませう、不運といふも定まる因緣、女の身の墓なさには何と分別の仕樣もござりませねど、まだしも二人の子供のあるうへは、

それを力に致してなりと、過せるだけはすごしませうと凛々しい言葉に流石女の決心は顕はれてゐた。この時を始めとして半二郎はお紺の家へ屢々贈物をしてゐた、自分の家が綿問屋であるから繰綿だの造り綿だの、又時としては網から上ッた魚類、又たなち物、大抵そんな日用品であッたが、節季になると餅だのスルメ鯣だの其他様々なものを惜まずに贈るのであるから、お紺は唯貰ふのがきまりの惡るいばかりでなく、後で困るやうな事になりはしまいかと始めのうちは唯これが迷惑で堪らなかッたが、それ等の事を承知してゐる半二郎は、先方の氣を兼ねて滅多には近寄らない、その質遭いたさに心は非常ににやッてゐた、お紺は有難いやら面目ないやらで偶と出會ふ事があッても唯口籠ッて碌々禮をいふ事も出來なかッた、けれど、其處に小供といふものがあッて、こいつが中々無邪氣でおもしろい、二人の子供は毎日寺子屋へ字を習いに行くのであるが、朝晩必らず半二郎の家の前を通るのに、見と是非お辭義をする、途中で會ッても遠くの方から其の姿を見かけては駈けて來て頭を並べて順正に挨拶をする、半二郎も亦非常に子供達が好で、いつでもやさしく言葉をかけて度々物を呉れてやるから、子供達は此上もないよい人と思ッてゐた、するうちには、いつしか半二郎の心の底に捨難き思ひが殘ッて迎へばうれしく、會はねばこゝろがうまらず、兎角して或る日の事、折を見合せてそッと心のたけを打明かして見たが、お紺はまだ容易承諾けしきはなかッた、併し相手は馴み

少ない女の事であり、且は二人の子供の行末も案じられる折柄といひ、所詮剛情は張りきれまひと底を見透ての半二郎は一度や二度の辭退はあたりまへとして其後とても母子の歡心を得ることをつとめて氣を長く時節の來るのを待つてゐた。

貞人の消息は更らに知れない禮藏が旅立をした日から數へて恰ど滿三年となッた今日まで、以來一度の音信もないのは尋常の事でないから最早諦めて仕舞はねばならぬといふ事は、如何に未練なお紺の心にも分別は定まッて居る、深切な宿屋の亭主も色々心を配ッて諸々方々問合せて呉れたが、どんとも手繋がないから、表面ではよい加減な氣安めを言ッてゐるもの丶內心では最早分別をして仕舞へと希ッてゐる、お紺は兎もあれ、二人の小兒が慘めであるからと言ふので半二郎は宿屋の亭主を始め近隣の誰彼の承諾を得て纏て小兒を引取て養育する事となッたが、これが少からずお紺の心を動かす動機となッて以來段々半二郎のなさけに纏くやうになッたのである。宿屋の亭主も大贊成、新屋の母堂も大贊成、お紺が生家の造酒屋は其の後ち零落して異腹の兄貴が一人傘張の職を習ッて幽かに其の日を暮らしてゐるのであるが、これも別段異存はなく、近所のおそめさん、お秋さんなどいふ、むかしの友達が媒人してお紺は遂に半二郎へ再醮する事となつた。けれどお紺は此の時半二郎に向つて斯ういつたのである、「併し一寸まちて下さい、いかに行方知れずなつたとは言ふもの丶一旦貞人として五年六年も同棲にゐて二人の子

まで儲けた中を、唯行踪が知れずといふばかりでまだ何の徴候も見ない中二度の良人を持つのは、何分にも心に濟みませぬ、それといふのも元因はと言へば妾身を始め、子供等の末々をおもふて一家共々安樂させたいばかりで思ひ立ッた旅であッたとして見ますれば猶更に情を立てねばなりませぬが斯う申したらば定めしひどい我儘ものと思召すかは知れませぬど、子まで成した夫婦の中の未練は人様に打明られぬ不思議のござりますれば、どうか妾に免じて爰今一年待つてくだされ、今まで待つて音沙汰のなかつたものがこの末幾年待つたからとて、何甲斐のあらう理はあるまいけれど、そうすれば妾の胸腔もすつぱりと晴れませう、愁じ危ぶむ心のあつては、これから良人として生涯侍づかねばならぬ貴方へ對しても濟まぬ譯といふ程に、如何さまそれも其の理の事であると半二郎も異議なく承諾して一年待つたが、翌る年四月の下旬、禮藏が旅立をした其の日を命日として更めて亡夫の法會を營み畢つて其の翌日を吉日にお紺はとう／＼半二郎へ嫁入たのである。

（下）

金屋の禮藏は一家の身上を立て直して妻にも安らかに世を送らせやう悴にも出生をさせやうとおもふ一心の憤發から松前行を志ざして旅の空にかゝッたところで、船は案外早く着いて、翌る月の下旬には難なく目指漁場へ行けたのであるが、海漁は丁度夏の末か

らかけて秋の中頃まで海濱はまるで戰爭場のやうで昆布を取るやら、鯡を曳やら、鮭を漁るやら、到るところ漁村の景氣、金は其の時掴み取をもされる程な狀況であッたが、何が扨、諸國のあぶれものゝ寄集まりで、酒を飲む、女買ふ、博奕を賭つ、イヤとても氣弱い禮藏には一と月と辛棒の出來るところでなかッた。併し折角おもひ立つて出て來たものゝ、何樣にかして、よい儲け口を見つけ出して二年と三年其處で辛防して一と旗の資本を拵へたいものだと、いろ〳〵と渡つて見たが、向分にも來たばかりで一向樣子の知れないところから半年ばかりはつい徒爾に暮す、其のうち冬となッて皆々歸るものは歸る、冬籠して越年するものは越年する、自分も仕方がないから一と冬は其の地に籠ッて翌る年の景氣を待ちたが、年を越へて三月の下旬、丁度海獵船が一艘這入ッて來て徒然でゐた禮藏の爲めによい金儲けの口が看つかッた。

併し海獵船へ乘込むといふのも隨分危なくない仕事でもないが、折角慣發して此處まで出て來た以上は、何爲五十歩百歩で乘かゝつて運がなければそれまでの事と決心して其の密獵船に乘組んだのである。

船は元より異國の形で、亞米利加だか、俄羅斯だか、爲躰は知れねど乘込の中に黑人も居れば、高加索種も居る、身の丈の四尺にも足りない、渥ら顏の侏儒もゐる、同勢凡そ二十人許り何れもこれも皆元氣強い荒夷であッたが、日本人と見たのは自分の外に纔た

一人年頃三十あまりのがゐたが、其の者は片言交りの九州言葉を使ッて生れ故郷さいも知らぬ程のものであッたが、食ふものも衣たものも悉皆異人風で言語も擧そ異國の調であッた。

金屋の禮藏はこういふ者の仲間へ入り込んで段々と氷海の方へ乗り出したが、船は決して一と所に居ない、或る時は樺太の沖合から、東塞加の海岸を漁ッて白令の海へ出る事のあれば、亦遠く北の亞米利加の涯を經めぐッてアラスカの近海までも遠乘する事があッたが、其年の夏測らぬ大風に吹きまくられて十日ばかり際限のない大洋の中に漂よッてゐるうち到々名も知れぬ無人島へ漂泊して一船中二十人の者は茲に全く漂流人となッたのである。扨て無人島へ上陸してからには一向方角も分らねば歸るべき手術もつかぬ、凡そ四年が間といふものは千に一つも寄ッて來る船もあらうかと毎日〳〵それを賴みにして消光て仕舞ッたのであるが、其の中には氣候や飲食に堪なくなッて病氣つくものもあれば其の儘死ぬるものもある、禮藏だけは辛くもいのちを維いてゐたが、神の恩みか圖らずも亞米利加船の一艘がこの島を目がけて寄ッて來た、そこで禮藏は其の船に救はれて活き殘ッたものと一緒に亞米利加の本國へ送られ、一年あまり異國に彷徨ッてゐるうち長崎へ向けて行く便船のあるのを聞きつけてそれを幸に今日始めて我が故鄕へ歸ッて來たのである。國を立ッてから恰度七年振であッた。

永の七年、其の間、唯の一日たりとも妻子の事をおもはぬ日とてはなかッた禮藏は、九死の中から危ふい生命を拾ひ出して、目出度歸れたからには、最早富貴榮達も望むところでない、唯々一と眼無事なる妻子の顔を瞻て共々になつかしい言葉を交す事の出來ればそれで滿足と、うれしく心に期して歸ッて來たのである。

十年一とむかしといふが、それは其の土地に住みつゞけて居て十年以前のことを回顧て舊故の觀をなすのを言ッたもので、況てや小十年其の土地に居なかッたものゝ眼から見たらば何樣であらう、歸ッて見るに大概な家はみな代が迭ッてゐて。其の節十五六な子供であッたものが、今では家の新主人となッてゐる、十二三と思ッてゐた小娘に最早嬰兒の二人位も出來てゐるのがある、二十歲以下の若者で顔に面識のあるものは殆どない位である、其の中にも四十以上の老人はあまり異はなかッたが何しろ廣い世界を見て來た禮藏の眼には我が生れ故郷が變に小く見えて、マア斯なところであッたかと怪しまるゝばかりで、とんと隔世の感をなした、僅かに舊形を存じてゐるのは町の光景であッたが、それすら、古い家は粗取り壞されて新規に建た家がどの位あッたか知れぬ。山は青く、森は緑に懐かしい浦の景氣に變りはなかッたが、心付て見ればどうやう砂洲の地積が以前よりも狹くなッたやうにおもはれる、川尻が妙な方角にッいてゐるこれも亦滄桑の變の一部として見るべきものか、以前畑であッた所に今家が建ッて、川に架つてゐた

搭が勝手を違へてゐる、寺院の大門が取拂はれて其の跡へ煮賣茶屋が四五軒出來てゐる、神社の石華表が木になッてゐる、まづ一寸見た輪廓でさいもその位相違してゐるのであるから仔細に見聞したらば、どんなに愕く事であらう、以前富限であッた家が倒れて仕舞ッて、新らしく出來た金持が店を繁昌させてゐる、自分の知人に歿なッたものも隨分あるが新らしく生れ來たものゝどの位あるか知れない、何も彼も勝手が違ッて仕舞てゐる。

禮藏は唯もう夢を見てゐるやうな心地で、變り果た町の中をあるくにも懷かしさがあまッて何となく羞かしいやうである、唯もう胸の中がおやしく噪がれて、我が家の前近くなるに隨ッて胸はます／＼躍る、噫、女房は息災でゐるか、悴は無事か、家に變ッた事のなければよいがと樣々なものおもひで氣が惘となる。

禮藏の歸ッて來た姿を見ると等しく健かであッた宿屋の亭主は怪しくも座敷から滑り落ちんばかりに駈出して、じつと禮藏の腕に取り縋ッて、ハアッと泣男に啼出した、是れは懷かしいのと意外なのとで交々我が胸に分別し兼ねた事のあるからである。

「林兵衛さん、久しい事でござりましたな、お互に無事で亦會はれましたよ、斯う言ッて禮藏も涙を溜した。まあ何から先に話してよいか、お前さまにはいかいお世話を掛けました、悴や女房の身の上は。」

斯う言ひさしてじつと我家を振り向いて見る、どうやら容子が變ッてゐるやうだ、宿屋の亭主は何かなし禮藏の手を引捉へて自分の家へ誘い込んで仕舞ッた。

此の家は元と商人宿で所在の棉商人や肥料商人が五人や七人は始終泊つてゐない事はなかッたが、今では餘程衰微したと見へて家も一頃よりは大分減めたやうに思はれて禮藏の目には一しほ氣の毒に感ぜられた扨て死だとおもッてゐた其人に突然歸ッて來られたのであるから林兵衛親爺の錯愕は一と通の事でない、一躰これを何様仕末したものであらうと當惑が先に立て物が言へない。まづ兎も角も先方の次第を糺かねばならぬ、長の七年が其の間、どうしてゐたかといふと、去りながら禮藏の物語はよく順序が立つてゐた、松前から海獵船に乘込んだ事、無人島へ漂流した事、亞米利加船に救はれて異國へ彷ッてゐた事、聞いて見れば一々有理である、女房、悴を戀ひ慕ふ其の心根は一倍不憫である。

されば此の方に於てもありし次第を分狀に語ッて聞かせてやらうか、年を取ッては心の弱さが先に立ッて、爭々其人の眼前では言ひ切れない、寧そ紺半次郎の兩人へ知せてからにしやうか、否々爾なッては事がいよ〳〵面倒になる、玆は飽まで自分が引受てうまく所置をつけねばなるまい。

宿屋の亭主は熟々考て見たが、成程禮藏の音信不通してゐたのも道理はあるが、此の方

に於ても日くは十分ある、どちらかと申せばまづ禮藏の方が不運であるのだから今日の場合は詮方がない、身の不運を歸らめて仕舞ふよりは。

林兵衛親爺は斯う決心して有し次第を殘らず語り聞かせたのである。夢心地に聽いてゐた禮藏は、まだ信疑のほども測り難なくて、二度、聞直したが、決心の色を面に表はした林兵衛親爺の日く、「此の場に臨んで何の詭僞を申さう、迂詐ならば徃いて御覽なさい、三年前に家を疉んで、彼方へ引き取られて今では夫婦の中に子供さいも出來てゐます。」其れ聞くと等しく禮藏は顔色を變へてほつと長息をしたが、其の時の顔貌と言ッては實に見られるものでなかッた。

落膽して禮藏は氣を取り喪はんばかり、林兵衛親爺は氣の毒なやら、申譯ないやらで、顔を瞻るのもつらひ、物を言ひかくるのも不憫で何と慰めやうもない、これからはこの鰥夫を何樣したものであらう、併しお紺さまの志しは十分屆いてをる、これだけはお前樣もよく徹底でおかねばならぬ、再緣したからと言つて決してそれを恨んではなりませぬぞと斯樣に言ひ聞かせたが、禮藏は碌々食も喰ず、三日ばかりは力なく打臥ッて考へ込んでゐたが、恐ろしく神妙な志を開いて、辨まへた事を言ひ出した。

「噫、御亭主、私はお前さまに一方ならぬ御苦勞をかけた、心配をさせたり、氣を揉ませたり、扨て留主中は女房、倅の身の上に就て今又此の度の一條に就て、御厚情の程は死

でも忘れませぬぞ、女房悴の身の上を聞いて私は最早安心して仕舞ました、此の上はもう世に思ひ殘す事はないからお前さまもどうぞ安心して下さい、成程私しも一時は無念、と思ひました、悔しい、口惜しいと思ひました、けれど、怒い茲で我が身を立てやうとすれば、可愛い女房や子供達の身が立たなくなります、成程半二郎とはまだ染々付合た事はないが、豫々噂に聞けば分の解ッた人さうな、悴の親となッて貰ふて不足とはおもひませぬ、まア御覽じろ今こゝで私が一身の我を立てやうとすれば、あのうるはしく治まつてゐる家に暴風を起させて、差寄女房の身は破滅となり、又半二郎には昨日今日まで佛として尊め奉ッてゐる私しの爲めに内心刄物を研がせねばならぬ、實の親と聞かば必らず着くべき悴の爲めにも義理ある親と讐敵同士にせねばならぬ。如何な事でも私しは其のやうな事したくはない、爰はどうあッても我が身一身を亡きものにして仕舞はねばならぬ、さうすれば三方四方まるく治まッて末々までも穩やかに、女房も安樂な世を送り、悴の出生も望まれやう、さア御亭主私の决心は斯の通り、必らず疑ッては下さるな。

有繋仁者と言はれた金屋の禮藏がこの一言に宿屋の亭主も心底から感じ入ッて、じつと其の顏を看詰ながらあまり神妙で涙が溢れた、何程殊勝な志とは言ひながらも、凡そ人の情としてはそれ程奇麗に諦らめのつくものではない、何時まで立つても可愛くおもふ

は夫婦の情と言ひ一旦他家に嫁づいて睦まじく暮すと聞かば、無念にも心外にも思ふのが凡夫の常であるのに、去りとは冥加な志、餘りの事で流石の林兵衛親爺も爰は返辭が出來なかッた。

兎も角もまづ一と目見て置きたいと言ひ出した、女房や悴の顏を、成程それは可然人情であると、宿屋の亭主が導いて其の晩、日の暮るゝを待かけて密つと半二郎の今の住居を裏口の方から這入らせて、戸の隙際から内のよく見える處に忍ばせた。

成程新屋の身代を二つ分にして新規に世帶を構へた程あッて住居は中々立派な、棟の高い二階屋で裏に白壁の藏が二戸前並んで建ッてゐる、新らしく普請したらしい建前の木口から馥々とよいにほいの木香が鼻を撲ッばかりであッた、窺いて見ると丁度今晩餐の時で、家内五人が同じ座敷にづらりと團欒して睦まじさうに食事をしてゐたが、長男の慶太郎は義父と並んで上座にすはつてゐたが、國を立つ時七歳の子供は今十四五歳の少年となッて稚な顏も餘程大人びて末頼もし氣に見え、妹娘のおとはも最早十ばかりに成ッて母親の傍でおとなしく箸把ッてゐた、扨て女房のお紺は、年は取ッてもまだ色艶は失やらで、盛りの面影みづ〳〵と以前よりは顏の色もずつとよく且つ肉づいて一と際あてやかに見受られた、そして其膝の上に二才ばかりの乳香兒を擁きかゝへてゐたが、小兒の顏へ半分光焔がさして、頬玉のぶつと脹れた所から、口に啣へやうとしてゐた手首

が張り切るほどに肥ッてゐた、その愛くるしい顔立を母親がのぞき込んでは笑ひ、のぞき込んでは笑ひ、何やら半二郎と睦まじげに話すのが見える、噫あの子がそだな、あの子が半二郎との中に出來た子だなと、禮職は餘念なく眺め入ッてゐたが、我を忘れてアッと聲を立てやうとしてあはてゝ心づいて胸をなでをろした、其の被てゐる着物といひ、食事の際の道具といひ、一見して物に不足を感ぜぬ程の世帯と知られて家内一同が滿足した面かげの名殘なく見え透きて誠に平和の暮し方であッた。

此の時禮職の感じは何様であッたらう、あの妍やかな情け深さうな女は自分の妻である、彼の活潑で末頼母しさうな少年は現在自分の實子である、其の自分の妻や自分の實子が、斯様して今では他人の妻子となッて他人に育まれ、他人である其人が自分の代りに一家の主人となッて、妻や子供等の愛嬌を一人で占領してゐるのを見ては、もう何もかも思へなくなッた、噫實に無念である殘念である、口惜しくて辛くッて堪らない、元より宿屋の亭主から何も角も聞及んで承知はしてゐるものゝ又現在この光景を睹ては實に堪らない、胸膈は唯わく〳〵と躍るばかり、身はぶる〳〵慄へ出して、もう立ッては居られない、一方〳〵の手を掛戸の棧にもたせて身を支へ、一方〳〵の眼を戸の透間にひッたりと貼つけて一生懸命、家内團欒の光景に身も魂を打ち込んで見てゐたが、遂に氣がもだ〳〵としておもはず、アッとばかりに聲を立てやうとした。

ア、危險、と何の氣も付かず導いて來た宿屋の亭主は、それ程とおもはなかッた禮藏が、覗き込んで一心不亂になり出したのでもう氣が氣でない、感情に餘ッて何樣な事をせぬとも限らぬ、前後不覺に躍り込みもせねばよいが、と傍に見てゐてもう心配でたまらない、あゝ愍じ見せる所でなかッたと大變に後悔をして氣をもみ通しでゐたが、禮藏のたんのうしたやうすを見屆けてほつと胸をなで卸した、最早この上、何一つ思ひ殘す事はない、看るべきところを看たればこれで自分も本望を遂げたと林兵衛親爺に禮をのべ翌る日一通の書置を遺して其儘何處ともなく影を隱して仕舞ッたが、其れ切り禮藏の姿を見たものはなかッた、宿屋の亭主が後で披いて見た書置の文意に、あすこで親子の名乘り合は出來ぬとした所でせめてはあの可愛らしい妹娘でもそつと呼んで來て一目逢ッて自分がおとつさんであると言つて抱き取ッてやりたかッた、彼れは三歲の時に分れたのであるから、親爺の顏は面識るまい、あゝこれだけが心殘りであッたと、それからこの世にあさましい姿を殘すのは彼等夫婦の間の感情を害ふ種であるから雲の彼方へ影を隱して仕舞ふとあッた。

（完）





野菊

國木田獨歩

私の良人は判事で御座りまして以前から遊獵が好きでしたが今も斯道となると夢中です。私が此人に嫁ぎましたのは恰度二十の夏でした。此人を知つたのは其れより三年以前の事で、私が叔母の家に厄介になつて某學校に通て居て、此人もまだ大學に居た時分でした。

此人は間もなく判事になつて、西國地方に赴任しましたが、私は未だ東京に止て學校に通つて居ました。通ふし手紙が來て、其手紙がいつも二尋も三尋もありまして、彼地の事が色々詳はしく面白ろく書てありました。叔母さんに讀で聞かしては二人で「あんな眞面目な方で如何してこんなお可笑な事が書けますかね」と笑つた事もあり、時には極く哀な話などを書て寄すこともあり、私は毎時も樂にして此人からの手紙を待て居ました。

然るに私が十九の秋の事でした。十一月の半過ぎ、學校から歸つて見ますると机の上に一通の手紙がのつて居ます、此人からの手紙でした。封を切て讀みかけると下に落ちたものがあります、それは可愛い野菊の花で、たつた一輪、押しつけられたまゝで香は未だ失せませんでした。さて此手紙と野菊とが如何に私を感動させましたでしよふ。其手紙が乾枯びた野菊の花と共に今も私の文箱に藏つてあります。其の手紙は次の通りでした。

「――前の日曜日は朝から好く晴れて少しの雲もなく風も立たず、のどかなる小春日和なりしが、僕は此日、例の如く早朝犬をつれて寓居を飛びだし申候。少し方角を違へて出掛くるも妙ならんと、今まで頓と行た事のない方へ、わざ／＼足を向け候。尤も此方角には獲物少なき由は兼て此地の者より傳聞致し居候間、氣は餘りすゝまざりしも、さて出懸けて見ると噂ほどでもなく、小鳥も可なり打て、かれこれ數時分までは夢中に過ごし候ひしが、餘り腹の減たので氣がつき時計を出し見れば成程十二時を少し回り居候。日當の好き林の蔭で手早く便當をつかひ、ろく／＼休息も致さず直ぐと又た取りかゝり申候、然るに不思儀な程鳥が居なく成り、馬鹿々々しい事だと煙草に火でも移して頗る不熱心に、頗る不活潑に其處らを歩るきちらせしかば、愈々以て駄目と相成り申候。其中、日は次第に傾きそめ、野山の景色も何となく物淋しく成りし故、歸路に就き候處、

何時か道を迷ひ、益ゝ往還を遠ざかるやうに思はれ候ひしも、これも常時の事ゆゑ、貴娘が先達送りこされし唱歌などを小聲で歌ひ、平氣ですまし込んで、向ふの麓に見ゆる農家を目當に、ぶらり〳〵と三尺計りの小路を辿り申候。恰も刈入れ時にて農家は何れも忙がしく、家の者大概は野に出で候へば、僕の立寄りし家にても、たゞ一人六十計りの老婆、椽先に座し何か手仕事を致し居候のみ、家内はひつそり致居候。僕は此老婆に、往還に出る路を尋ね候。婆さん僕の妙な風采を見て少し魂消る樣なりしが、忽ち罪のない笑を目元口元へ浮べ、「往還に出るのは譯ない事、此路を眞直にお往きなされ、さをとめ塚が立て居ます、其處で途が二ツに分れて居るを、右へ取てゆくと小さな丘を越ます、丘を越すと直ぐ往還に出る、何んでもない事」と丁寧に敎え呉れ候。僕は番茶を一杯所望致し、禮を述て其處を立ちいで、敎えられた通りに參ると、成程小さな塚があつて、途が左右に分れ、右なるは丘と丘との間の坂の方へゆくらしく候間、直に足を其方に向け、坂の中途まで來たりし時分、ふと老婆が申せしさをとめ塚といふ事を思ひ出し候。さをとめ塚とは何の塚なるかと、僕は考へ乍ら今來りし路を振返れば、夕陽靜に野に落ち、彼の小さな塚さへ鮮かに路傍に立つが見られ候。妙な處に妙な名の塚もあつたものかな、何かのゆわれなくては叶ふまじきことゝ僕は、明日役所に行き誰かに尋ねて見ん、若し面白い物語でもあることなら貴孃に書き送るが樂

なりなど考へつゝ、いつしか塚の事は忘れて了ひ、貴孃の事のみ思ひつゞけて歸宅致し候。そのまゝ一週間過ぎ、終にさをとめ塚の事は思ひいださず、誰にも尋ねず、今日と相成り申候。

さて今朝は霜初めて降り候。僕は前日曜日の午前の獲物を思ひて、今日も同じ方角へと出かけ申候。日の昇るにつれて山も野も煌きわたり、鵯の鳴く聲遠く鮮かに聞え、心も勇み立ち候。然るに今日も午前の中は多少の獲物ありしが午後は不思議にも矢張り駄目ゆえ、日は未だ高かりしに、そろ〳〵歸路に就き候。未熟な遊獵者の常なるべきか、僕はそれでも未練がのこり、四邊の林や丘や見廻はし乍ら歸り來しに、ふと前日曜に越した丘の下に出で候。此時、彼のさをとめ塚の事急に思ひ出され、日脚を見ればまだ〳〵日暮には二時間も際わり、ヨシそれならば彼の婆さんを訪ふてさをとめ塚の事を尋ねて見るも一興だと僕は心を決め、もと下りし方より今日は登り、直ぐ坂道にかゝり申候。丘は背のひくき姫小松一面に生へ、やゝ西に傾きし日の光は澄みて鮮かに靜かに松の梢を目もさむる計り緑に染めいだし居候。坂の頂まで來し時、すぐ頭の上にて唄ふ聲致し候間。仰げば村の小供三人計り、頻りに松の落葉を掻きあつめつゝ聲を揃えて僕には分らぬ流行歌を唄ひ居候。四邊いかにも靜かで秋の日餘りに澄めるが故か、僕は何とも言へぬ哀を覺え、斯くしても一生涯は一生涯であるかなど、例の空想に沈み乍ら何時しか

坂を越し候。氣がつきて、ふと前を見れば、かの小さな塚は十歩の先に立ち居候。塚は高サ二尺計り。たゞ假名で「さをとめ塚」とのみ淺く彫り、全面の苔白く、文字も能くは讀めぬほどに候。塚の前に野花の美事なる一束插みあり、これは前日見當ざりし物ゆへ、僕は妙なことに思い候。直ちに例の農家を尋ね候處、老婆は早くも「途が分りましたか」と前週の事を昨日の事のやうに問ひかけ候。

「難有う。よく分かつたよ。婆さんに聞くが、元來あのさをとめ塚は何の塚だらう。今日は美事な野菊が插してあつたが。」

と僕は銃を卸ろして椽先に腰をかけ、衣兜より煙草を取出し乍ら尋ね候。

「あれかね。旦那に奥樣が御座るなら、話しても無駄のこと。しかし旦那には奥樣は無いかね、それとも旦那の方で奥樣にしたいといふお方でもあるかね、それなら話すが。」

僕の此時の心の樣は貴孃の御推察に任し候。又た僕が老婆に何と答へしか、これも御推察にまかし申さん。兎も角も、老婆が僕の顏を穴のあくほど眺めて、初は笑ひ、次第に眞面目になり、終には泣だしさうになり、最後に又た笑て語り了めし物語の大略は左の如くに候。

御維新より餘程以前の事の由、頃は恰も田植の時分なりしが、或日村の若者ども男女打雜りて十人ばかり今のさをとめ塚のある（其時分は無かりし）近所の田を植え居たり。其日

は朝より雨降りて、折り〳〵夕立のやうな大粒の雨沛然として來り、暫くして又た小雨となりつゝ、しめ〳〵と降りつゞきたれど、村の者どもは皆な平氣で唄て、笑て、ふざけて植え居たる由に候。恰度、今の四時頃にてもあらんか、さをとめ塚の立てる直ぐ前の田まで植え、此一畦にて今日はおしまひといふ時分、丘より松林にかけて白布を垂れしが如き大雨サッと降り來りぬ。此時、一人の娘、ふと頭をあげて路の方を見れば、十間も隔たりし路を一人の簑着たる男、通りかゝれり。娘は「御免」と言ひさま一束の苗代を投げつけしに、運悪ろくも彼男の横顔にハタと中りぬ。「無禮者！」と叫びし聲に田植の者皆な驚きて頭をめぐれば、此方をきつと向き、やゝ薄らぎし雨の中に突立つは屈強なる武士なりき。

これを見るや、皆々眞蒼になりし由、さもありなん。彼武士は簑かひやり、今まで眼につかざりし両刀を物々しく横へて、畦道につか〳〵と此方に辿り來つ、「何奴だ」と白眼つけたり。娘どもは無論、若い連中さへ歯の根も合はぬ始末。武士は「此奴らしかつた、來い！」と言ひさま、いきなり娘の首筋を攫んで、道の方へ引曳る如くに連れゆきぬ。

此娘の名はお久米と申して、此時丁度十九才、貴娘と同年なるも哀れに候はずや。村中の容色よし、氣立が優しく、其上少し漂輕な處ありて、誰にも可愛がられし娘なる由。

元來通行人に苗代を投付けるとは亂暴なやうなれど、これは田植時分の此土地の慣習に

て、見事當てられし者は目出度しとて、實は迷惑ながら苦情を言ふ事出來ぬ次第。されば お久米も武士とは氣がつかず、簑着てこんな田舍路通るは村の者に相違あるまじと、一目見た時が、さう思ひし時にて、さう思ひし時が投げつけし時ゆゑ、武士に曳きづられ乍らも、「氣がつきませなんだけヱ堪えてくだされ」と泣聲を上げて叫びける由に候。

武士は腰の一刀を拔き放ち、ぐす〳〵すると貴樣等も同罪だぞと怒鳴つけしかば、一同狼狽て〻逃げいだしぬ。お久米はこれを見て、悲鳴を擧て泣き叫べど武士は手を放たず。泣聲ばたりと止みければ、逃げ乍ら若者の一人、後振りむきしに、武士はお久米の衣で刀の血を拭き居たりとぞ。

人々の知せに村の者大勢駈け來る、其眞先に磨ぎすましたる鎌右手にかまへ、血眼になりて駈けくる男あり。爲藏とて、人も許すお久米が行末の新郎、田植を了れば直に祝言するばかり。されば爲藏はお久米が死骸を一目視るや、人前をも恥ぢず、地段太踏みて泣き、「逃がすものぞ」と言ひさま、目を釣上げて坂の方へと駈けゆかん氣色に、村の人々、武士には勝たれまい一所に殺ろされる計りと、先づ鎌を奪ひ、色々となだめて家に送り届けぬ。されど村中袖をぬらさぬ者なかりし由。

其後十日ばかりの間は、爲藏、是非ともお久米の敵討つぞと怒鳴りつ、時々悲しげなる聲あげて泣き、彼の坂道を登りつ下りつせり。然るに爲藏何者より聞きけん、將た自か

ら斯く思ひつきけん劍術知らでは武士を討つこと叶はずと口走り居たりしが、暫時して怒鳴ることを止め、今までの狂態も鎭まり、田へも常のやうに出でしかば、人々も安心し、さては敵討もお止めになりしことぞと言ひ合ひ居たり。然るに間もなく不思議な噂たちぬ。爲藏は夜な〳〵竹刀を持て山に登り、頻りに松の木などを撃ち、お面お小手と叫ぶとのことなり。

こは全く事實なりき。元來爲藏は快活なる男なりしに忽に陰氣になりて誰とも物言はず目は遠方をのみ視るやうになれり。而て夜中、ふと思ひ出だせし如く、竹刀を肩げて家を出で松林などに入りてはお面お小手と叫び、人々に向ては天狗より劍術の奥義を授かるなりと眞顏にて語るやうになりぬ。村の娘どもは竹刀の響怪しく林の奥にて鳴るを聞く時は、戰慄して怖れたり。

斯くて二月計り經ち、爲藏の行方知れずなりぬ。多分敵討ちに出掛けしならんなど村人も哀れがりて噂せしが、翌年正月、見る影もなく腴せこけて爲藏は歸り來り、間もなく病死せる由。

されば二年目なりしとか、庄屋が情にてお久米の切られし場處にかの塚建てられ、「さをとめ塚」と刻まれてより百幾年にもなる由にて、婆が若い時分より既に緣結びの神様なりし。

「野菊を挿したのは村の娘などが仕事だね、そんなら」と僕は老婆に尋ね候處、老婆は笑つて、

「婆の若い時も同じ事、「お久米爲藏いつ緣結ぶ」とよく歌たものだね。アハ、、、」

「今も其歌が流行るかね」

「小供が今も能く唄て居るのをお聞きなされんかの。十ばかりの何も知らん兒までが歌て居まさァ」僕は坂の上の姫小松のかげにて松葉を掻きながら唄ひし村の小供の歌も或は此哀な歌なるべきかと思ひ候。老婆に別れて僕は再び早苗乙女塚の方へと立かへり候時は日も西に傾きて、丘の小松の頂かすかに夕日殘り居候頃とて野はさびれ居候。早苗乙女塚の前の野菊は秋風に吹かれて心ありげに點頭き居候。僕は暫く此さびしい谷を眺めてさをとめ塚の傍に立ち居候處、坂の方より彼の村の小供等三人、松葉を負ふて此方に來たりしが、僕を訝かしげに見て、こそ〳〵と彼方に走りゆき申候。

僕は何ともいへぬ哀を感じ申候。ふと氣づきて野菊の花一輪摘み取り候が則ち今此手紙に挿みて貴孃に送る品に御座候。」

* * * * * * * * * *

私は此手紙を讀み了はつて、うれしくも悲しくも感じました。お久米が切られたは十九才、私が此手紙を讀んだ時も十九才、その上お久米の當時の樂しい月日は私の當時の樂

しい月日と同じ事でありましたから、しみ〴〵お久米を哀に思ひました。私どもの縁の目出度いのも其故だらうといつも良人が申して居ますが、さうかも知れません（完）





西國巡禮

此文章は宮城野小萩女史一家が昨年七月下旬より東京を發して故郷鹿兒島へ歸省し且つ九州諸國を遍歴し八月十九日東京へ歸省までの走り書の日記の一節を其儘に選錄したるものなり、蓋し日向國鵜戸山紀行文は其母なる小萩女史の手に成りしものにして日記は其孃君の筆に成りしものなり

七月二十九日夜中から降り續きまして此の朝は又た一層烈しき雨音でした。六時頃に松本さんがおきて來て「どうなさいます」と仰有ましたら、お母樣が「可成お伴を願ひませう」おば樣も「雨のふる方が却て涼しくてよろしいお辨當も出來て居るから御出でなさい」と仰有る、そんなら行ませう御連は圖師圓一さん、後藤嘉三郎さん、河上善藏さんたちです、私は雨が降るからお内でおさのさんと遊びたいと思ふて居るとおばさんが仰有るには交る〳〵に負へばよいからお連れなさいと仰有ましたけれども參りませんでした、昨日面

白いなりをしてお出掛になりました中でも園師さんは竹の皮笠を被つて毛布を着て變な御風でした、それから私は暫時飯事をして遊んで居ますと皆さんがお内の御親類へ御葬式にお出掛になるから一緒に行きました、皆白い手拭を被るのです、行きには草履を穿いて歸りには跣足ですから石高い道で足が痛みました、それから又遊んで居ますと夜十時におかあさまがお歸りになりました。

是からは母様がおかきになりました。

鵜戸山紀行

七月二十九日午前七時大雨の中を浴衣にて鵜戸山に出立ち申候行手の山には皆な一定の奇形をなせり、先づ梅沙には至る處奇巖屹立して洗つては又去る海水の清さ面白さ、岩間に盥をあびつゝ遊びたらんにはと存候此岩間には牡蠣多きよしに候遠くの沖を見渡せば、大島こゝろばへ親かきせねばはたかばへ、雀ばへ等違て風景の畫も多し賞嘆の外無之候此島々のほとりには蟻の還多しと濱に沿ふて行く程に廣戸川の決する所に渡し舟あり渡守が簑笠きたる風情わはれにて道の程遠からぬ山の端には霧立ちのぼり右なる大洋に雨のふる樣向ふの松原には千本の松枝をかわし雨にぬれたる樣一きはみどりうるはしく海の景山の景川の景雨の景晴るゝ景樂め得たり今此舟中の一瞬時、廣戸川にて一二月

の頃白魚多しと油津の市中へは此川より人工にて水を引たり、稱して堀川といふ、山際に岩屋二つあり、權現を祭れり、六部などの燭を取りて詣づるあり、是は乞食の常宿とかや、夫より磯づたひに行く程に左手の竹藪に交りたる木の間に小舍同樣の住居一軒有之候、何村と申候やら極めて僻地と察せられ候、我等通るを見かけて皆出來り長き竹を杖つき見物致居候、一族皆裸躰にて唯腰の週圍に僅の切れを纏ゐ居るのみにて顏色の異る所より總て內地の人とは存じられぬ程故思はず笑ひ出申候、されど又彼等も我等の異風を見て何れの人間共なりと怪み居候やも難計候夫より小浦と申す所にて一茶店に休み申候處、蟹の庭前に多く遊ひ居候を啓さんたちに見せたく存候、屋後に漿酸只二つ出來居り候を老翁は諾する老婆は否むを強て高價に求め桃一へのつとゝ致候、此家の番茶は一生忘れぬ樣味よく覺え申候再び滊車にて參り候節は如何にや總て此邊の道は海邊の山腹に一小徑の有之候のみにて路傍の草は高く泥は深し石は多し雨なれば全身を濕ほし晴るれば暑さ烈しく足は弱し呼吸は迫り漸くにして一茶店に息ひ汗を洗ひ申候是より入町坂に登る間に昇り降りにて八町あるなり、此名あるものと存候、行手の山には朝顏に似たる花全山に咲きみだれ居候坂を降る頃より神風と思しきが冷たく吹き來り又所定めず鶯の都にしらぬ秘音を囀るには氣を奪はれ足も運び不申遠く一行に後れたるに心づき足元を見れば前に進まぬ泥足と汗に濡れたる單衣一枚にて魂のみは天國に淸遊致居事の

笑止さよ。此の所は岬にて望遠館といふ茶店の外に人家無之獨り神官の高橋といへる人滿目の絶景を占領したる住居を搆へ居候、是より白砂を踏んで社務所の前を過ぎ皇族下乘の札を見て汚れ草履と破れ足袋とを脱ぎ置き朱塗のそり橋を渡り石橋を降り左に向つて鵜戸神社を拜し候、鵜茅不合葺尊を奉祠する所にて神殿總て朱塗に金箔を鏤め大なる岩屋の中に安置し奉りたる所に御座候、此の窟屋は東西二十一間南北十六間白砂と花崗石を布き天上は百花を以て織り上たる錦の如くにて迚も岩石とは心得られぬ美麗さは古色を帶び居申候所々に水の落つる處有之候、社の後にも蝙蝠の多く群れ居りて時々顏などに觸るゝこと有之候、岩に數多く集り居り候て一二疋宛飛び去るを薄暗き所にて見物致居候へば恰も固まりたるお萩を一つ宛離し取る樣に相見え申候、社の前は築き上たる如くに大小の岩石を以て高く波打際を疊まれ、碎けては又散る波の花遠くの沖には舟一艘も見えざる其壯快さ、先つ岩角に座し握飯一個食べ終りたれども殘りは方附もせず茫と打眺め居り候間に同行の一人も見えずなりぬ、われはいつの間に此の岩角に來りしやなど夢路をたどる心地にて前に置たる握飯を顧みればあまめと申す虫眞黑に集りて握飯の原色も見えぬまでに襲來致居候、忽ち又た頸の邊に微痛を覺え候故あまめが身を刺すならんと探り見れば松葉の落來りて夢を驚かしたるに御座候、程なく何れよりか詩吟の聲聞え初め稍人心地に復し申候間も無く岩角を手に〳〵碎きて持歸りたれば是を○○塾

へ持行き候、何時迄も止るべくもあらず又皇族下乘にて先のどろ〳〵の穿物を氣味惡くも穿きしめて社務所に至り寳物拜見仕候、天磐笛、日輪玉、潮滿瓊、潮干瓊、銀杖、鵜の大力丸等何れも神代の寳の忍ばれ申候、夫より望遠館に入り足を洗ひ休息致候、同行の方には又午飯を初められたり、芋の冷御飯に候、此處にて草鞋を穿き初め申候、扨ても鵜茅不合葺尊の御母公は御乳なくておはせしかば夫を恥ちさせ賜ひて乳を切捨て海に入りて果て賜ひたりしとぞ、依て人々飴を造りて尊を養育致せしより今日迄村民飴を造りて參詣人にひさぐ事と相成居候、若し參詣人を認めたれば一同申合せて八町坂の坂上に待受けて手取り袖引き買ふ迄は許し不申其内一人の品を買へば後にて其代價を等分する事に相成居る由に候、同行も買はされて竹の先に掛けて持歸り候。是より道を鳥打峠に取り沃肥に向ひ申候、雨は終日降りみふらずみにて濡れては乾はかし乾きても又ぬれ申候、峠の道險にして足は少しく痛み始めたれども夫ともいひきらず杖にすがりて漸く七八合まで登り候處、夕立俄に至り坂は頗急に此の時の有樣は今も我ながら汗ばみ候程の苦しさに御座候、傍に見らるゝ人には嘸やおかしく思されしならん、雨も大抵晴たる頃右手の山に木の葉拂ひをなし居る人多く長き三尺計のなたを持ちて木を切り拂ひ其跡に松を植ると申す事に有之候、此山は牧場にして今も兎雉子など狩るに適し居りし由に候、頂上に達して一茶店に息ひたる時は全く雨も晴れ天青く地清く遠くの沖を見渡せ

ば其景色賞嘆の外無之氣分爽に相成り前の苦勞に比ぶれば雲泥の違ひなど此事ならんと存候、又軍歌などに導かれて坂を下り七曲を廻り益安村にて川上後藤の兩氏に別れ夫より又雨に成り申候、田甫道の最も狹く非常に滑る水の多き凸凹の甚だしき溝の多き所を最も急行に導かれて行く程に都の城より流れ來れる西川の渡に出で其處を跣足にて渡り候處深き膝を越申候、川幅中々廣く候故、水に入りたる一本橋を少し許り渡り爲に橋錢を申受られ候、さりながら沃肥の城下へ入る前に着物と草履の泥を洗ひたる丈は川渡りの利益に御座候、七時頃沃肥の城下に入り申候、松本氏は所々に立寄られたれば小村次官の御尊母へ餘所ながら拜顔致候、圖師氏は奇妙な風采なれば人知れぬ樣にと歩み居られ候、松本氏か二葉に香ばしかりし沃肥小學校に行き日暮なれども井戸の水を飮み又高等小學寄宿舍に行き舊藩主伊東氏の門前を過ぎ歸途に就き申候、日は暮れて途遠く雨は愈烈しく身は疲れ腹は空に車はなくとぼ〳〵歩み居候處に床に饅頭少し相見え候故土産にとて求め候處松本氏が帽子の中に入れて、オヽ腹が減つたの聲と同時に最早初め居られたり、路傍に芝居小舍相見え申候、是は夫婦共が多く集りて興行致し候には無之や、道すがら笠を捕へ又た饅頭を求めなどして緩々と歩み向原より車に乘り十時に油津に歸り申候此の道程は七里なれども平地の十二里よりも難しといはれて嬉しさに信に足の痛き事もいひ出で難く相成候、

翌三十日は終日家に在て松本氏御母堂の談話を聽き申候、

一母さへ見送れば、われは何時斃れてもよい。

一吉凶に拘らず道の遠近を問はず如何なる事情に支へらるゝとも平生に用意し置き義務を果さゞる事なし。

一子を育つるには書をかゝするにも紙面一ぱいの大きさにかゝせよ、こせ〳〵するないつも鳥を籠から放した時の如き氣分を持たしめよ。

一下部を使ふには己を後にして先づ揃ひたる食物を下部に與へよひがみは重に食事より起るものなり。

一自分に二枚あれば一枚は脱いて窮する人に着せよ、又此人を慥なりと認めたる人の貧しと知りたらば衣食小便錢等を與へ職に就くの道を敎へて去らしむべし。

一穢れたるものは脱きたる時直に洗へ來年の事は今年の中になせ。

一吳服を整へ簞笥に仕舞ひ置に不及每夜着て寐る蒲團を綿柔かく清潔になせ、　死ぬ時も其上に終るなり。

右は三時間に得たる談話の大要に御座候以て其人となりを察せられたし、是から又私がかきます皆お晝から濱へ蛤捕りに松本さん圖師さん後藤さん川上さんかお出になりました、皆襯衣一枚て長き竹に細き鎌をつけて頸迄の海へ這入つて砂の中を掻き廻り鎌に觸た時

に拾ひ上るのですが、大勢で三時間も掛つて只三つしか捕れませんでしたから松本さんが獵船の居る所まで泳ぎ付いて一緒に網を曳いて其とれた小魚を手拭に包んで腰に結び付けて又濱を泳いでお歸りになりました、此濱へは小さな川が流込んで居ます土地の小供やおさのさんと此川へ這入つたり海へ這入つたりして着物の濡れるのもかまひませんでした、それから又此所に弘法さんの水と申して清い水が少し宛流れ出て居ります是が油津中の飲水で朝から夕まで桶を擔ふて汲に來る人が絶えません私も度々飲みに行きました餘り永く濱に遊んで居たものですから顔と手が赤くなりて痛み出しましたからお内へ歸りました、其晩休んでからぴり／＼と痛んでたまりませんでした。



誤解



ドオデー原著
蘆花生重譯

去月の海外電報は佛國小説家ドオデーの遠逝を報じ越しぬ。ドオデーはもと田舍の一寒生、靑年壯志を懷て巴里に來り、一日三度の食を得る能はず冷やかなる寢床に飢腸を捫りつゝ詩作に從事せるより、刻苦精勵今日の位置に攀ぢ上り、ゾオラと曲を異にして然も近代佛國小説家の巨擘と稱へられぬ。而してドオデーをしてドオデーたらしめしもの、一半は實に其夫人の力にありと云ふも不可なき程、夫人はドオデー幇助者なりき。小説の趣搆、人物の撰擇文字の配置、一として夫人と相談し、夫人の批判を經たるものにあらざるはなし。加ふるに音樂に長け、家政に長じ、實に殆んど摸型的

文士の妻なり。ドオデー常に曰く、余が今日の成功一半は是れ細君の力と。
夫妻の間愛の一致あり、事業上インテレストの一致あり、而して趣味の一致あるを得ば、其夫妻は實に幸福なるものなり。然れども是れ實に多く望む能はざる處。殊に青雲を慕はずして白雲を愛し、阿睹を輕んじて一意美と眞とを追求する者にありて然りとなす。ドオデーの如きは實に希有の厚運を有するものなり。希有の厚運を有するドオデーは世間一般普通の文人美術家が多くは此厚運を有する能はざるを憾みとし、即ち「美術家の妻」と稱する書を著して此憾を述べぬ。此處に譯する「誤解」は篇中の一章なり。
誤解歟、誤解歟、世間、幾箇の家庭がよく此惡魔を排し得たる。唯夫れ趣味一致せず從て同情の同じきが爲めに、夫妻共に好個の人物にして遂に其夫妻たらざる者多かる可し。なぞ獨り美術家の家庭のみならん。
げに此篇を譯して、一は以て聊かドオデーの永逝を吊し、一は以て家庭の戒とす。

裏　細　君　記

如何したんだら？何が氣に入らないのだろう？本當に分かりやしないわ。妾ア精一杯其人に好くしたのだもの。其はもう有躰に云ッた所が、妾も詩人なんかの細君になるより

も、辯護士さんとか役場の書記さんとか今些と眞面目な確かりした商賣の人に縁づき度かッたのだけれ共、良人がつひ一寸氣に入ッたものだからねエ。些と浮ひた様だつたけれども、好いた人、容子の好い人ではあり、加之少しは財産も有ッて居るし、結婚が濟むだら詩は作るにしても何か外に宜い役にでも就いて、樂さして呉れるだろうと思ッて居たのだわ。良人も其頃は妾を好いて居た様だッた。妾が田舍の叔母の宅に居た時分、尋ねて來ては宅の小綺りとしてお寺の様にちやんと片附いて居るのを褒めちぎッて「奇妙だ！」なんて言ッて居たわ。それから笑ッたりして、自分で讀むだ詩だの小説だのから色々な名を引張り出しちや妾にくッ附けるのだもの。本當に此丈は些とばかり可厭な氣持で、今些と眞面目にあれば宜いのに、と思ッたこともあッたよ。でもね、愈々結婚して巴里に住むで見る迄は、まさか二人の性分が斯様に違ふとは思はなかッたよ。

妾は何でも小綺りとした家を持ッて乾淨と暮したひと夢にまで思ッて居たのに、良人は何の役にも立たぬ塵埃だらけの古道具や、古ゥい色の褪めた帳幄なんかを直ぐと部屋に持込んだよ。何でも斯様な風さ。譃の様だが、叔母さんから貰ッた奇麗な柱時計や、學校友達の呉れた彼の立派な額縁のついた書さ、皆な押入れに入れさしたよ。此様なものは見るも嫌だとさ。本當に譯が分からないぢやないか。それから其また書齋と云つたら、木切れだの、燻ッた古書だの、見ると赤面する様な塑像だの、何の役にも立たぬ種々な

古道具、水の漏る瓶、不具のコップ、錆びた燭臺だの、めッちやくちやにぶち込んであつたよ。妾の美しい紅木製のピアノの側に眞人が持つて來たピアノッて云ッたら、光澤は剝げてしまひ、諧調は半分なくなッた、小さな、古ッぽけた、音もしない位のものさ。それでね、妾もそう思つたのよ「オヤ〳〵!」それちや美術家つて云ふものは、少うし氣が狂ッて居るのかしら?、無益な物ばッかり大事にして、必要な物は何とも思はないのかしら?」

それから其御友達ッたら、本當にひどいのよ。櫛も入れないと見へてね、髮毛も鬚髯ももぢや〳〵ッと生へかぶつて、汚い鬚髯で、妾の前でも無遠慮にスパ〳〵煙草を燻べる人達だよ。話を聞くと不快になるわ、まるで考が違ッてるのだもの。一寸話をするにも、長文句で仰山な事ばかり、此も尋常な手輕な所はないよ。其癖禮儀作法は些も知らなくッて、十遍も二十遍も御馳走しても、禮に一とつ來るぢやなし、返禮もしなければ、正月になッてもカード一枚菓子一とッ贈たこともないわ。かいむ〳〵ないわ。中には妻帶した人もあッて、夫婦連れで來る者もあるかね。其風ッたら、本當に見せて遣りたいわー平生なのに、其御裝飾さ、妾なんざあ眞平だわ。それに其狀態は、法も格好もあッたものぢやない、髮はトら〳〵、裙は曳ずッて、其まあ洒蛙〳〵して出すぎた事ッたらないよ。女役も跣足と歌ッてのける人もあれば、御師匠樣見たいにピアノ弾く先生もあッ

て、何でも角でも男同然に話すのだもの。ねエ、此樣な理窟があるものかね。眞面目な者なら、お嫁入でもしたら、ねエ、家持の事ばッかり考へるのが當然だわね。それでね。良人が妾に何故音樂を已める〳〵ッて苦情云ふのだから、妾も其樣言ッてやッたんだわ。何も別に音樂のこい小娘の時分にや音樂も好いけれどねエ。打明けた所が、其樣毎日日にらピヤノばッかり彈いて居ちや可笑しいわ。妾アよッく知ッてるわ、良人の苦情は此なんだよ、妾がね彼樣な妙な人達と一處に居ちや厭否だと思ッて良人を離さう〳〵にかゝッて居たからだよ。「御身は己の友達を悉皆追ッ拂ッたね」と何時も斯う譴るのだよ。はい、其樣ですよ、妾は些も其が惡いとは思ひませんわ。彼樣な奴等は到頭良人を狂にしなくちや置かないのだもの。彼奴等が去ッてしまふと、良人は詩を作りながら彼方行ッたり此方來たり何か聲高に喋舌ッて、夜深すこともあるよ。人が騷ぎ立てなくたッて、自身丈でも最早餘程の變物の癖にねエ。本當に良人の御蔭ちや、如何な目に遭はされたか知れないわ。朝ッぱらから突然に部屋に來ちやア、「おい、早く、着物換へろ、田舍に行くんだ」とさ。其樣すれば、裁縫も家事も何もかも拋擲ッて、馬車に乘ッて、汽車に乘ッて、山ほどお金を使はなくちやならないわ。ねエ、經濟の事ばッかり考へてる此妾がさ！何を云ッても、一年一萬五千法ちや巴里に居ちや金滿家とは云はれないし、子供一とつ育てる事も出來ないからねエ。と云ふと、良

人は初めは笑ッて妾を笑はせにかゝッたけれ共、妾がちやんとして眞面目になッて居るものだから、やれ妾は平凡だの家持好きだのッて矢釜しく云ふのよ。ねエ、妾が芝居嫌ひ、音樂會嫌ひ、それから彼樣な無分別な、放埒な、貧乏書生の寄り集まる美術家會に引張れるのが嫌ひだッて、何か惡いのだろう？

此でも些は譯の分かる樣になるかッと思ッて、成る丈彼樣な破落戸連中を遠くして、要になりさうな、分別のある、身分の確かな人達を寄せる樣にしたかね。駄目だよ。旦那樣が御退屈だもの。朝から晩まで屈托顔ですもの。一寸御客でもして、作法通り御茶を出したり骨牌をしたりすると、其處へ出て來る良人の顏ッたら！其まあ御機嫌の惡さッたら！差向きでも、矢張此樣ですわ。でもね、妾は何角と心をつけてね、「何か書いて居らッしやるものを讀むで頂戴な」ッて言ふのですよ。さうすると詩だの歌だの讀むで聞かせるのですが、些とも分かりやしないでせう。でもね、面白いと云ふ風して、此處其處口を入れると、其かまた屹度窘められるのですわ。夜晝書いて、一年もかゝッて、やッと詩一卷しか拵へないのに、其がまた些とも賣れないわ。でね、妾ア何か今些と譯の分かる、儲の行く事をしたら宜からふと思ッて、譯を述べる積りで「それ！御覽なさい！」ッて云ッたら、良人はそれは〳〵非常怒ッて、其後ちやさつぱり鬱してしまッて、本當に妾も氣を揉んだのですよ。妾の友達が云ふには「御身、其はきまッた職業がないから其樣

に騷いだり機嫌が惡かッたりするのだよ。今些し仕事をしなすッたら、其樣に騷ぎなさる事もあるまいよ」ッと斯樣言ふのです。

其處で、妾は勿論緣家親類殘らずかゝッて、何か役に就かせやうとかゝッたので、それ、は〱天地も動かす程に働いてね、御役人の奥樣達や區長さん達は何遍尋ねて行つたか知れない、大臣さまの御役所までも入り込んだのですよ。實は内證でまとめて良人を驚愕させる積りでね。「此度こそは喜ぶだろう」ッと斯樣思いましたわ。夫れから到頭大きな印を五も捺いた奇麗な封筒に御辭令が入つて來たものですから妾ァ最早飛び立つ程嬉しくつて、自分で良人の机前に持つて行つたのですよ。ねエ、此があれば後々の爲は勿論きまッた仕事で、慰にもなり、安心もし、如何樣に安穩で好いか分かりませんわねエ。處が、如何したと思ひなさる？「失敬な、勘忍しないぞ」ッて、大臣樣の御辭令を千片〱に扯裂て、ガタンと戸を閉めて、走り出てしまつたのですよ。

本當に、斯美術家ばかりは可愛想に頭は錯亂して、世の中を逆に〱と暮らして行くのだは！、斯樣な人が如何なるものですかね。妾もトックリ良人と話して、譯を言つて遣りたいと思ふのだけれ共、駄目だわ。「彼人は狂人だ」つて言つた人があつたが、本當に左樣だよ。斯樣な人には話したッて如何しやう？話がまるで違ふもの。先方も此方が解からなければ、此方も彼方が解からなひのだもの。それに斯樣坐つて睨み合つて居なくち

やならないわ。オ、彼の眼の悪さうなこと、でも妾はドウしても良人が思い切れない。本當に辛ひわ。

表主人記

余は何事も疎め慮り用心に用心をなしたりき。巴里者は余が娶るを欲せざる處、巴里の女には余も懲けばなり。富める妻は娶るを欲せず、富める妻は奢侈にして且矢釜敷からんことを思へばなり。余はまた親戚の係累を恐れたりき、人を壟斷し幽囚し矮少にし閉塞する恐る可き俗情の網を恐れたりき。余は吾夢想の實現を吾妻に見たり自から謂へらく「吾妻は渾てのものを余に受く可し」と。此單純なる心を生ふて育てゝ以て美を觀せしめ此純潔なる靈に余が熱心希望を吹き込み、畢竟此石像に生命を與ふる、其樂は果して如何なる可きぞ。實を云へば、吾妻は、眼大きく穩やかに沈みたる、横顔の正しくして希臘風なる、其和貌―稍截然として嚴しきに過ぐるも、年若くして薔薇の顔色美しく、髮ふさ／＼と打蔽ひたる、爲めに柔らげられぬさへも、何處やらに石像の風ありき。殊に嬉しきは、其音聲に微かなる田舍の調子ありて、眼を閉ぢて聞けば宛ながら樂しき子供の頃も思ひ出でられ、人知らぬ片田舍の靜けき生活の仄かなる響きを聞く心地したりき思はざりき、此調子今は聞くに得堪へざるに到らむとは。然れど其頃は余も信仰を有し愛して樂しく、且心もいよ／＼然る方へ向ひ居たるなり。著作の熱心熾に燃へ居たれば

結婚間もなく余は新に一篇の詩に着手し、夜は日間作る所を吾妻に讀み聞かせたりき。余は彼女をして全く余と共に生息せしめんと欲したるなり。最初一二遍は、彼女も「奇麗ですことね」と言ひき。余は此子供らしき賞賛をも嬉しと思ひぬ、彼女終には吾生活の呼吸とも云ッ可き其ものを更に了解するの時あらむことを望みたればなり。

憐む可し。彼女は如何に退屈なりしならむ。余は自作の句を讀みて、更に之を說明し、其美しき呆れたる眼の中に待ちに待ちたる一閃の光今や耀くと待ち望みしなり。余は細君に意見を述べしめ、愚かなる言をば看過して、偶よき思付もあらば之を採らんと欲せしなり。余は彼女をして眞に吾幇助者たらしめ、眞に詩人の妻たらしめんと希ひき。然れど何の効かあらむ！彼女は更に解せざるなり。余は大詩人の作中にても尤も强きもの尤も切なるものを擇みて讀み聞かせたるも、何の効もなかりき。玲瓏たる戀歌の金韻も彼女の耳には霰の如く冷やかに等閑に落ちぬ。憶ふ曾て「十月の夜」を讀みつゝありけるに彼女余を遮りて更に眞面目なるものを求めぬ。其時余は彼女に對して、此世に於ては詩程眞面目なるものはなし、詩は人生の粹にして、赫々たる光の如く人生の上に浮み、一たび震へば言語思想を化して高からしむるものなることを說明せんと試みたり。吁！彼の女の美しき口如何に冷笑を湛へ、其眼如何に昂然として下し視たりしよ。小兒か狂人の言の樣に彼女は思ひつらむ。

嗚呼余が力を盡し無用の辯を費やしたること、幾何ぞ。何を爲すも効無りき。余は斯へず彼女の所謂常識所謂理窟なるものに躓きたり。常識理窟、是ぞ乾き果てたる情と狹き心の常に用ふる口實なる。彼女を退屈せしめたるは獨り詩のみならず。我等の未だ婚せざるや、余は彼女に音樂の嗜みあるを信じ居たり。彼女は其彈奏する曲を了得するものゝ如くなりき。勿論師匠の附點を假るにせよ。然るに彼女は結婚纔かに濟むや直ちにピアノを擲ひ、音樂を廢しぬ。年若き妻にして娘の頃の慰を打棄つる此より哀しきものあらむや。咨嗟み、役終れば、女優は衣裳假髪を脱ぐ。皆是れ結婚を目途になしたるなり些かの才識も、美しき微笑も、一過し去るの優美も。彼女の早變りは實に瞬間の事なりき。初めは余も望みたりき。假令余自から彼女に趣味を與ふる能はず共、此不可思議なる巴里の媒介により、其の不知不識心目に及ぼす美化的影響により、彼女如何に拒むも美の智識と美を愛するの情は自づから彼女に到る可しと。然れど書を開く術をも知らず畫を見る可き道も知らず、常に退屈して常に何も見ることを欲せざる婦をば如何にす可き。余は程なく解し得たり、余が側には唯能く働きて且經濟なる頗る經濟なる家持女房を侍らするを以て甘んぜざる可からざるを。ブルドオンの所謂女、其女に過ぎざることを。其れとあらば余は之に循て執る可きの方針ありたるなり、幾多の美術家は實に同樣の境遇にあるなれば！然れど彼女は此端役に滿足せず。

少しづゝ、狡猾にも、默しつゝ、彼女は悉く吾友を遠けたり。我等は彼女の前なるが爲めに話をあらためず、此前の如く談笑しぬ。然れ共彼女は我々が美術家的誇張、我々が一個の思想を更に花やかなる形に現せむ爲めに故らに異裝をなすの逆說激論、其の反語をも解せざれば、其意象をも悟らず。斯の如きは唯彼女を焦たしめ、惑はしめたるのみ彼女は應接間の靜かなる一隅に坐しつゝ、耳を傾けて言はず、斯く忌はしき聲をば如何にして一人宛遠く可きかを思案せり。外には慇なる歡迎ありしも、室内已に一道寒冷の氣流るゝありて、戸已に開き辭し去る可き時已に到りぬるを知らしめたりき。

吾友已に去るや、彼女は己が友達を以て之に代へぬ。余は何時しか、美術も知らざれば詩は「金にならず」とて嘲り惡む奇怪なる先生逵の重圍に陷りたるを發見したり。彼等は戲曲小說をダースにて製造する流行作者の姓名をわざと余が前に唱へ、「誰某は大層金を儲ける！」と云ふ。

金を儲ける！此奴輩が肝腎とする所畢竟此のみ。哀しい哉、吾妻も斯く思ふ一人なり。斯る情け無き空氣の中にありて彼女の田舍的習癖と卑劣狹隘の見は殆んど信ず可からざるの吝嗇の爲めに、いよ／＼其厭ふ可きを覺ふ。

一年一萬五千法！余は思ひき、此歲入あれば明日の憂なくして生活するを得可しと。然らず。彼女は常に呟やくなり、經濟改革利子加增と口癖の樣に云ふなり。彼女が斯る無

味至極の些事に余を援はすが爲めに、著作の欲も樂も次第に涸れ行くを覺へぬ。時としては彼女余が几前に來り、蔑如として散亂せる書きかけの草稿を翻して此の僅々兩三行に費やしたる時間を算へて、「此ッきりですか」と云ふなり。吁、余若し彼女に惑たらむには、幾多の年を經て漸く贏ち得たる榮光ある詩人の名も、今や俗文學の汚泥に沈みつらむ。而して余は此婦人に最初吾心を聞き、吾渾ての夢を打明けたりと思へば、余が金を儲けざる爲め彼女の余を輕蔑するも實に結婚の初よりの事なるを思へば、余は實に自から恥ぢ彼女の爲めに恥づ。

余が金を儲けずと！何事も此にて分るなり、彼女の余を雖責視の眼光も、利の多き俗事俗業を貸め立つることも、而して結局彼女が此頃も何かは知らざれ共或る政府の官職に余を就かしめむと試みたることも。

然も此には余も抵抗したり。余が防禦の道は唯惰力の一あるのみ、何の攻擊にも何の勸誘にも無頓着の一法あるのみ。彼女何時間喋舌る共可し、其冷笑を以て余を寒殺するも可なり、余は常に彼女を思はず、また思はざる可し。吁我等は此極に到りぬ。共に婚して、相共に棲む可き定劫を受けながら、我等の間には幾里の距離あり。一歩進まば或は相近づくことある可きも、我等は共々に倦み且失望し果てゝ、其一歩を進むる氣力もなし。忌々しきかな。

（完）

（挿付の一）

日用百科全書

正價　壹冊金貳拾錢●六冊前金壹圓拾錢●拾貳冊前金貳圓拾五錢●三拾冊前金五圓三拾錢●郵稅壹冊六錢づゝ

全部卅冊　洋裝菊判　壹冊紙數二百六拾餘頁　美本

子爵北小路隨光君題辭　竹屋子爵夫人雅子君題詠
西周君夫人升子題詠　佐々木信綱君題詠

第廿五編　日常行爲法則

出で丶社會の人衆と交り、入て自家の職業に從ふ、日常の行爲豈法則無くして可ならんや。今や社會の事日々に繁く、吾人之れに應ずるの用意なかるべからず、此編の出る之が爲めなり、蓋し吾人の指南車たらん。

全壹冊洋裝　二百六拾頁　口繪寫眞入　正價金廿錢　郵稅六錢

第廿六編　致富要訣

陶朱猗頓の富、蓋し其富を致すは原あり、ロツシヤイルド、ヴアンダアビルドの富、亦豈其原無らざらんや。此編之れが原を說いて極めて詳密、讀者を指導して正に富の門に入らしむ、請ふ一本を購ふて、其秘訣を知り給へ。

全壹冊洋裝　二百六拾頁　口繪寫眞入　正價金廿錢　郵稅六錢

●日用百科全書全部目次●

第壹編　和洋禮式
第貳編　茶の湯と生花
第參編　實用料理法
第四編　家政案內
第五編　琴曲獨稽古
第六編　衣服と流行
第七編　裁縫と編物
第八編　住居と園藝
第九編　勤學と處世
第拾編　育兒と衛生
第拾壹編　俳諧獨學
第拾貳編　通俗書簡文
第拾參編　西洋料理法
第拾四編　旅行案內
第拾五編　聲曲自在
第拾六編　祝辭演說法
第拾七編　作詩自在
第拾八編　作文自在
第拾九編　商業大意
第貳拾編　圍碁と將棊
第廿壹編　作歌自在
第廿貳編　化粧品製造法
第廿參編　書法大意
第廿四編　秘術傳法
第廿五編　日常行爲法則
第廿六編　致富要訣
第廿七編　畫法大意
第廿八編　內外遊戲法
第廿九編　農業大意
第三拾編　工業大意

以上の各編は、皆斯道の大家が校閲せしものなれば、其正確なる言を俟たず、各編寫眞銅版口畫八葉、木版極彩色刷口繪及び挿畫數十個あり、每月壹回發行。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

ドクトル　ビルロート先生原著
ドクトル　佐伯理一郎先生譯補

醫學博士北里柴三郎先生序

◉菊判十三行四十字詰メ◉　總かな附

增訂再版　普通看病學

全一冊

正價四十八錢
郵税八錢
挿圖六十餘箇

本書第二版が第一版に比して其面目を改めたるの主點は其全文を通して傍訓を加へたると新に小兒看護法の一編を增補したると嚴密なる校訂を施し兼て前版の遺漏を補ひたると其版型を大にしたると其賣價を廉にしたるとにあり要するに本版は前版に比して幾多の進歩を致し以て此業に從事せらるゝの諸姉及家庭の衛生に注意し玉ふ人に向ひ好箇の智識を供給せん事を力めたり希くは坐右一本を具へて緩急の用に充て給ん事を

◉發行元　東京市本郷區龍岡町三十四番地　吐鳳堂書店◉

歐文雜誌　極東

定價

一册　金二十五錢
六册（半年）前金　一圓四十四錢
十二册（一ヶ年）前金　二圓七十六錢
此外郵税は一册に就き内國二錢、支那朝鮮の日本郵便局所在地五錢、其他諸外國十錢を申し受く

第二十四號（一月廿日發兌）には增島六一郎氏の「外資輸入と條約」、井上哲二郎氏の「日本の哲學思想」、和田垣謙三氏の「謠曲一角仙人の英譯」、近衛公爵の「日本の貴族」、成瀬仁藏氏の「日本の女子敎育」、佐久間信恭氏の「條約改正と言語」フェチロサ氏の「條約改正後の敎育」、中村桂次郎氏の「日本の文明と西洋思想」等を掲ぐ可し

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

謹賀新年

併て倍舊の御愛顧奉願候

冨山房は續々名篇大著を發行して諸般の參考に供せり新刊最も注意すべし

冨山房は教育界の忠良たり時勢の伴隨者たり而して年と共に面目新なり

合資會社 冨山房

東京市神田區表神保町九番地

電話本局 千〇六二番

冨山房は誠實と勤勉とを旨とし文明先導の機關を以て自ら期す

冨山房は中學師範の教科書を悉く備へり而して新著新刊日として出でざるなし。

冨山房は小學教科書肆として今や進行の途にあり一舉完整期月を出です

改正出版圖書目録

五萬部無代進呈



（明治廿五年九月十四日遞信省認可）（明治三十一年一月十五日發兌）東京市京橋區[illegible]